

# 天神山城 (No.384)

山崎字宮廻 656 番 19 地点

## 例 言

1. 本書は、鎌倉市山崎字宮廻656番19地点における個人住宅地下室建設に伴う事前の埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成20年5月26日～6月17日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。  
調査の主体 鎌倉市教育委員会  
調査担当 滝澤晶子・宮田眞  
調査補助員 安藤龍馬・根本志保  
調査協力者 沼上三代治・渡辺輝彦・天野隆男・伴一明(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。  
第一章・第三章・第四章 宮田眞  
第二章・編集 滝澤晶子
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。  
遺構図版 滝澤晶子 遺構写真 滝澤晶子 遺物写真 滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)  
遺構図 1/40(遺構図の水糸高は海拔高を示す)
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。  
釉の限界線 ····· 調整の変化点 - - - - 使用痕の範囲 ←————→ 加工痕の範囲 <----->  
攪乱の範囲 - - - - 推定ライン ----- 調査限界ライン ·····
8. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

# 目次

## 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	302
1. 調査地の位置	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要 .....	304
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査区の位置とグリッド配置	
3. 基本土層	
第三章 検出遺構と出土遺物 .....	308
第四章 まとめ .....	314

## 挿図目次

図1 遺跡周辺図 .....	302	図7 1号住居址竈 .....	309
図2 調査区の配置 .....	304	図8 1号住居址・2号住居址出土遺物 .....	310
図3 調査区位置図 .....	305	図9 下層遺構配置図 .....	311
図4 グリッド配置図 .....	306	図10 3号住居址・4号住居址出土遺物 .....	312
図5 調査区壁土層断面図 .....	307	図11 包含層出土遺物 .....	313
図6 上層遺構配置図 .....	308		

## 図版目次

図版1 .....	315	図版7 .....	321
A. 調査地点付近 遠景(北から)		A. 調査区北壁土層断面 c-c'	
B. 遺跡全景(東より)		B. 調査区東壁土層断面 d-d'	
図版2 .....	316	C. 調査区南壁土層断面 e-e'	
A. 1号住居址竈(東より)		図版8 .....	322
B. 同上(近景)		出土遺物(1)	
図版3 .....	317	図版9 .....	323
A. 1号住居址竈下層(東より)		出土遺物(2)	
B. 同上 断割り a-a'(南より)		図版10 .....	324
図版4 .....	318	出土遺物(3)	
A. 1号住居址竈 断割り b-b'(東より)		図版11 .....	325
B. 同上 完掘(東より)		出土遺物(4)	
図版5 .....	319	図版12 .....	326
A. 遺跡全景(南より)		出土遺物(5)	
B. 同上(北より)			
図版6 .....	320		
A. 1号住居址竈 完掘(北より)			
B. 3号住居址 完掘(南より)			

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

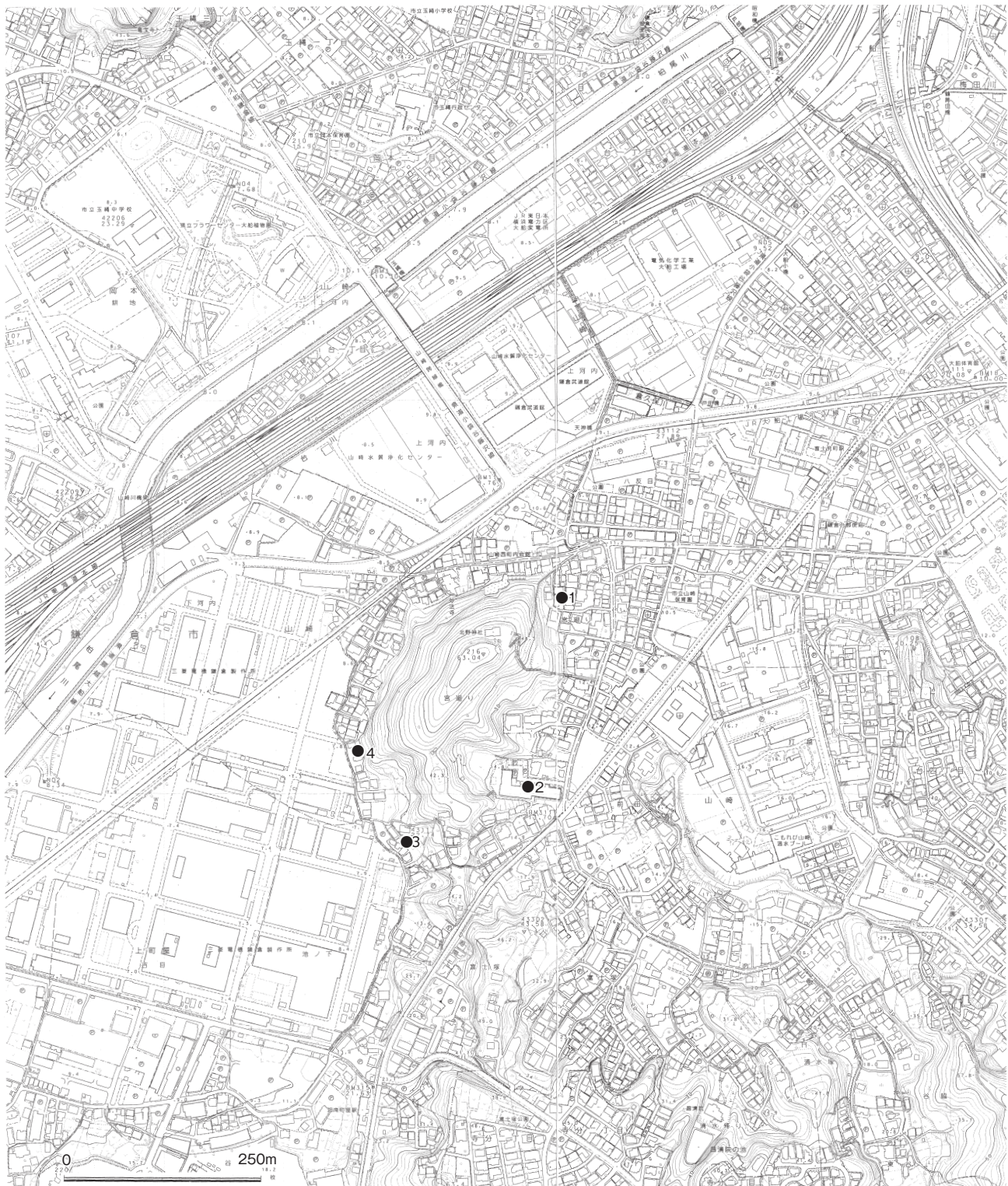


図1 遺跡周辺図

## 1. 調査地の位置 (図1)

本調査地は鎌倉市山崎字宮廻656番19に所在する。JR大船駅を基点にすると南西方向に直線で約1.2kmの距離にある。調査地の北方およそ1kmの距離には、横浜市に源流をもつ「柏尾川」が北東から南西方向に流れており、やがて江ノ島付近で相模湾に注ぎ込む。調査地はこの柏尾川を中心に形成する沖積平野の南端部に位置する天神山(標高63m)の北東山麓付近に立地する。沖積平野の対岸(北側)の丘陵には有名な玉縄城址がある。調査地からの距離は直線で約1800mを測る。天神山は独立丘であるが、南側は鎌倉中央公園付近に頂上をもつ大規模な丘陵から、北西方に延びる長大な尾根の末端部分のピークに当たると見ることができる。天神山の南側の麓には現在市道(旧京急有料道路)が通っており、その敷設の際に南東に延びる尾根線は切通し状に掘り下げられたようだ。その痕跡は道路を往来すると現在も顕著に見ることができる。

天神山の頂上には「北の神社」が建立されている。祭神は菅原道真。勧請年月は未詳だが社伝では暦応年中に夢窓疎石が北野社を勧請したという。しかしこの時期、夢窓疎石は鎌倉を離れておりこの事実はありません。

天神山では太平洋戦争の終戦直後に山頂付近で、縄文早期の撚糸文系土器が採集されたと聞くが現在は所在不明である。また北東側の山裾民家から古墳時代後期(鬼高期)の土師器の坏を主体とする祭祀関係遺物が大量に出土したとされるが、現在は一部を残して散逸してしまったようだ。尚、菊川英政氏が『鎌倉考古33号』1995年2月・鎌倉考古学研究所刊の中で「天神山採集の古墳時代後期土器」として報告している物がそれに該当すると考えられる。

## 2. 歴史的環境

その他に天神山の山麓地域ではこれまでに3地点で発掘調査が実施されてきた。

本調査地から南方へ250mの図1-2地点では、集合住宅の新築に伴う事前調査として、平成7年(1995)1月～平成8年2月にかけて2180㎡が実施された。この地域での調査ではこれまでの最大規模となる。調査の結果古墳前期から人の活動が始まり、奈良、平安、中世前期・後期、近世・近代に至る複合遺跡であることが判明した。特に古墳～奈良～平安期にかけては集落として住居址や土器集中出土地点などが複数検出された。

本調査地から南南西へ400mの図1-3地点では平成5年(1993)に調査が実施されたが、少量の土師器出土があったようだが詳細については不明である。

本調査地から南西へ350m図1-4地点では、個人住宅新築の事前調査として、平成17年(2005)6月1日～17日にかけて34.4㎡が実施された。調査の結果当該地点では弥生終末期から古代にかけての遺物の出土は見られるが、集落の存在を決定付けるような遺構の検出はなかったと報告されている。

以上、天神山及び周辺地域ではこれまでの調査から幅広い時代区分の遺跡の存在が確認されているが、特に古墳時代を中心とした古代の遺構群・遺物が高密度な状態で包蔵されているようで、今回の調査に当たってもそれらの発見が大いに期待される。

### <参考文献>

- 「天神山採集の古墳時代後期土器 鎌倉考古No.33」 菊川英政 1995年2月 鎌倉考古学研究所  
「天神山城の調査 第6回鎌倉市発掘調査・研究発表会」 松山敬一郎 1996年8月鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所  
「天神山城(No.384)山崎字宮廻760番地点 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13」 松山敬一郎他 平成9年鎌倉市教育委員会

## 第二章 調査の概要

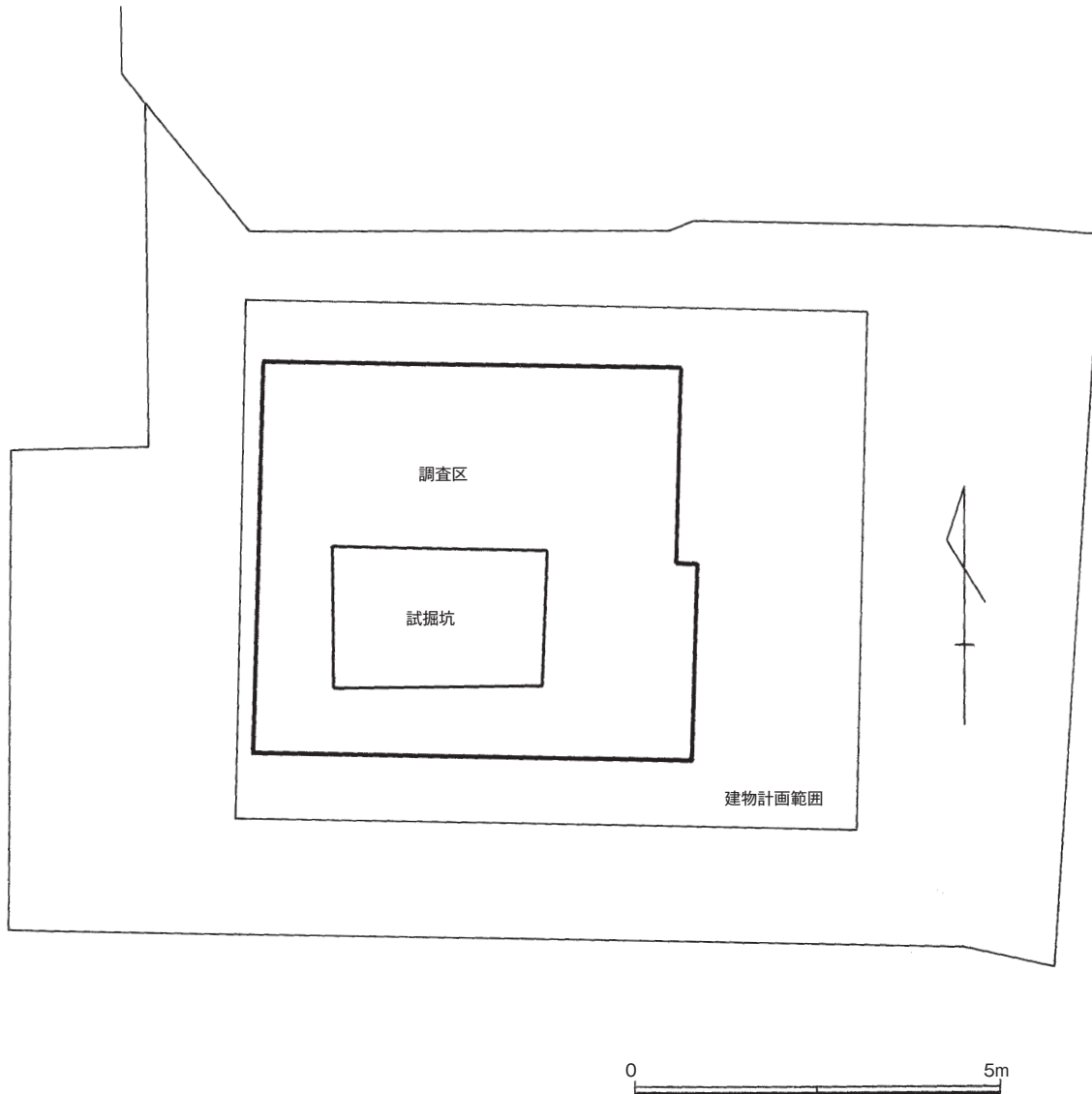


図2 調査区の配置

### 1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市山崎宮廻656番19地点における個人住宅（地下室）建設に伴う調査として鎌倉市教育委員会が主体となって実施された。平成19年12月11日～12月12日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下0～45cm前後から第1面が確認され、それを受け、平成20年（2008）5月26日～平成20年6月17日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は49.07㎡である。遺物は遺物収納箱3箱出土した。

#### 確認調査（図2）

確認調査は敷地内、図2に示した位置に設定し、現地表下120mまで掘削して行われた。「遺物包含層までの深さは0～45cm、試掘坑内では遺構の検出はなかったが、土層中から遺物が多く出土し、白色粘土塊が同土層中に遺存していることから、近くに住居址・竈のある可能性が認められる。」と報告された。

#### 調査経過

調査経過は以下のとおりである。

平成20年（2008）5月

- 26日(月) 人力による表土掘削。西側0cm、東側50cm。試掘坑の掘り返し。
- 27日(火) 表土掘削終了。(調査面積49.07㎡)。鎌倉市教委 松尾来現。
- 28日(水) 測量基準点(2・4級)の現場内への移設。表土掘削後の現状写真撮影。
- 29・30日(木・金) 雨天のため作業中止。
- 6月
- 2日(月) 人力による掘り下げ。出土遺物の撮影、実測。試掘坑内の焦土の更なる拡がりを確認。
- 3日(火) 雨天のため作業中止。

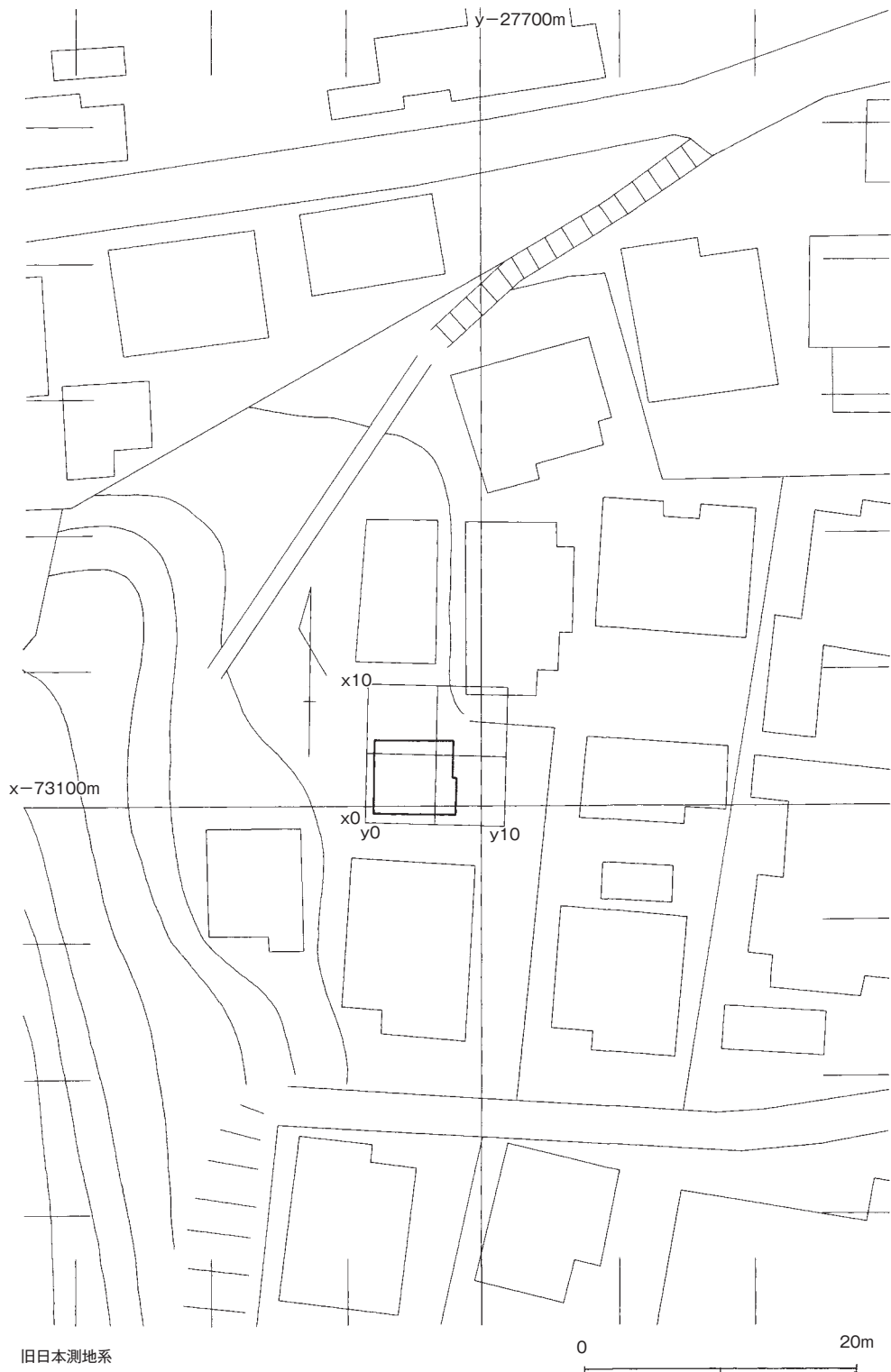


図3 調査区位置図

- 4日(水) 1号住居址の平面プラン確認。掘方西側に竈がつくようだ。
- 5日(木) 雨天のため作業中止。
- 6日(金) 1・2号住居址掘上げ作業。1号住居址写真撮影。
- 9日(月) 雨天作業中止。
- 10日(火) 1号住居址竈断割り。竈セクション実測。2号住居址平面測量。
- 11日(水) 1号住居址完掘。3・4号住居址掘上げ。
- 12日(木) 雨天のため作業中止。
- 13日(金) 3・4号住居址覆土セクション実測。1号住居址床はがし。
- 16日(月) 1・3・4号住居址完掘。3号住居址完掘状況撮影。撮影・測量終了。撤収。

## 2. 調査区の位置とグリッド配置 (図2・3・4)

敷地と建築範囲と調査区の関係は隣地との関係及び安全性を考慮し、図2に示したように設定された。位置は北緯35度20分38秒、東経139度31分31秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図2・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

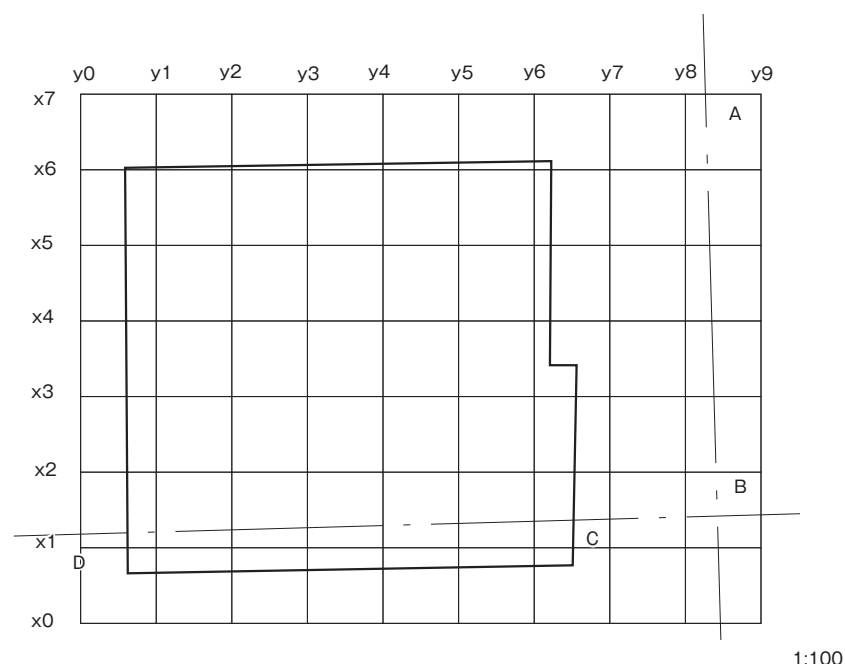
A地点:グリッド(x 6.920、y 8.200) = 国土座標[旧日本測地系](X-73094.511、Y-27700.000) = 国土座標[世界測地系](X-72737.703、Y-27993.314)

B地点:グリッド(x 2.130、y 8.340) = 国土座標[旧日本測地系](X-73099.313、Y-27700.000) = 国土座標[世界測地系](X-72742.505、Y-27993.314)

C地点:グリッド(x 1.380、y 6.610) = 国土座標[旧日本測地系](X-73100.000、Y-27701.754) = 国土座標[世界測地系](X-72743.192、Y-27995.068)

D地点:グリッド(x 1.210、y -0.030) = 国土座標[旧日本測地系](X-73100.000、Y-27708.399) = 国土座標[世界測地系](X-72743.192、Y-28001.713)

グリッドx軸は北から2度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドxプラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。



## 3. 基本土層 (図5)

基本土層は調査区の北・東・南壁の土層断面図を図5に示している。それぞれの測点は図9に記してある。現地表面は海拔20.3m前後のほぼ平坦面。表土層は現地表面から5cm～70cm前後であった。海拔19.9m付近に地山が検出された。土層注記は以下、表のとおりである。

図4 グリッド配置図



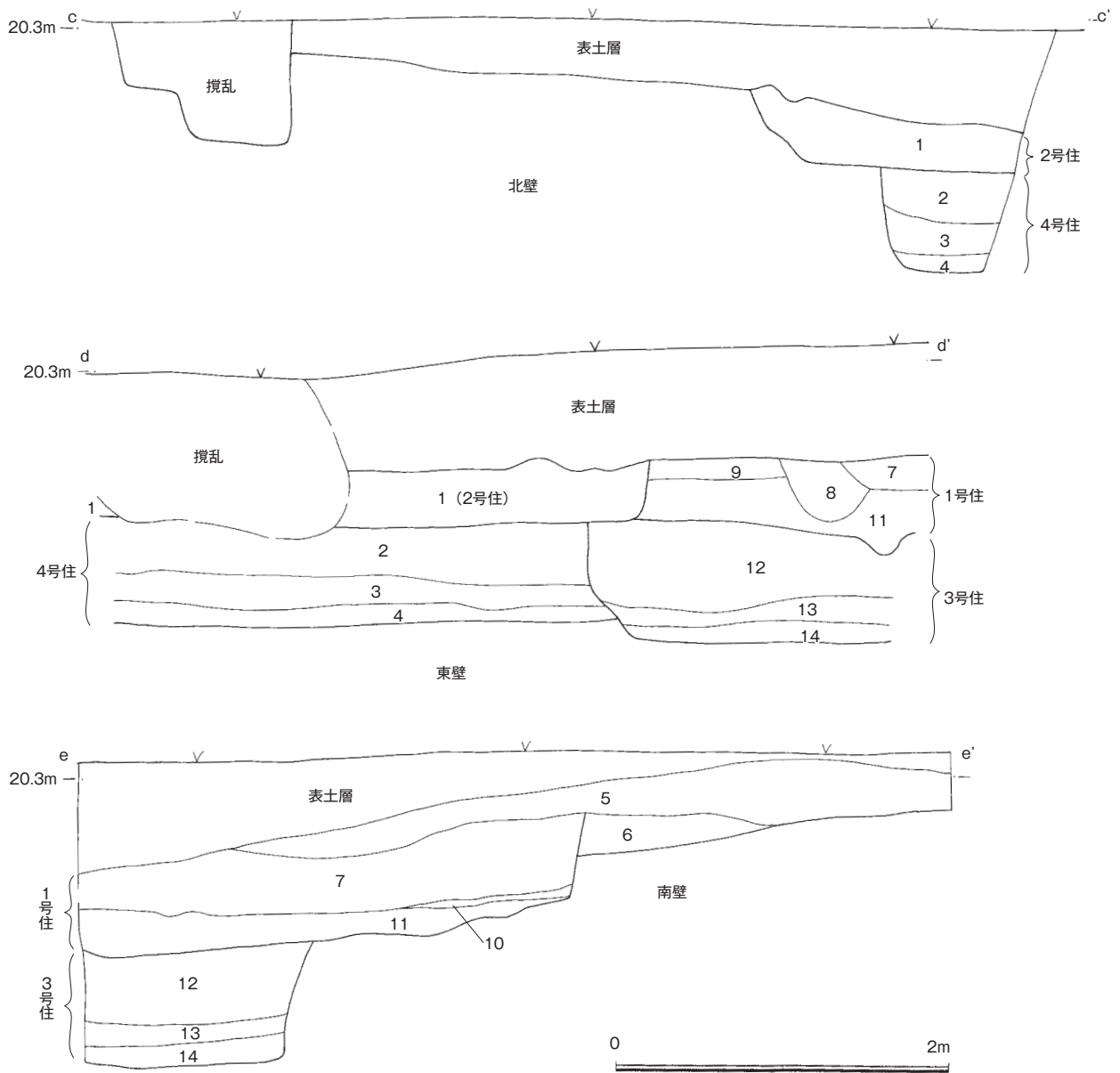


図5 調査区壁土層断面図

番号	色調	土質	内容	締り	備考
1	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・2～3cm大の土丹・土器片	よい	2号住居址
2	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・1cm大の土丹・土器片	よい	4号住居址
3	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・3cm大の土丹(少)・土器片	よい	4号住居址
4	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒(少)	よい	4号住居址
5	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	
6	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・土器片(少)	よい	
7	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	1号住居址
8	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)・土器片	よい	1号住居址
9	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)	よい	1号住居址
10	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・全体に黄白色系の粘土・焼土(少)	よい	1号住居址
11	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	1号住居址
12	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・0.5～1cm大のローム粒・10～20cm大の土丹(少)・土器片	よい	3号住居址
13	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)・土器片土器片	よい	3号住居址
14	暗茶褐色	粘質土	13層より混入物少なく、粘性強い。	よい	3号住居址

### 第三章 検出遺構と出土遺物

調査の結果4棟の住居址が検出された。1号～4号住居址と呼称する。

#### 1号住居址(図5・6・7・9)

x 0～4、y 2～5グリッドで検出された住居址で3号住居址の上方に位置する。北側は2号住居址に切られ、東側と南側は調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が300cm、南北が335cm、最大壁高は西壁で50cmを測る。尚西壁には竈が付く。竈は焚口から煙道方向が100cm、袖方向は80cm以上を測る。1号住居址の南北の軸線方向はN - 7° - Eを示す。

#### 1号住居址出土遺物(図8-1～34)

図8-1は相模型の坏の破片で復元した法量は、口径15cm、器高4.7cmを測る。胎土は粉質で微砂を含み淡い色調の褐色を呈する。口辺部は横なで、体部は篋削り。2～13は土師器坏の口縁部小片で法量は不明。3・5・6は相模型。8・9は比企型で赤彩が施される。9～13は口辺部と体部の境に稜が付き、

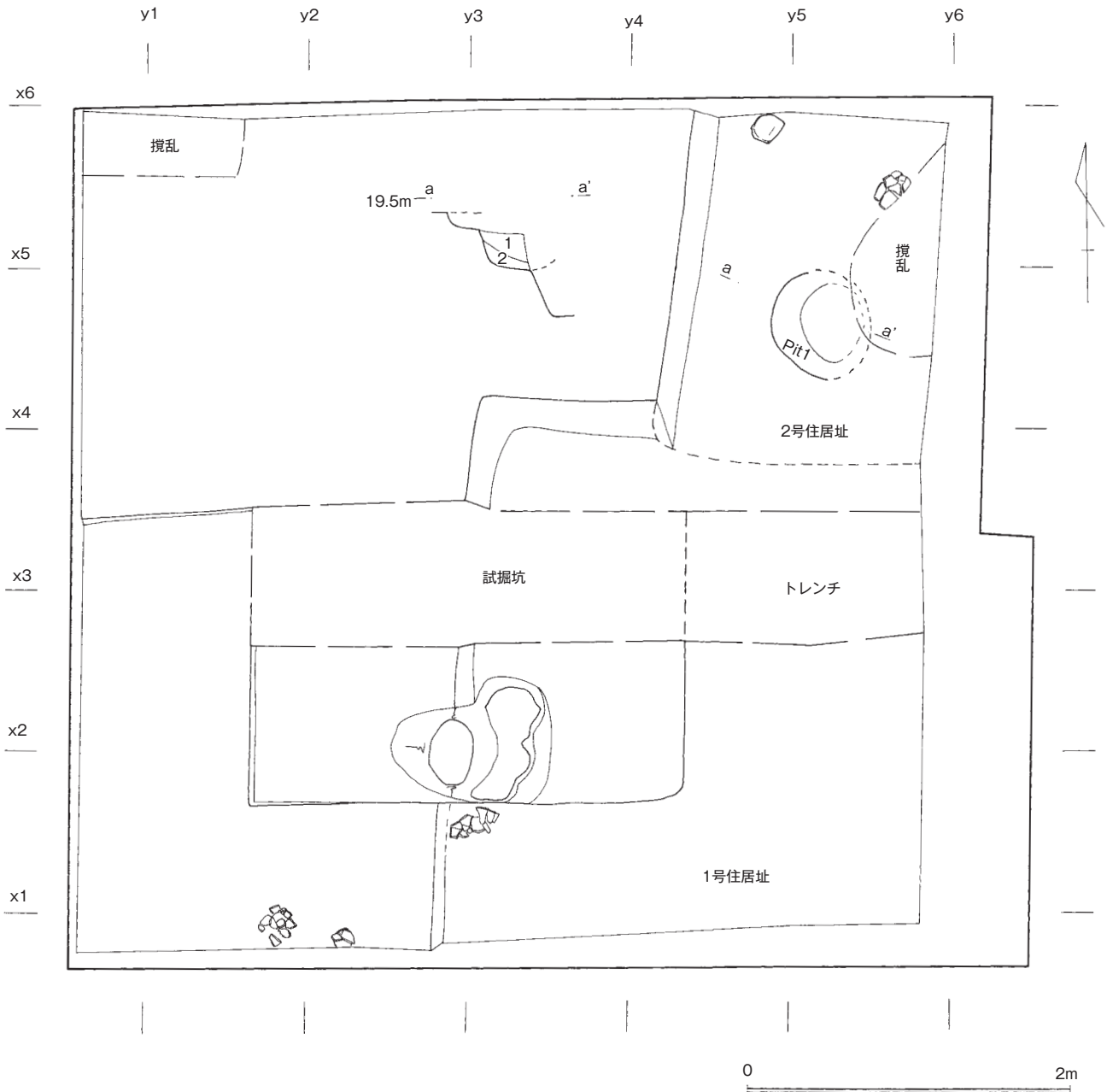


図6 上層遺構配置図

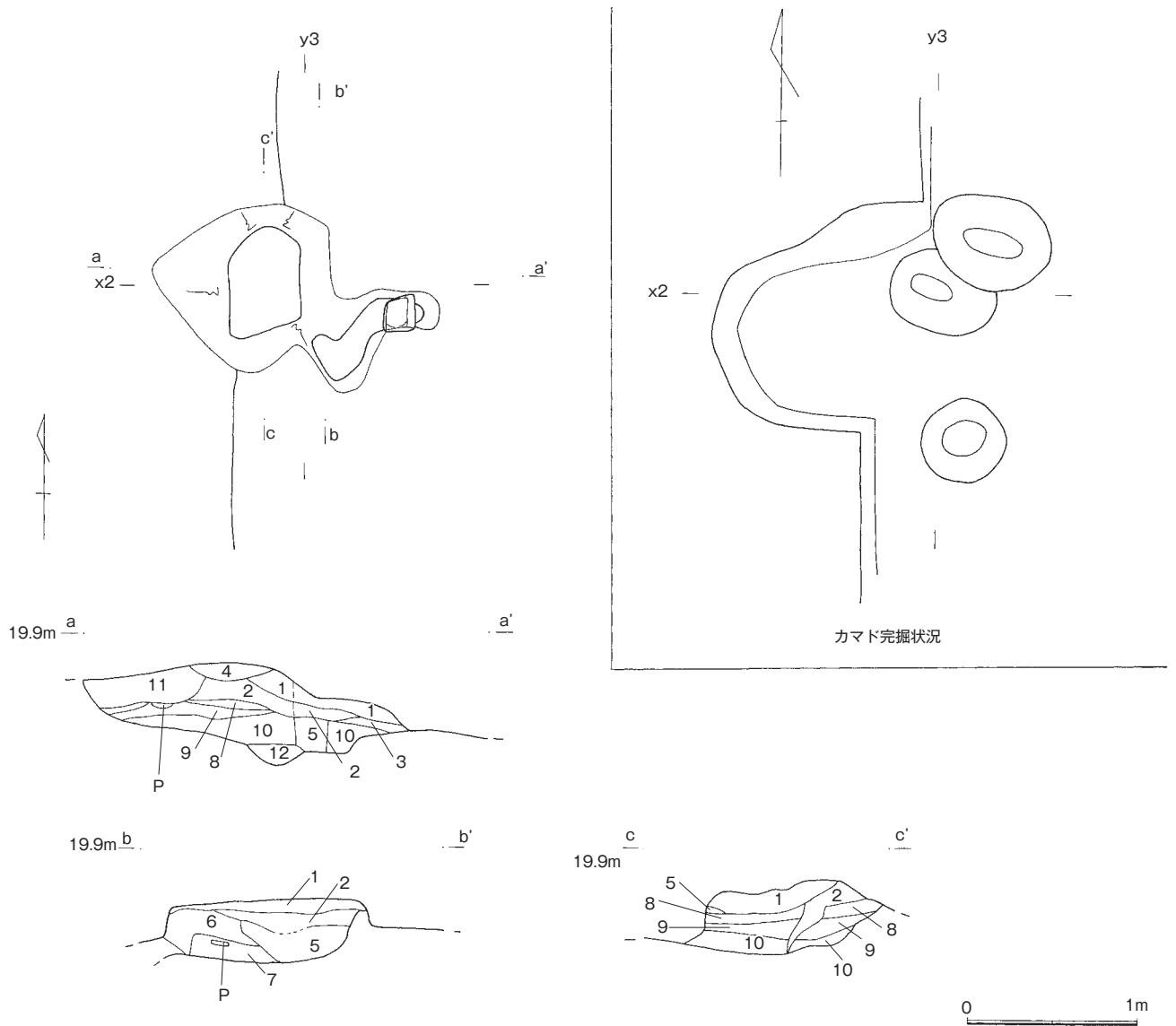
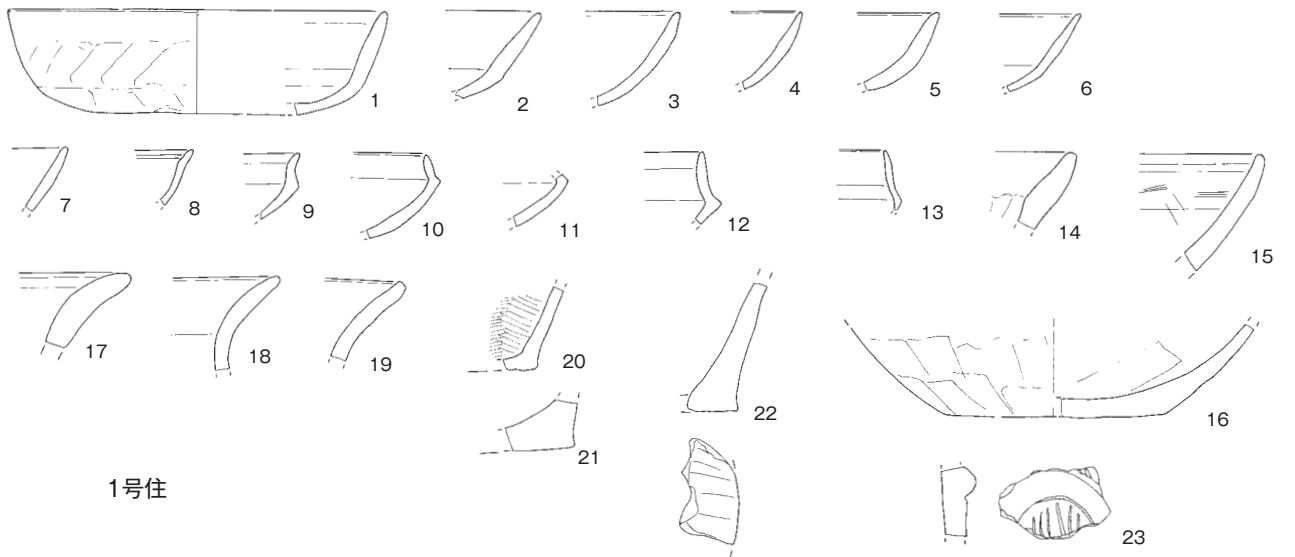


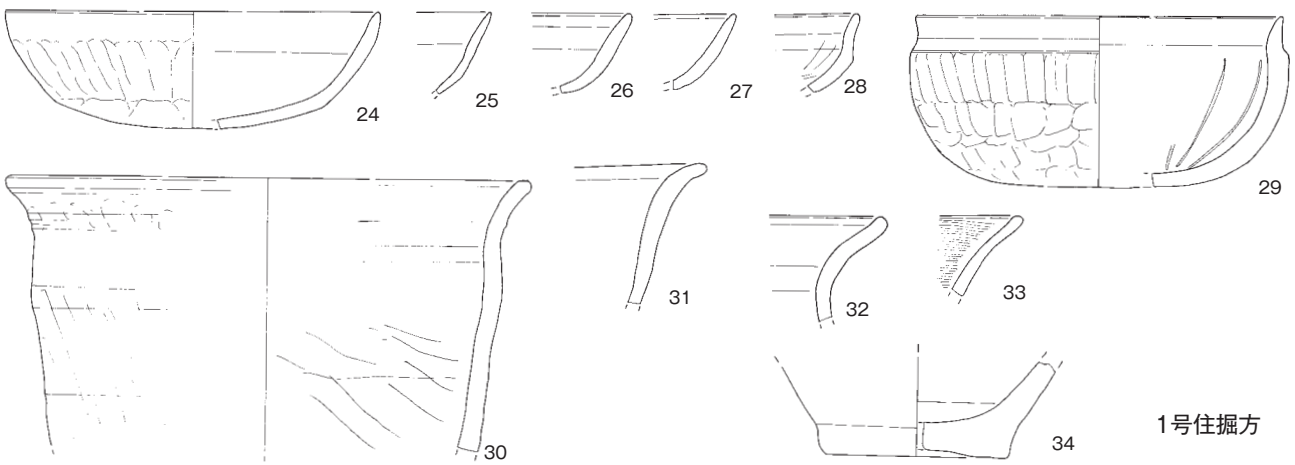
図7 1号住居址竈

番号	色調	土質	内容	締り	粘性
1	灰褐色	粘質土	黄色粘土ブロック・焼土(少)	よい	あり
2	暗褐色	粘質土	焼土ブロック	ややよい	あり
3	暗褐色	粘質土	焼土粒子	よい	あり
4	橙色	粘質土	焼土ブロック	よい	あり
5	黒褐色	粘質土	焼土ブロック	ややよい	あり
6	黄灰色	粘質土	粘土ブロック・焼土ブロックが密に詰まる。	よい	あり
7	暗褐色	粘質土	焼土ブロック・炭化物(少)・土器片	よい	あり
8	暗灰色	粘質土	灰・炭化物・焼土ブロック	やや弱い	あり
9	茶褐色	粘質土	焼土ブロック(南部に特に多)・粘土粒子(北部に多)	やや弱い	あり
10	黒色	粘質土	1cm大の焼土ブロック・炭化物	よい	つよい
11	橙色	粘質土	焼土ブロック(密)	よい	あり
12	黒褐色	粘質土	焼土ブロック・灰	やや弱い	あり

口辺部は稜より内側に立ち上がる。口辺部は横なで、体部篋削り。14・15は土師器鉢の口縁部小片で法量不明。16～22は土師器甕の破片。17～19は口縁部付近の小片、口径不明。16・20～22は底部小片。16は復元した底径8.5cmを測る。内外面共に篋削り。23は縄文土器の胴部小片。混入品。図8-24～34は1号住居址掘方(張り床下層)からの出土品である。24～28は土師器坏の破片で、24は復元した

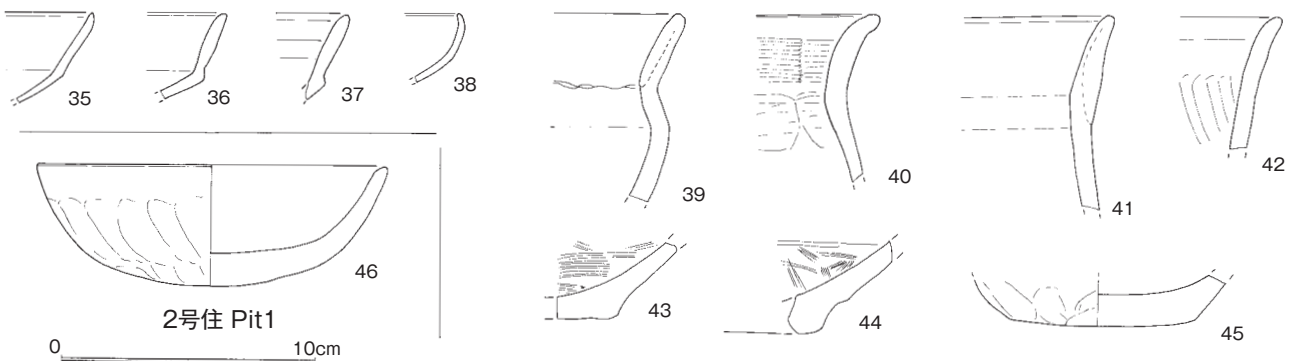


1号住



1号住掘方

2号住



2号住 Pit1

図8 1号住居址・2号住居址出土遺物

口径が15.1cm、底径が8.5cm、器高は4.2cmを測る。胎土は粉質で微砂・雲母を含み、淡い色調の橙色を呈する。口辺部は横なで、下位は篋削り。25～28は小片で法量は不明。24・25は相模型。28は口辺部との境界に緩い稜が付気、外反して立ち上がる。29は土師器碗の破片で、胎土は微砂を多く含み焼成良好。口辺部内外面は横撫で、下位は篋削り、内外面に赤彩が施される。内面には放射状の縦線が篋描きされる。30～34は土師器甕の破片である。30は長胴の甕で復元した口径は21cmを測る。胎土は微砂を含み焼成良好。淡い色調の橙色を呈する。口辺部は横なで、胴部は篋削り。相模型。31～33は法量不明。31・32は赤彩の痕跡あり。34は底部片で底径は7.2cmを測る。胎土は砂・雲母を多く含み、焼

成良好。やや暗い色調の橙色を呈する。外面は篋削り、煤が残る。赤彩。

## 2号住居址(図5・6)

x3～5、y4・5グリッドで検出された住居址で4号住居址の上方に位置する。南側で1号住居址を切り、北側と東側は調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が160cm、南北が210cm、最大壁高は西壁で40cmを測る。南北の軸線方向はN-8°-Eを示す。2号住居址床面からは柱穴と思われるpitが1口検出される。遺存する最大径は65cm、深さは床面から25cmを測る。

## 2号住居址出土遺物(図8-35～46)

図8-35～38は土師器坏の口縁部小片で何れも法量は不明。35～37は稜が付くタイプ。37は器厚が薄く内湾する。胎土は細砂を多く含み焼成良好。橙色を呈する。39～45は土師器甕の破片で45の底部を除いて何れも法量は不明。41は口縁が折り返される。45は底径7.5cmを測る。胎土は細砂を多く含み焼成良好淡橙色を呈する。内外面篋削り。46は2号住居内pit1出土遺物で、半球状をした土師器碗の破片で、口径14.1cm、器高4.9cmを測る。胎土は砂を多く含み焼成良好。淡橙色を呈する。口辺部横な

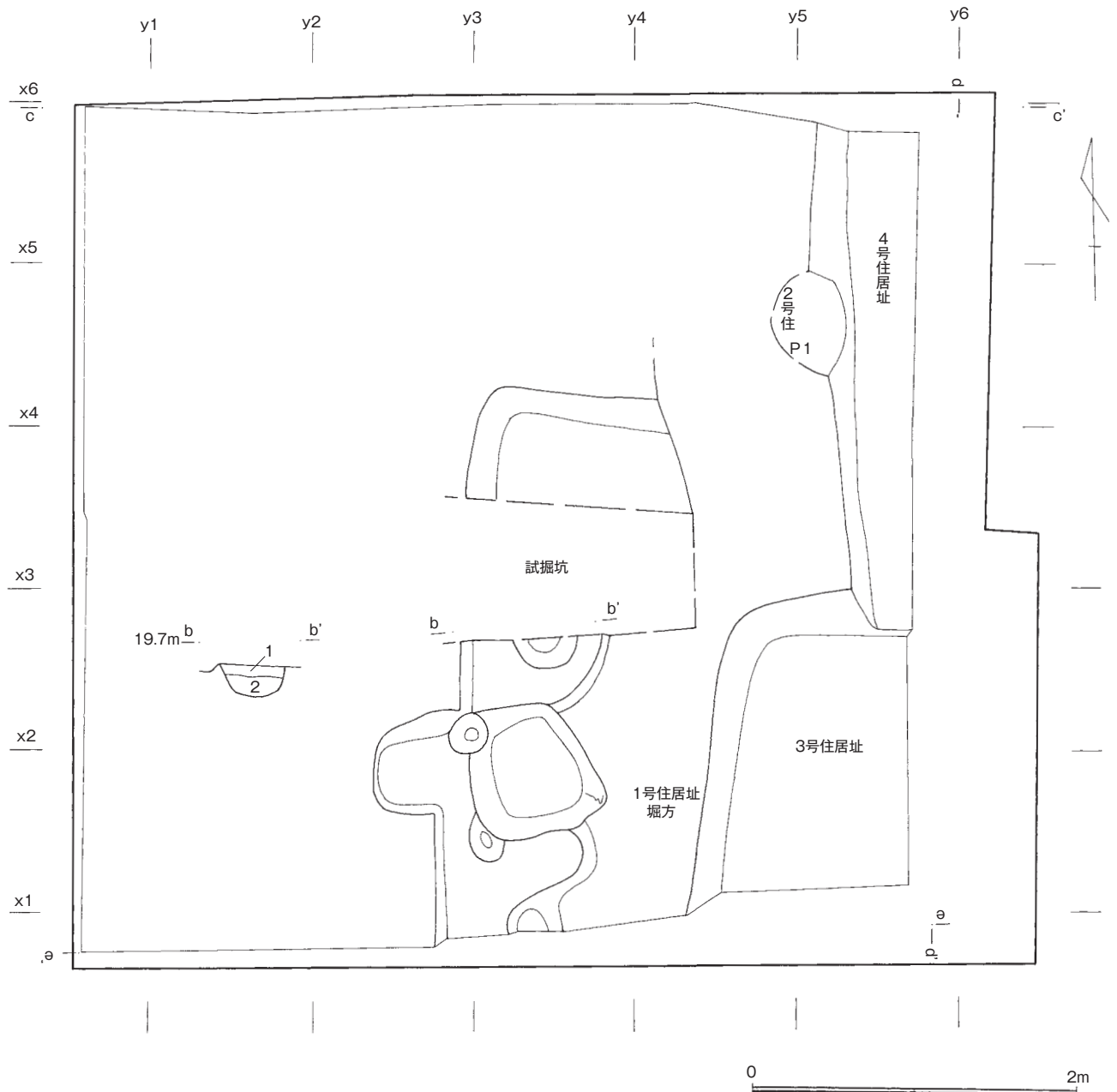


図9 下層遺構配置図

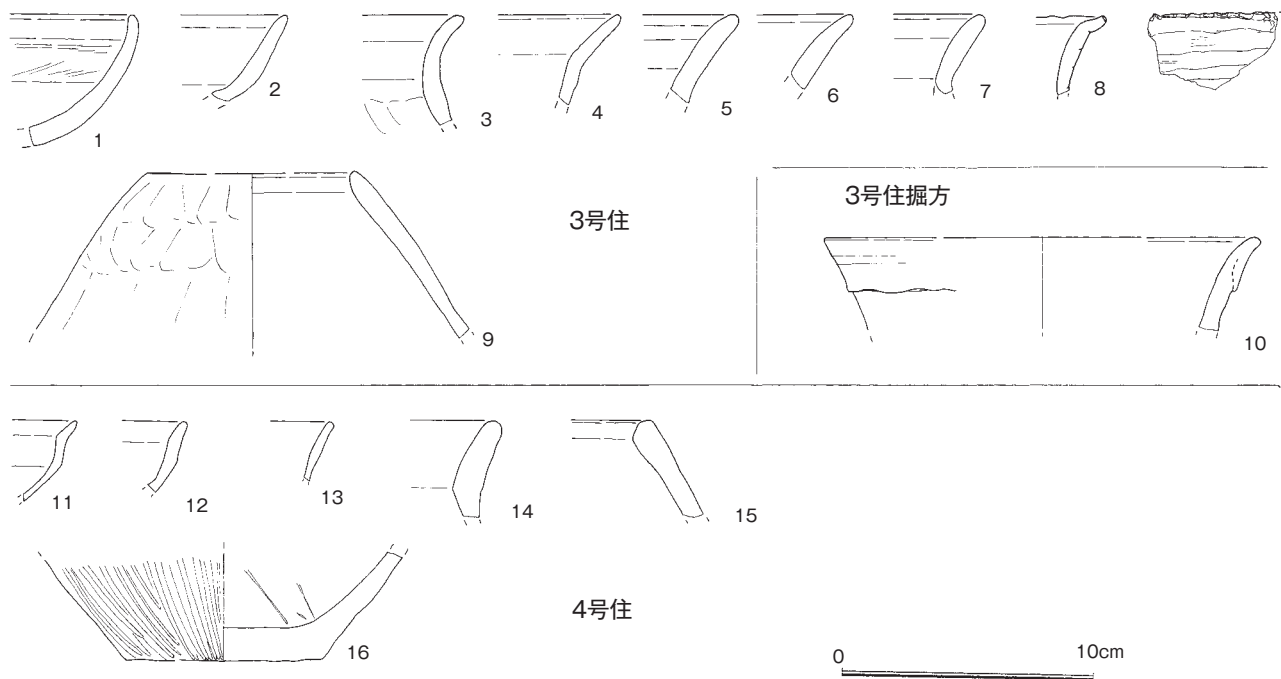


図10 3号住居址・4号住居址出土遺物

で、他は篋削り。

### 3号住居址(図5・9)

x 1・2、y 4・5グリッドで検出された住居址で1号住居址の下方に位置し、4号住居址を切る。3号住居址は東と南側が調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が130cm、南北が180cm、壁高は西壁で70cmを測る。

### 3号住居址出土遺物(図10-1～10)

図10-1・2は土師器杯の口縁部小片で法量は不明。3～8は甕の口縁部付近の小片で法量は不明。口辺部内外は横なで、下位は篋削り。8は古墳前期に属し、口縁端部に刻みが入る折り返し口縁。混入品。9は土師器無頸壺の破片で胴部に最大径があり、復元した口径は8.4cmを測る。胎土は細砂を含み焼成良好。淡い色調の橙褐色を呈し、外表面に廃黒色の部分がある。全体に篋削りが施される。10は3号住居址掘方出土の土師器甕の破片で、復元した口径は17.5cmを測る。胎土は細砂を含み焼成良好。橙色あるいは暗褐色を呈する。口縁は折り返し口縁で図10-9と同様古墳前期に属し、混入品。

### 4号住居址(図5・9)

x 2～6、y 5グリッドで検出された住居址で2号住居址の下方に位置し、3号住居址に切られる。4号住居址は東と北側が調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が65cm、南北が310cm、壁高は西壁で60cmを測る。南北の軸線はほぼ磁北方向を示す。

### 4号住居址出土遺物(図10-11～16)

図10-11～13は土師器杯の口縁部付近の破片でいずれも法量は不明。11は赤彩が施される。13は口縁端部が平に削られる。14は土師器甕の口縁部小片で法量不明、胎土は砂を多く含み焼成良好。くすんだ橙褐色を呈する。15は土師器無頸壺の口縁部小片で口径は不明。胎土は砂を多く含み焼成良好。橙褐色を呈する。全体に篋削り。16は土師器甕の底部片。復元した底径は7.8cmを測る。胎土は砂を多く含み、焼成良好。くすんだ色調の淡橙色を呈する。内外面共に篋削り。

### 包含層出土遺物(図11)

図11-1～6は土師器杯の口縁部片で何れも法量は不明。胎土は4・6を除いて粉質で微砂を含み焼

成良好。橙色を呈する。4は口辺部中位にふくらみをもつ。7は土師器高坏の坏部の小片で法量は不明。胎土は微砂を含み焼成良好。淡橙色を呈する。口辺部横なで、稜から下位篔削り。内外面に赤彩が施される。8～12は土師器甕の口縁部小片で法量は不明。8・11・12は口縁内側に沈線が入る。13は土師器無頸壺の破片で法量は不明。胎土は砂を多く含み焼成良好。淡橙褐色を呈する。内面は全体に煤が付着。内外面篔削り。14は土師器甕・壺の底部片で法量不明。胎土は微砂を含み焼成良好。淡橙色を呈する。内外面共に篔削り。15・16は須恵器である。高坏の脚部片である。胎土は微砂・長石粒を含み良く焼き締まる。若干青色味のある暗灰色を呈する。縦位の方形をした窓が開く。16は長頸壺の口縁部小片で法量は不明。胎土は微砂を含み、灰褐色を呈する。器表面は灰黒色をした艶のある自然釉が掛かる。

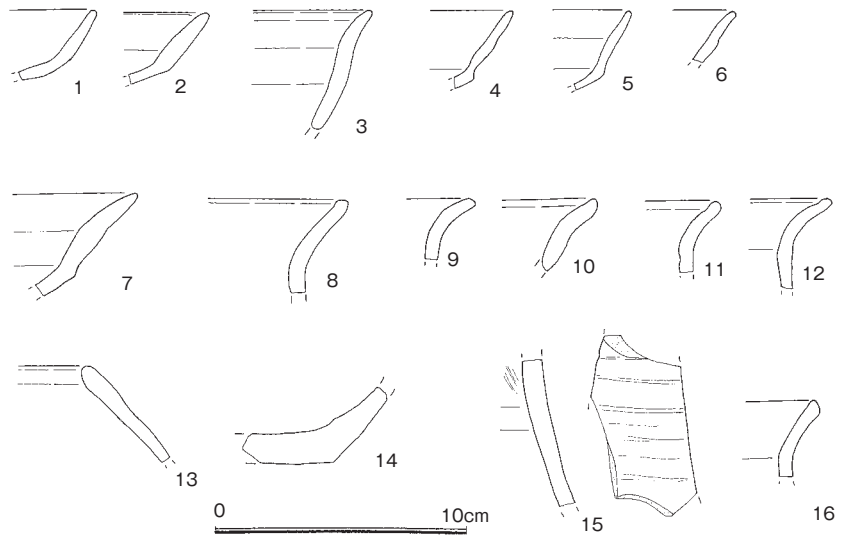


図11 包含層出土遺物

## 第四章 まとめ

第三章で報告した調査成果を整理してまとめにかえたい。

天神山城遺跡では第一章で既述したように、山頂部から裾野の谷戸にかけて広く、縄文期や古墳期から中・近世にかけて重層した遺跡が包蔵されていることが知られる。その中で今回の調査成果を当てはめてもう一度見直してみたい。

本調査は調査面積が30㎡以下と極狭小であるにもかかわらず、重層した竪穴住居址を4棟検出するなど大きな成果を得ることができた。これら建物は連続的に建て替えられており、4棟の内複数が同時に立地することがなかったことも確認された。ちなみに重複・切合い関係から見た順序は、古いほうから4号→3号→1号→2号の順である。(図5参照)

さらに出土遺物の年代観から、住居址個々の年代の推測を試みることにする。層序的に最古の4号住居址出土土器は古墳後期のタイプで組成される。この中には7世紀代を確認できるが、検出範囲の中では確実に6世紀代までさかのぼるものを見出すことはできない。次に後出の3号住居址には、古墳前期に属する土師器甕の口縁部の破片が2点見られる。しかし4号との時間的逆転は物理的にありえず、これら土器は混入品と見て間違いあるまい。出土土器のタイプの主流は4号とあまり変化せず7世紀代に置くことができよう。それに対して後出グループの1号・2号住居址においては、出土土器のタイプに大きな特徴の変化がある。それは8世紀初頭頃から出現する「相模型」の土師器である。1・2号の覆土からは相模型の坏が一定のパーセンテージで出土しており、住居址の継続年代の下限に決定的な示唆を与えている。こうした事実から今回の調査地内の人々の生活は7世紀代に始まり、8世紀前半の律令期頃までのおよそ百年間前後は継続していたようである。

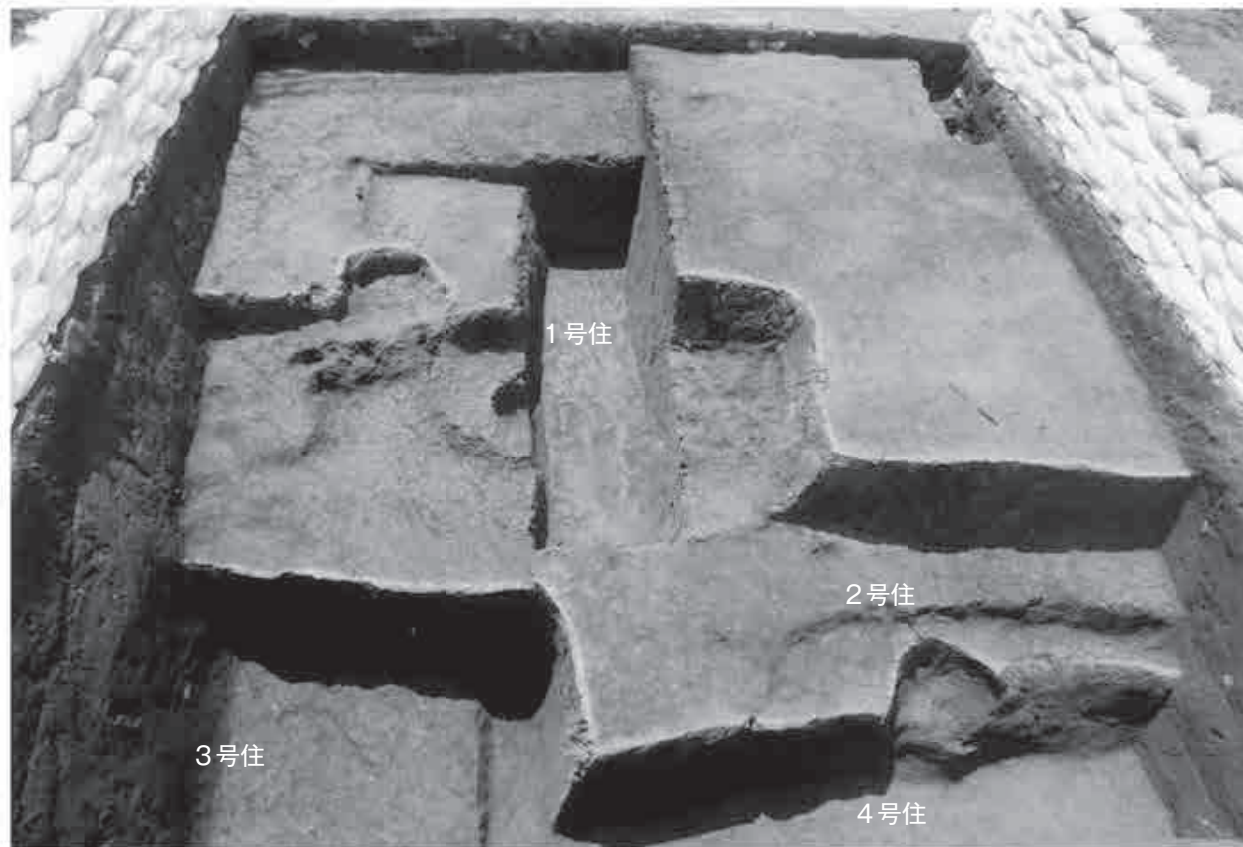
しかし今回の調査では4世紀代の土師器の出土や、さらに古い縄文土器の出土も複数あり、それらに該当する時期の遺跡が本調査地周辺に存在する可能性は少ないとはいえない。

尚、出土土器の時期同定については菊川英政氏に多くのご教示を得た。記してここに謝意を表したい。





▲A. 調査地点付近 遠景（北から）



▲B. 遺跡全景（東より）



▲A. 1号住居址竈(東より)



▲B. 同上(近景)



▲A. 1号住居址竈下層(東より)



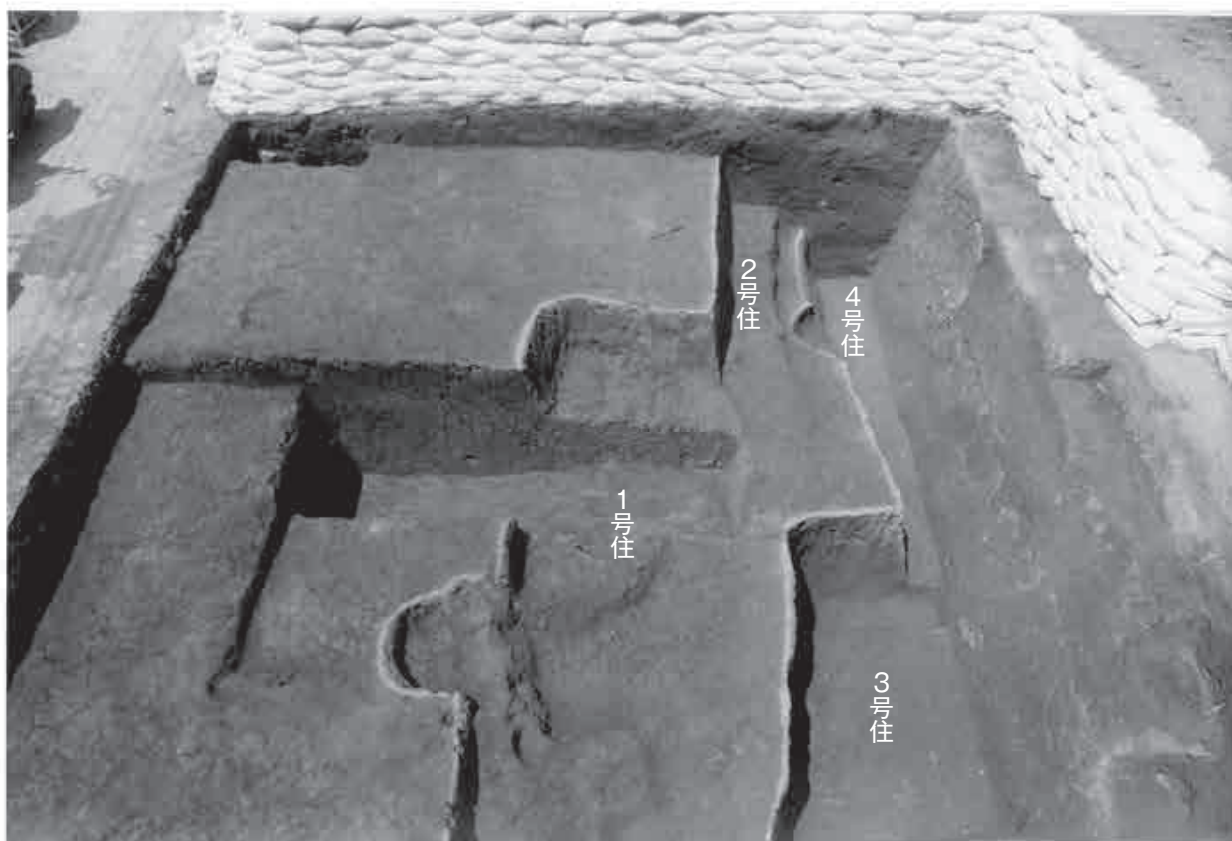
▲B. 同上 断割り a-a'(南より)



▲A. 1号住居址竈 断割り b-b' (東より)



▲B. 同上 完掘 (東より)



▲A. 遺跡全景 (南より)



▲B. 同上 (北より)



▲A. 1号住居址竈 完掘(北より)



▲B. 3号住居址 完掘(南より)



▲A. 調査区北壁土層断面 c-c'

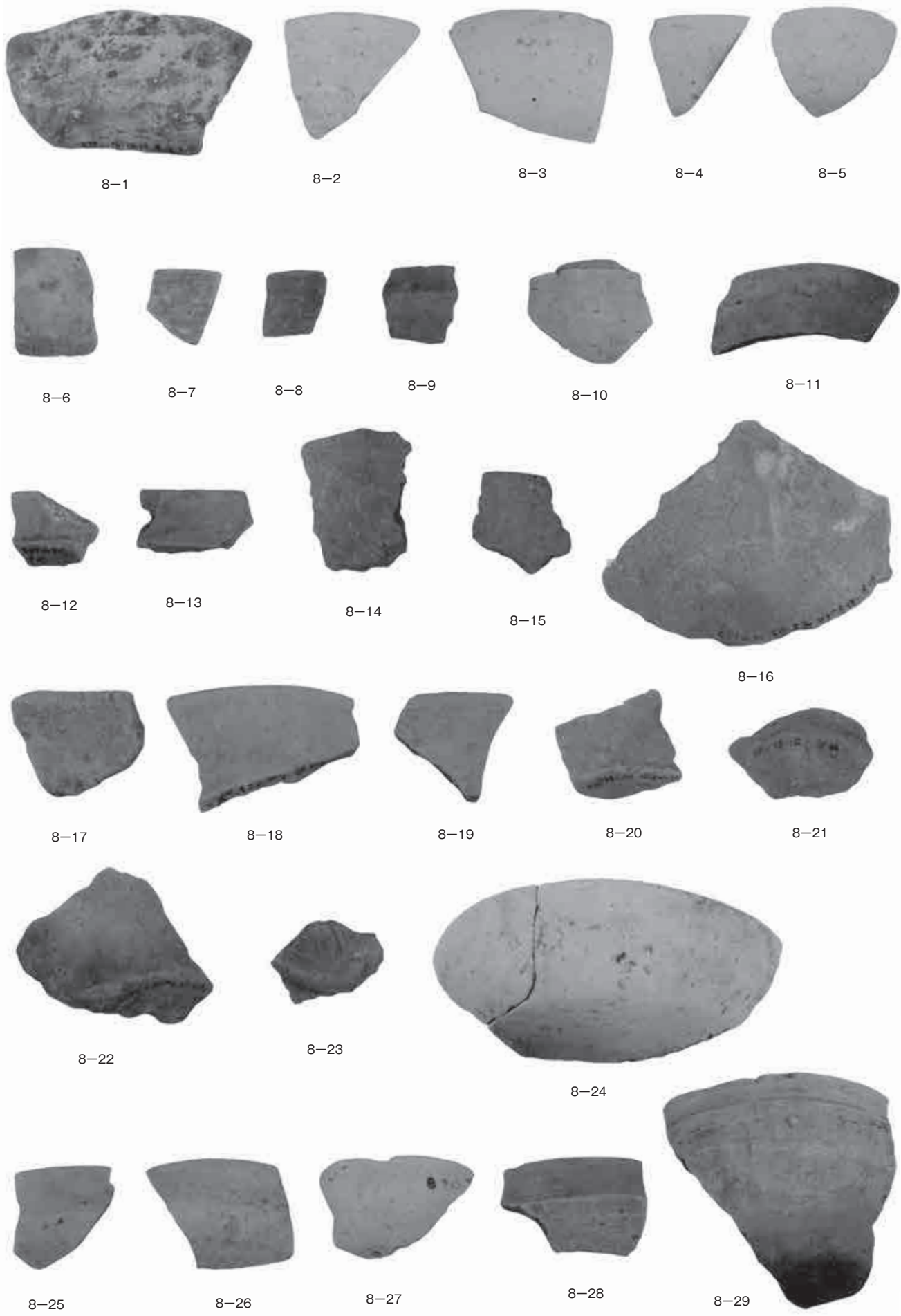


▲B. 調査区東壁土層断面 d-d'



▲C. 調査区南壁土層断面 e-e'

图版 8



出土遺物(1)





8-30



8-31



8-32



8-33



8-34



8-35



8-36



8-37



8-38

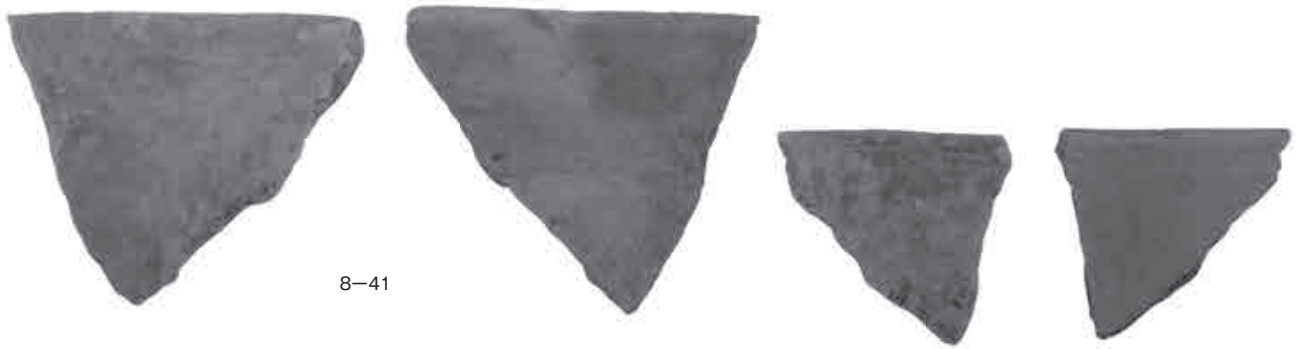


8-39



8-40

出土遺物(2)



8-41

8-42



8-43

8-44



8-45



8-46



10-1



10-2

出土遺物(3)



10-3

10-4



10-5

10-6

10-7



10-8

10-9



10-10

10-11



10-12

10-13

10-14



10-15

10-16

出土遺物(4)

图版 12



11-1



11-2



11-3



11-4



11-5



11-6



11-7



11-8



11-9



11-10



11-11



11-12



11-13



11-14



11-15



11-16



出土遺物(5)

# 新善光寺跡 (No. 279)

材木座四丁目 579 番 8 地点

## 例 言

1. 本報は、「新善光寺跡(No.279)」内、材木座四丁目579番8における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成20(2008)年8月21日～同年9月12日にかけて行い、調査面積は24㎡である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。  
調査担当者：山口 正紀(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)  
調査員：小野夏菜・須佐仁和(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)  
作業員：小口照男・清水政利・杉浦永章・田島道夫(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は須佐が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。  
整理参加者：山口・岡田慶子・平井里永子・吉田桂子(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)  
遺物洗浄・注記：鎌倉市シルバー人材センター  
遺物接合・分類：山口・平井 遺物実測：山口・平井  
遺物・遺構トレース：岡田・吉田・山口 遺構・遺物図版作成：岡田・山口  
観察表・写真図版作成・遺物写真撮影：山口 原稿執筆：第1章－平井、第2～4章－山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査にかかる出土遺物の注記は「SZT0812」と略して記した。
8. 本報の凡例は以下のとおりである。  
各図における基本縮尺は、以下のとおりである。同時に、各図に縮尺を表記している。  
挿図縮尺 全測図：1/60 遺構図：1/40 遺物図：1/3  
遺構図版 水糸高は標高値を示す。  
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。  
遺物観察表 ( )は復元数値、[ ]は遺存数値を示す。
9. 本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。  
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院  
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』  
火鉢：河野眞知郎 1993「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」『考古論叢 神奈河 第2集』  
神奈川考古学会
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)  
伊丹まどか、汐見一夫、垣内光次郎、原 廣志、松尾宣方、古田土俊一、太田美知子、岡田優子、小泉彩子、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

# 目次

## 本文目次

第一章 遺跡の位置と環境 .....	331
1. 遺跡の位置	
2. 地理的・歴史的環境	
3. 周辺遺跡の調査成果	
第二章 調査の概要 .....	337
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査における測量	
3. 堆積土層の観察	
第三章 検出遺構と出土遺物 .....	342
1. 1面の遺構と遺物	
2. 2a面の遺構と遺物	
3. 2b面の遺構と遺物	
4. 2c面の遺構と遺物	
5. 2面下トレンチ	
第四章 まとめ .....	353

## 挿図目次

図1 調査地点周辺遺跡 .....	331	図10 2b面遺構外出土遺物.....	346
図2 調査区と建築範囲 .....	337	図11 2c面全測図.....	346
図3 国土座標位置図 .....	338	図12 2c面池状遺構1 .....	347
図4 国土座標とグリッド配置図 .....	339	図13 2c面池状遺構1 覆土中出土遺物(1) ..	348
図5 調査区土層堆積図 .....	341	図14 2c面池状遺構1 覆土中出土遺物(2) ..	349
図6 1面全測図 .....	342	図15 2c面池状遺構1 覆土中出土かわらけ...	350
図7 2a面全測図.....	343	図16 2c面池状遺構1 最下層出土遺物.....	351
図8 2a面遺構外出土遺物.....	344	図17 2c面下トレンチ.....	352
図9 2b面全測図.....	345		

## 表目次

表1 遺物観察表(1) .....	355	表3 遺物観察表(3) .....	357
表2 遺物観察表(2) .....	356	表4 層位別出土遺物一覧表 .....	358

## 図 版 目 次

<p>図版 1 ..... 359</p> <p style="padding-left: 20px;">1. 調査地点遠景 (南西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">2. 調査地点近景 (東から)</p> <p>図版 2 ..... 360</p> <p style="padding-left: 20px;">1. 1 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">2. 2 a 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">3. 2 a 面泥岩版築範囲 (東から)</p> <p>図版 3 ..... 361</p> <p style="padding-left: 20px;">1. 2 a 面遺構外出土硯 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">2. 2 a 面遺構外出土銅製品 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">3. 2 b 面全景 (北から)</p> <p>図版 4 ..... 362</p> <p style="padding-left: 20px;">1. 2 c 面全景 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">2. 2 c 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">3. 2 c 面池状遺構 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">4. 池状遺構 1 覆土中出土瀬戸碗 (西から)</p> <p>図版 5 ..... 363</p> <p style="padding-left: 20px;">1. 2 面下トレンチ (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">2. 調査区北壁土層堆積 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">3. 調査区北壁土層堆積最下部 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">4. 調査区東壁土層堆積 (西から)</p>	<p>図版 6 ..... 364</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (1)</p> <p>図版 7 ..... 365</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (2)</p> <p>図版 8 ..... 366</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (3)</p> <p>図版 9 ..... 367</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (4)</p> <p>図版 10 ..... 368</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (5)</p> <p>図版 11 ..... 369</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (6)</p> <p>図版 12 ..... 370</p> <p style="padding-left: 20px;">出土遺物 (7)</p>
--	--



# 第一章 遺跡の位置と環境

## 1. 遺跡の位置

本調査地点は、鎌倉市材木座四丁目579番8地点。鎌倉青年団が建てた弁谷の石碑が建っているところから少し北西に入った辺りに位置する。遺跡名である新善光寺跡については歴史的環境で後述するが、現在の弁ヶ谷は、材木座光明寺北側の周辺一帯の東西に延びる谷戸の範囲を指し、小さな谷戸が三つに分かれている。新善光寺と同じく、当谷戸にあった崇寿寺について『鹿山略志』には「在鎌倉南境弁谷」と記されていることから、この地が鎌倉の境界に近い場所であったことが推察されるが、詳細については未詳である。また、「京極持清書下」の享徳元年(1452)11月9日条には「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、高御蔵が当谷に含まれていたことが記されている。当地の近くには和賀江島もあることから、倉庫や倉のようなものがあつたのだろうか、詳細については不明な点が多い。



図1 調査地点周辺遺跡

## 2. 地理的・歴史的環境

本調査地点は、現在の弁谷の石碑が建っているところから少し北西に入ったところに位置し、鎌倉市材木座四丁目579番8地点に所在する。周辺一帯の東西に延びる谷戸は、「弁ヶ谷」と呼ばれ、三つの小さな谷戸に分かれている地形である。嘉暦2年(1327)の崇寿寺鐘銘には「弁谷霊区」と記されているように、多くの寺院がこの谷戸内に存在していたようである。当遺跡名の新善光寺もその一つであり、当調査区周辺に存在していたのではないかと考えられている。

### 新善光寺

光明寺の北方、長勝寺背後の弁ヶ谷にあった寺で、浄土教を中心とした四宗兼学を標榜した寺院であったと云われている。創建年次・開山は未詳で、開基は北条泰時と伝える。『北条九代記』仁治3年(1242)6月15日では、北条泰時が死んだとき、「新善光寺智導上人為知識奉観念仏」とあり、新善光寺智導上人が念仏を勤めている。鎌倉時代は、信濃善光寺の信仰が盛んであった。とくに鎌倉では源頼朝をはじめ、北条泰時・時頼ら北条氏の信仰が篤く、『吾妻鏡』寛元4年(1246)3月14日条には、善光寺供養に際して大御堂の良信が導師を勤め、名越故遠江入道生西(北条朝時)の子息らが檀越となっていることが記載されていること、同正嘉2年(1258)5月5日条は新善光寺の辺りに北条時章の名越山荘があったことから、北条氏一門の影響のもとに当寺が開創されたと考えられている。新善光寺の創建については、建治3年(1277)11月20日の「日蓮書状」にも「なこへの一門の善覚(光)寺・長楽寺・大仏殿立させ給」とみえる。

『新編相模国風土記稿』には「新善光寺蹟、名越にあり、新善光寺屋敷と唱う」とあり、寺の名残が土地の呼び名に反映されている。葉山町上山口の不捨山攝取院新善光寺は、この新善光寺が移転してきたと伝えられており、元は弁ヶ谷の奥で松ヶ谷の長勝寺の裏にあたる場所に新善光寺があったとする(『鎌倉廃寺事典』新善光寺項)。『関東往還記』弘長2年(1262)7月19日条には「新善光寺別当道教、念仏者主領云々、為対面寄宿近辺」とあって、当寺別当道教が当時の念仏者の主領であったことと、彼が叡尊に対面するために、近辺に寄宿したことを述べている。『鎌倉八幡宮寺供僧次第』には延慶2年(1309)正月14日乗蓮坊(如意院)の弁恵が「日来長病之間、自去年名越於于善光寺、称名念仏、臨終正念シテ被遂大往生」とあることから、新善光寺と念仏との関わりを見出すことができる。延慶3年(1310)6月4日の「金沢実時後室代沙弥成覚相博状」によると、醍醐僧正親玄の西御門小笠原ヶ谷の土地と、新善光寺周辺にあった金沢実時の土地6戸主が交換されていることから、金沢北条氏との関連も想像させる。また元徳元年(1329)12月3日の「宗顕(金沢貞顕)書状」に「関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勧進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候」とあり、当寺の住持が鎌倉大仏造営の大勧進となっていることが知られる。このほか、『金沢文庫古文書』には念空(道教)の僧名や「鎌倉新善光寺」「相州鎌倉郡新善光寺」などの寺名が認められるが未詳。

現在、三浦郡葉山町上山口にある不捨山攝取院善光寺は、鎌倉から移転してきたと先述したが、上山口に移転した時代について『新編相模国風土記稿』には「中興の僧密道、天正18年7月朔日に寂すとなれば其の世代なるべし」とあり、中興の僧密道が天正18年(1590)7月1日に没しているため、この頃に上山口に移転したのではないかと考えられている。『三浦郡誌』には、「上山口唐木作にあり。浄土宗、鎌倉光明寺の末寺にして、不捨山攝取院と号す。古くは鎌倉名越にあり。東鑑正嘉2年5月29日の條に將軍宗尊親王方違として、北號時章の名越の山荘に渡御の事見ゆ。其の山庄新善光寺の邊にありと言へり」とあり、当地に移転した年代は詳しくはわからないとしているが、「源頼朝信州新善光寺如来四八仏の中

一体を招請して名越に一字を起立して之を納む。即ち新善光寺此れなり」と記している。ただし、『皇国地誌』は建仁年中(1201～1204)に名越から移ってきたと伝えるが未詳。

### 弁ヶ谷

材木座の光明寺北方の谷戸一帯をさし、現在材木座四丁目から六丁目の逗子市との境近くにある谷戸の名称である。当地名は、かつて崇寿寺や新善光寺などがあつた付近の谷で、『玉舟和尚鎌倉記』によると紅ヶ谷・雪ノ下ヶ谷・亀ヶ谷・花ヶ谷とともに鎌倉七谷の一つと伝えられている。文明18年(1486)10月に鎌倉を来訪した道興の『廻国雑記』からは、「べにが谷をとをりて、化はひ坂を越とて」として「顔にぬるへにがやつよりうつりきてはやくも越るけはい坂哉」と詠じており、弁ヶ谷を紅ヶ谷と称していたことがうかがえる。『田代略系図』の香春庵玉の注記に「鎌倉別谷、別ノ谷ハ千葉殿ノ敷地ナリ、介ノ唐名別駕ト云間、別ノ谷ト云」と記すとある。『鎌倉志』でも、この地に千葉介の館があり、「介」の唐名「別駕」に由来する説があげられているが、『攬勝考』は、常陸介や上総介を称することが多かった佐竹氏の屋敷が近くにあつたことに地名の由来を求めている。先述した嘉暦2年(1327)崇寿寺鐘銘の「弁谷靈区」と記されるのが当地名の初見である。崇寿寺は現在廃寺となっており、梵鐘も失われているが、北条高時が開祖の臨濟宗の寺院であつた。享徳元年(1452)11月9日の「京極持清書下」には「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、高御蔵が当谷に含まれ、谷間には、現横須賀市野比に移転した浄土真宗の五明山高御蔵最宝寺があつた。この他、三浦市白石町の浄土真宗本願寺派の泰平山最福寺は、享禄一天文(1528-55)頃に、鎌倉弁ヶ谷より移転したと伝えられている。

## 3. 周辺遺跡の調査成果

本調査に係る以前の新善光寺跡(No.279)内における平面的な発掘調査は1地点のみである。1地点は谷戸奥の最上段に位置する。詳細な報告はされていないが、中世3面中に玉砂利面や瓦溜りが検出され、海拔23.15～22.90mで岩盤面を含む中世基盤層が確認されている。また、谷戸最奥部の新善光寺跡内やぐら(No.335)の調査では、山裾の崖斜面をコの字状に掘り窪め、上・中・下段の3時期の遺構が検出されている。これらからは、宝篋印塔を中心とした石塔群や写経石・白磁四耳壺を伴う格式のある火葬礼式とされる14世紀中葉頃の火葬墓が発見されており、それ相応の寺院があつたことが窺える。

弁ヶ谷の谷戸入口周辺での調査も実施され、弁ヶ谷遺跡(No.249)内では7地点が調査されている。1地点では13世紀末～15世紀代の中世6時期の遺構面が確認され、寺院的な性格をもつ遺構群と推測されている。2・3地点では8mほど離れた近隣調査であるが、前者は5面、後者は3面を確認し、4期(13世紀前半～14世紀前半)の遺構群が検出されている。4地点では5時期(13世紀中頃～15世紀頃)の遺構群が検出され、町屋空間の一面から寺院の一面に変化したのではないかと示唆される。5地点では13世紀後半～15世紀代に亘り、5枚の生活面が確認されている。井戸・石列・溝・土坑が検出され、寺院址の縁辺部であつた可能性が報告されている。現在の豆腐川北側に位置する7地点では、鎌倉時代初期の溝・暗渠や泥岩による豆腐川護岸、池などが検出され、寺院もしくは武家屋敷に伴う庭園の一角と考えられている遺構群が検出された。以降、13世紀半ば～14世紀後半の3期に亘り、建物が確認されている。このように弁ヶ谷内の発掘調査成果から、13世紀前半～15世紀代に亘る遺構群が確認されている。弁ヶ谷内は宗教空間であり、鎌倉時代からあつたとされる寺院は15世紀代にはすべて廃寺となっているが、その間の痕跡が残っている状況であることは各調査成果から窺えよう。

## [引用・参考文献]

- 貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂  
1984「神奈川県地名」『日本歴史地名大系』第14巻 平凡社  
鎌倉市中央図書館近代史資料室CPCの会(湘南鎌倉生涯現役の会分科会) 2008『鎌倉 谷戸の記録(下)』鎌倉市中央図書館  
1980『校訂 三浦郷村旧跡寺社略録』葉山文庫  
1918『三浦郡誌』神奈川県三浦郡教育會  
1967『校訂 三浦古尋録』横須賀市図書館  
2012『材木座(光明寺・小坪周辺を除く)を学ぶ 資料集』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所  
高橋慎一郎 2005『武家の古都、鎌倉』山川出版社  
大橋俊雄 1955「鎌倉新善光寺考」『日本歴史』第86号 吉川弘文館

## [発掘調査報告書]

- 福田誠 2004「新善光寺跡(No.279)材木座四丁目573番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会  
原廣志、他 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』新善光寺跡内やぐら発掘調査報告  
1991『佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団

### <調査地点一覧>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は末尾に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付してある。そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

### 弁ヶ谷やぐら群(No.35)

- 1:1986年8月調査。坂口滋皓ほか 1986『鎌倉市材木座4丁目弁ヶ谷やぐら群』相武考古学研究所
- 2:1989年9月調査。継 実 1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群 鎌倉市材木座4丁目594番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡やぐら発掘調査団
- 3:2000年2月調査。上田薫・依田亮一 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告98 弁ヶ谷やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

### 鎌倉城(No.87)

- 1:1998年11月調査。長谷川厚・大塚健一 1999「平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査」『かながわ考古学財団調査報告74 鎌倉城(No.87)所在やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

### 感応寺跡(No.225)

- 1:2002年11月調査。汐見一夫・小泉衣理 2005「感応寺跡(No.225)材木座六丁目722番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

### 弁ヶ谷遺跡(No.249)

- 1:1999年6月調査。宮田眞・諸星真澄・滝沢晶子 2001「弁ヶ谷遺跡(No.249)材木座四丁目336番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2:2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡(No.249)材木座六丁目643番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 平成20年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

- 3：2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目 643 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25 平成 20 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 4：2004年9月調査。降矢順子・齋木秀雄 2004「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目 643 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25 平成 20 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5：2006年8月調査。宮田眞・森孝子 2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』株式会社 博通 一材木座四丁目 332 番 1 の一部外地点
- 6：2009年2月調査。未報告一材木座二丁目 599 番 8
- 7：2009年6月調査。未報告一材木座六丁目 640 番 2  
根本志保 2010「弁ヶ谷遺跡 (No.249) の調査」『第 20 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

#### 新善光寺跡 (No.279)

- 1：2002年1月調査。福田誠 2004「新善光寺跡 (No.279) 材木座四丁目 573 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 平成 15 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2：本調査地点
- 3：2009年4月調査。未報告一材木座四丁目 579 番 4

#### 材木座町屋遺跡 (No.261)

- 1：1988年9月調査。田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四曲 260 番 1 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 4：1995年6月調査。馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座三丁目 364 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13 平成 8 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6：2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳 2001「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目 760 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 平成 12 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 8：2000年11月調査。汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四丁目 256 番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 平成 13 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 9：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 10：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 15」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 11：2002年10月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 8 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 12：2002年12月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 22：2008年6月調査。未報告一材木座六丁目 653 番 1 他
- 24：2009年7月調査。未報告一材木座六丁目 742 番 4 外
- 26：2010年1月調査。未報告一材木座六丁目 725 番 11

#### 長勝寺やぐら (No.305)

- 1：1984年7月調査。田代郁夫・玉林美男 1985『長勝寺遺跡(やぐら)発掘調査報告書 昭和 59 年度 鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』長勝寺(やぐら)発掘調査団

### 長勝寺遺跡 (No.313)

1 : 1976年8月調査。大三輪龍彦・斉木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団 一材木座二丁目2162番2地点

2 : 1997年6月調査。土屋浩美・宗臺富貴子 1999「長勝寺遺跡 (No.313) 材木座二丁目2168番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

### 能蔵寺跡 (No.314)

1 : 1971年11月調査。松尾宣方 1983「2. 来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会

2 : 1993年7月調査。馬淵和雄 1995『能蔵寺跡 材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査』能蔵寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 一材木座二丁目274番4地点

3 : 2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』

4 : 2003年5月調査。原廣志 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座四丁目274番2の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会

5 : 2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第2分冊)』

6 : 2006年8月調査。未報告一材木座二丁目293番2

### 光明寺旧境内遺跡 (No.316)

1 : 1977年12月調査。松尾宣方 1983「42. 光明寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目854番地点

2 : 1978年3月調査。松尾宣方 1983「48. 光明寺裏遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目846番1地点

3 : 1978年11月調査。齋木秀雄・河野真知郎・手塚直樹 1980『光明寺裏遺跡 鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会 一材木座六丁目846番1地点

4 : 1984年10月調査。齋木秀雄 1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺 開山記主良忠上人700年遠忌記念事業に伴う埋蔵文化財の調査』光明寺境内遺跡発掘調査団

5 : 2003年5月調査。福田誠・鈴木絵美 2006「光明寺旧境内遺跡 (No.316) 材木座六丁目855番21外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

### 新善光寺跡内やぐら (No.335)

1 : 1987年7月調査。原廣志・福田誠・田代郁夫 1988「昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜崩壊対策事業に伴う調査」『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団

### 弁ヶ谷東やぐら群 (No.456)

1 : 1999年7月調査。鈴木庸一郎・木村吉行 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にもなう発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告 94 弁ヶ谷東やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称
169	弁ヶ谷横穴	254	弁ヶ谷奥遺跡	284	崇寿寺跡
248	最宝寺跡	255	実相寺旧境内遺跡	380	長善寺やぐら群

## 第二章 調査の概要

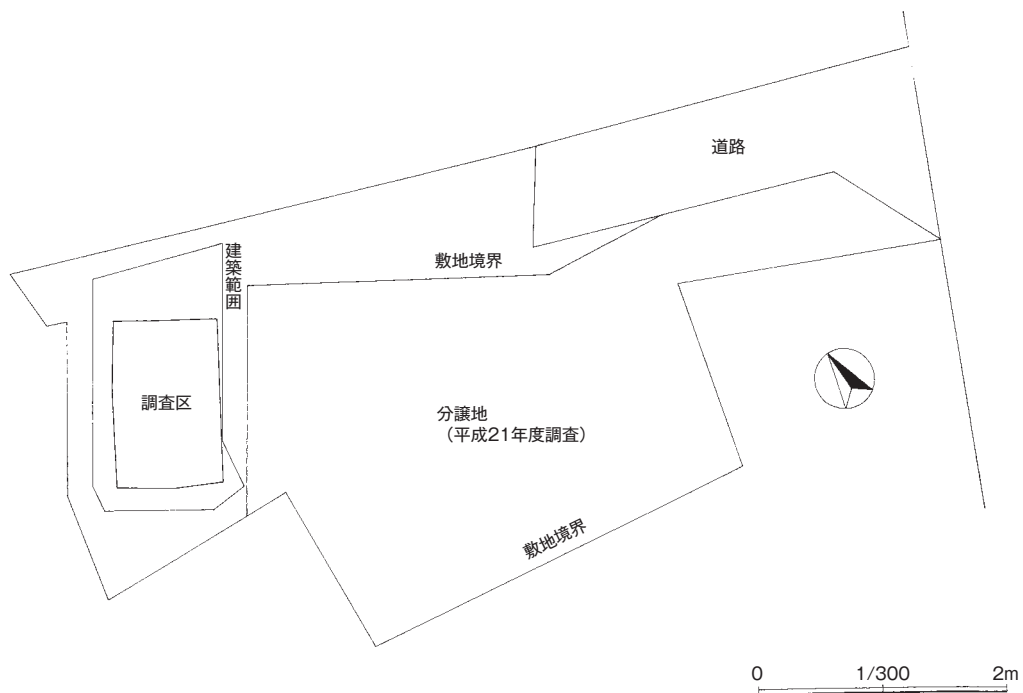


図2 調査区と建築範囲

### 1. 調査の経緯と経過

本地点の発掘調査は、個人専用住宅建設における地盤の柱状改良工事を原因として、鎌倉市教育委員会が実施した。平成20年5月22日、建設予定範囲内6㎡を対象として鎌倉市教育委員会による確認（試掘）調査が実施され、その結果、地表下120m以下より中世遺物を含む堆積層を確認したため、本調査実施の判断に至った。その後、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整に続き、平成20年8月25日から現地での発掘調査を開始した。敷地面積162.10㎡のうち、建築面積は49.63㎡であり、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲内24㎡を調査区に設定した（図2）。また、施工業者の配慮により、掘削残土置き場は隣地の分譲地を使用させていただいた。

確認調査結果をもとに、8月21日に重機による表土掘削を行い、地表下120cmほどで中世遺構面を確認したのち、人力による作業で調査を進行した。その結果、4時期の中世遺構面を確認し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。調査途中、建主側の諸事情により調査予定期間が大幅に縮まることになった。そのため、東壁側にトレンチ調査を行い、多量の湧水等の影響で崩落の危険性を踏まえ、安全な深さまで土層の確認をした。現地終了時には遺物天箱6箱分の遺物が出土した。

以下、作業経過を抜粋する。

8月21日（木）

現地調査開始。重機による表土掘削。

8月26日（火）

機材搬入。調査区周辺環境整備。

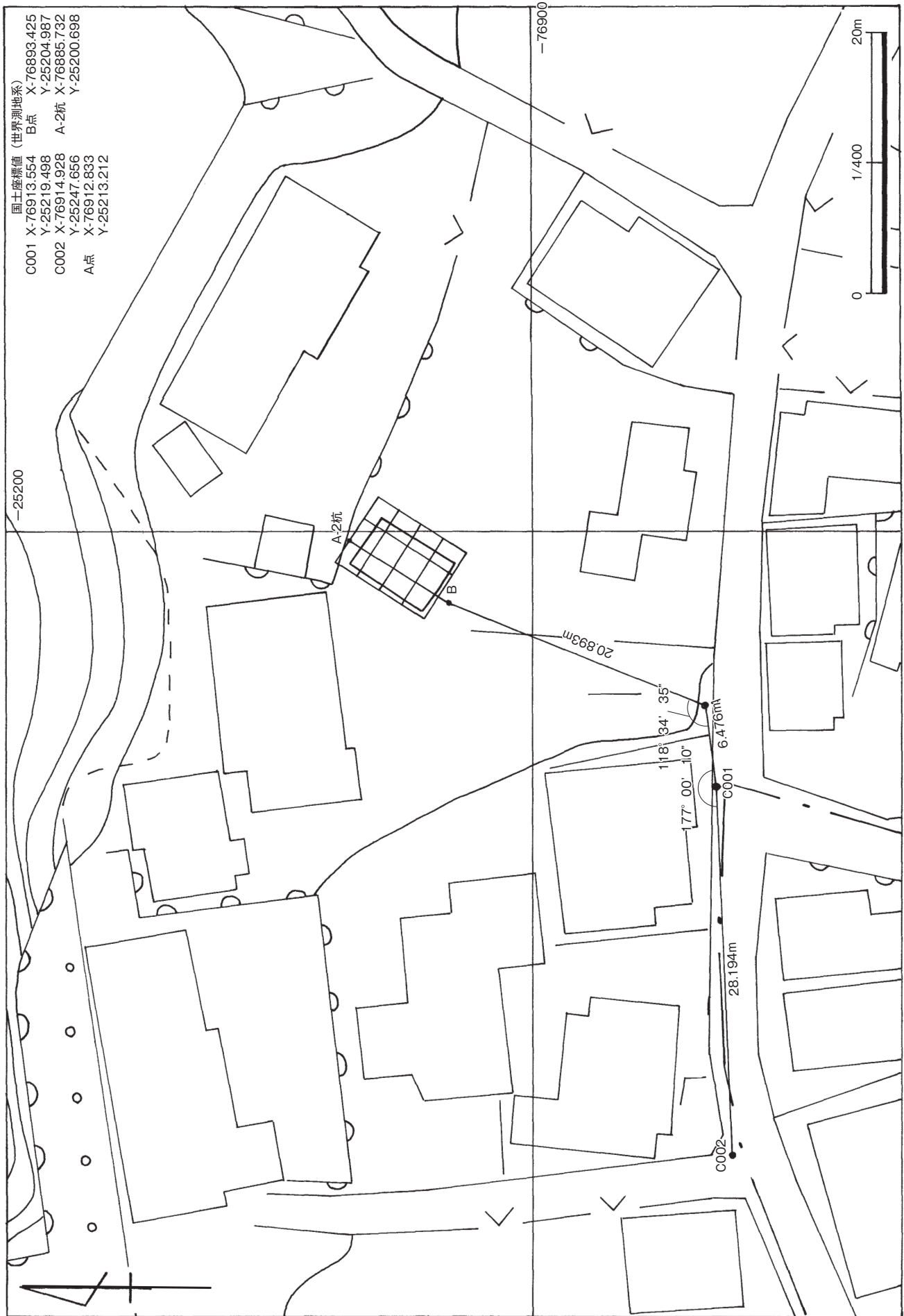


图3 国土座標位置图



8月28日(木)

調査区周囲に測量用のグリッドを設定。  
鎌倉市3級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量点に移動。

9月1日(月)

1面全景写真撮影。全測図実測。

9月4日(火)

2a面全景・個別写真撮影。全測図実測。

9月5日(水)

2b面全景写真撮影。全測図実測。調査区南・西壁写真撮影および土層堆積図実測。

9月8日(月)

2c面全景・個別写真撮影。全測図実測。

9月9日(火)

調査区東側にトレンチ調査開始。

9月10日(水)

トレンチ写真撮影及び全測図実測。

調査区東・西・南壁写真撮影。

9月11日(木)

調査区壁土層堆積図実測。撤収準備。

9月12日(金) 現地調査終了。機材撤収。

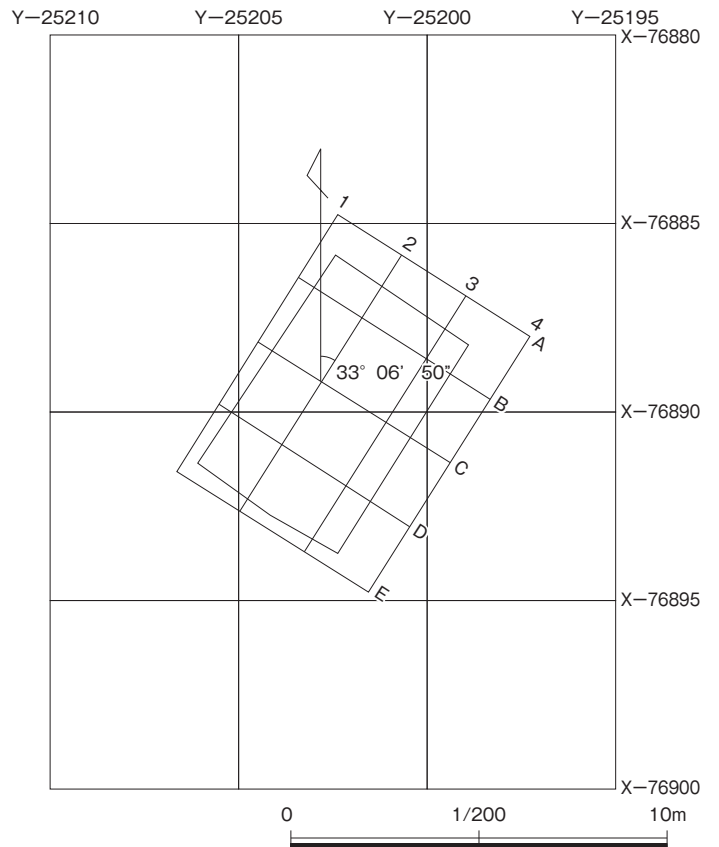


図4 国土座標とグリッド配置図

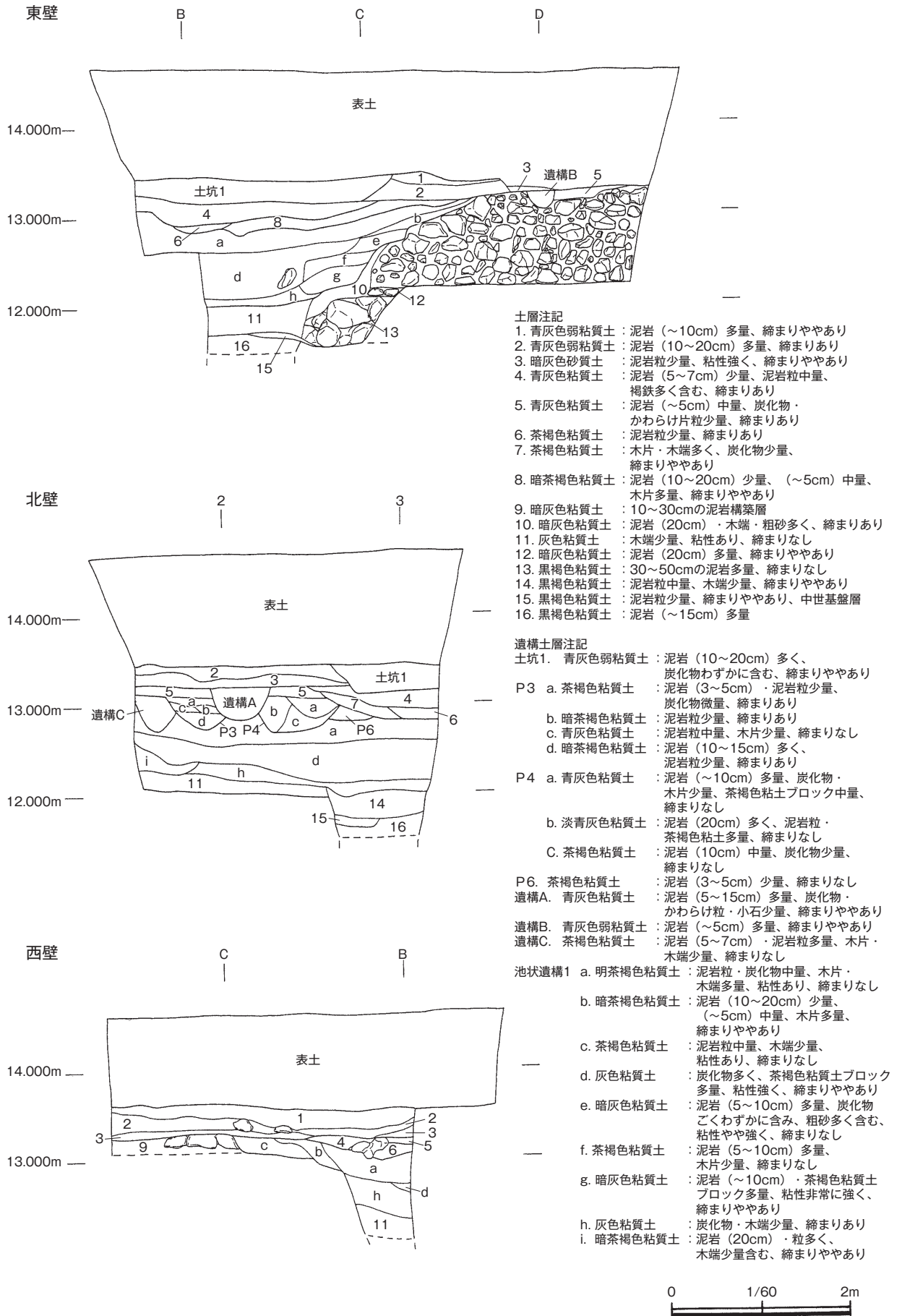
## 2. 調査における測量

現地調査の測量は、調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設けた。そのため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量軸の設定には先行して調査区北にA-2杭、任意点B点を予め設定した(図3)。調査地南側を東西に走る道路に設置してある鎌倉市4級基準点C001とC002を用いて、調査測量基準点にあたるA-2杭とB点到国土座標上の数値を移動した。測量軸は2m方眼による軸線を用い、南北軸線には北方からアルファベットA~E、東西軸線には西方から算用数字の1~4を付してグリッド設定を行った。グリッド南北軸線は真北からN-33°06'50"-Eの傾きを測る。また、本報では便宜上、調査区の北東側を北、南西側を南とする。

国土座標値は、現地調査時において日本測地系(座標系AREA9)を用いて測量を行った。後に整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記し、調査地点と国土座標系の詳しい位置関係は図4に示した。標高値は、調査地点より西に350mほどの九品寺交差点付近に設置してある鎌倉市三級基準点No.53412(標高m)を基に移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図(2004年発行)を使用している。

## 3. 堆積土層の観察

調査区北・東・西壁の土層観察を行った(図5)。現地表は標高14.6m前後を測り、表土としたコンクリート片などを多く含む近・現代層が120cmほど堆積していた。標高13.4~13.6mにかけて、10cmほどまでの泥岩を多量に含む青灰色弱粘質土(1層)とその直下に1層より大きい泥岩を含む2層の堆積があり、両方が1面を構成する堆積土であった。調査区南部には100cmの青灰色泥岩層(9層)が拡がり、北部に向かって2a面を構成する4層と5層が堆積している。2a面の標高は13.2mを測る。1面と2a面の間層として粘性ある暗灰色砂質土(3層)が10~20cm堆積していた。4・5層を除去すると、10cm前後の厚さで堆積する2b面を構成する6・8層がみえる。以下、10~90cmほどは2c面の池状遺構の覆土が堆積している。池状遺構覆土の下はトレンチ調査のみで一部確認した。9層の下には10cmほどの堆積がみられる12層と黒褐色粘質土の中に30~50cmの泥岩塊が詰まる13層が確認できた。これらが基盤になっており、木端を多く含む暗灰色粘質土(10層)や締まりのない灰色粘質土(11層)、泥岩粒少量含む黒褐色粘質土(15層)が堆積していた。15層以下は地表下290cm、標高11.7mから15mまでの泥岩を多量に含む16層が堆積しており、最大深度310cm、標高11.5mまでの土層まで確認した。



- 土層注記**
1. 青灰色弱粘質土 : 泥岩 (~10cm) 多量、締まりややあり
  2. 青灰色弱粘質土 : 泥岩 (10~20cm) 多量、締まりあり
  3. 暗灰色砂質土 : 泥岩粒少量、粘性強く、締まりややあり
  4. 青灰色粘質土 : 泥岩 (5~7cm) 少量、泥岩粒中量、褐鉄多く含む、締まりあり
  5. 青灰色粘質土 : 泥岩 (~5cm) 中量、炭化物・かわらけ片粒少量、締まりあり
  6. 茶褐色粘質土 : 泥岩粒少量、締まりあり
  7. 茶褐色粘質土 : 木片・木端多く、炭化物少量、締まりややあり
  8. 暗茶褐色粘質土 : 泥岩 (10~20cm) 少量、(~5cm) 中量、木片多量、締まりややあり
  9. 暗灰色粘質土 : 10~30cmの泥岩構築層
  10. 暗灰色粘質土 : 泥岩 (20cm)・木端・粗砂多く、締まりあり
  11. 灰色粘質土 : 木端少量、粘性あり、締まりなし
  12. 暗灰色粘質土 : 泥岩 (20cm) 多量、締まりややあり
  13. 黒褐色粘質土 : 30~50cmの泥岩多量、締まりなし
  14. 黒褐色粘質土 : 泥岩粒中量、木端少量、締まりややあり
  15. 黒褐色粘質土 : 泥岩粒少量、締まりややあり、中世基盤層
  16. 黒褐色粘質土 : 泥岩 (~15cm) 多量

- 遺構土層注記**
- 土坑1. 青灰色弱粘質土 : 泥岩 (10~20cm) 多く、炭化物わずかに含む、締まりややあり
- P3 a. 茶褐色粘質土 : 泥岩 (3~5cm)・泥岩粒少量、炭化物微量、締まりあり
- b. 暗茶褐色粘質土 : 泥岩粒少量、締まりあり
- c. 青灰色粘質土 : 泥岩粒中量、木片少量、締まりなし
- d. 暗茶褐色粘質土 : 泥岩 (10~15cm) 多く、泥岩粒少量、締まりあり
- P4 a. 青灰色粘質土 : 泥岩 (~10cm) 多量、炭化物・木片少量、茶褐色粘土ブロック中量、締まりなし
- b. 淡青灰色粘質土 : 泥岩 (20cm) 多く、泥岩粒・茶褐色粘土多量、締まりなし
- C. 茶褐色粘質土 : 泥岩 (10cm) 中量、炭化物少量、締まりなし
- P6. 茶褐色粘質土 : 泥岩 (3~5cm) 少量、締まりなし
- 遺構A. 青灰色粘質土 : 泥岩 (5~15cm) 多量、炭化物・かわらけ粒・小石少量、締まりややあり
- 遺構B. 青灰色弱粘質土 : 泥岩 (~5cm) 多量、締まりややあり
- 遺構C. 茶褐色粘質土 : 泥岩 (5~7cm)・泥岩粒多量、木片・木端少量、締まりなし
- 池状遺構1 a. 明茶褐色粘質土 : 泥岩粒・炭化物中量、木片・木端多量、粘性あり、締まりなし
- b. 暗茶褐色粘質土 : 泥岩 (10~20cm) 少量、(~5cm) 中量、木片多量、締まりややあり
- c. 茶褐色粘質土 : 泥岩粒中量、木端少量、粘性あり、締まりなし
- d. 灰色粘質土 : 炭化物多く、茶褐色粘質土ブロック多量、粘性強く、締まりややあり
- e. 暗灰色粘質土 : 泥岩 (5~10cm) 多量、炭化物ごくわずかに含む、粗砂多く含む、粘性やや強く、締まりなし
- f. 茶褐色粘質土 : 泥岩 (5~10cm) 多量、木片少量、締まりなし
- g. 暗灰色粘質土 : 泥岩 (~10cm)・茶褐色粘質土ブロック多量、粘性非常に強く、締まりややあり
- h. 灰色粘質土 : 炭化物・木端少量、締まりあり
- i. 暗茶褐色粘質土 : 泥岩 (20cm)・粒多く、木端少量含む、締まりややあり

図5 調査区土層堆積図

### 第三章 検出遺構と出土遺物

調査区内では4期の遺構面を確認し、池状遺構1基、柱穴16口を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構(一括)の出土箇所を分けて表4にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各面の末尾に表示した。

#### 1. 1面の遺構と遺物

(図6、図版2)

厚さ120cmの近～現代の堆積土を除去すると、遺構検出面である標高13.4～13.6mの高さに青灰色弱粘質土が広がる1面を検出した。北側の試掘坑や現代攪乱による削平がみられた。近代以前の土坑と思われる遺構が1基、南側には検出面より10cmほど下がる落ち込みを検出した。しかし、1面検出精査時に出土した遺物は大小かわらけ片1点ずつであり、土坑や落ち込みからも遺物の出土が認められなかったことから中世期の遺構かは不明瞭である。

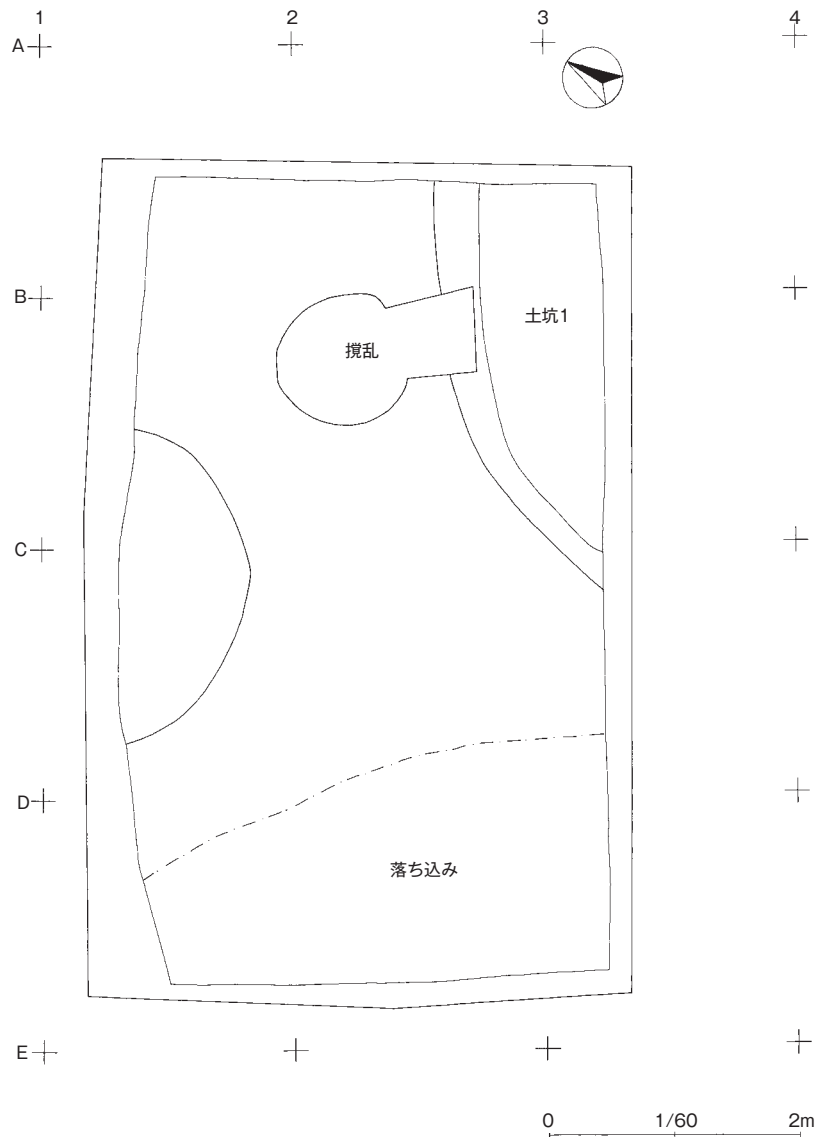


図6 1面全測図

## 2. 2a面の遺構と遺物

(図7、図版2～3)

当面まで掘り下げ時、主に北壁から多量の湧水があるため、北側120cm部分は崩落の危険性を考慮し未完掘である。2a面としたのは、南部泥岩版築面が基盤となり、北部に遺構面を検出したためである。調査区南部には10～50cmの土丹による粗雑な版築面、北部には青灰色粘質土が拡がり、地表下140cm、標高13.2mで検出した。

当面では柱穴5口を検出した。全て浅い掘り込みの小型の柱穴である。P1とした遺構から、かわらけ小皿小片が一点出土しているだけで、その他の遺構からは遺物の出土が認められなかった。また、P5は泥岩版築面内で検出した。泥岩版築面は2b～2c面時の基盤層にもなり、どちらかに掘り込まれた可能性も否めないが、ここでは当面の遺構として捉えておく。

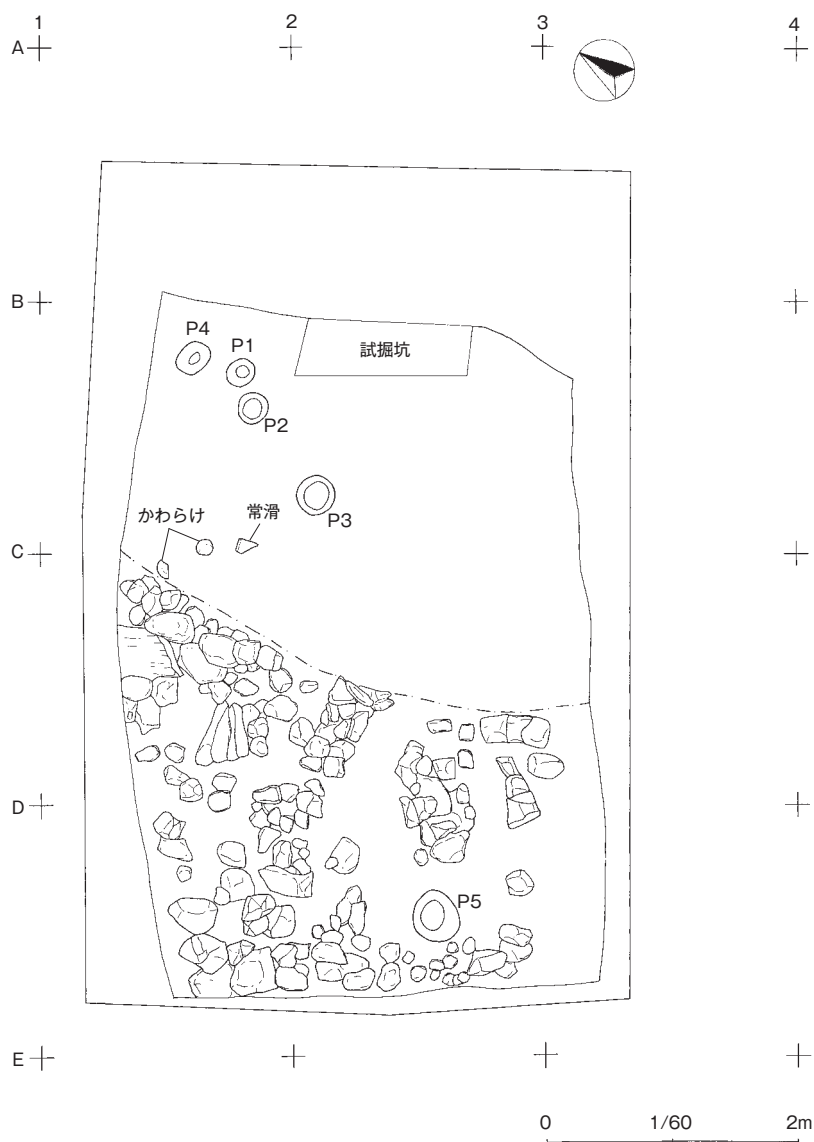


図7 2a面全測図

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高
P 1	円形	13.26 m	24cm	23cm	13.20 m
P 2	円形	13.25 m	23cm	25cm	13.20 m
P 3	円形	13.24 m	30cm	31cm	13.20 m
P 4	隅丸円形	13.25 m	28cm	26cm	13.16 m
P 5	不整円形	13.23 m	37cm	40cm	13.13 m

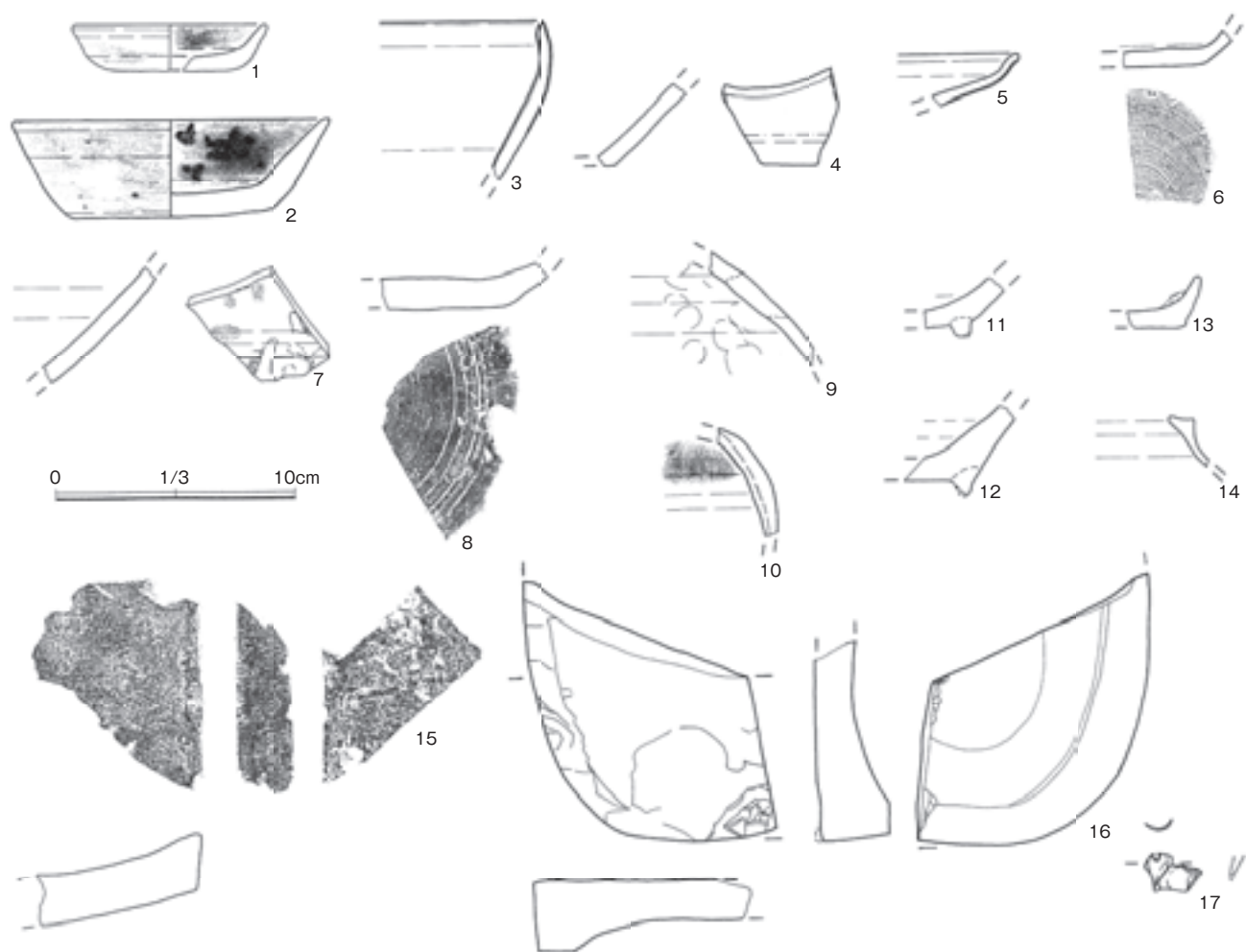


図8 2a面遺構外出土遺物

2a面遺構外出土遺物 (図8、図版6、表1)

1面構成土と2a面構成土上に堆積する図5-1～3層中から出土した遺物、総数65点中17点を図示した。かわらけ小皿(1)・大皿(2)、同一個体である瀬戸窯天目茶碗(3・4)、瀬戸窯の皿(5・6)、鉢(7・8)、壺(9～11)、内面に磨滅がみられる常滑片口鉢I類(12)、坩堝として使われたと思われる東海諸窯の皿(13)、伊勢土鍋(14)、格子叩き目ある平瓦(15)、中国安徽省歙州石で作られた推定長さ7寸×幅5寸とされる楕円硯(16)、折れ曲がり残存状態が部分的だが、一部穿孔箇所があり、薄く丸味を帯びた鑄造をしている用途不明銅製品(17)などが出土している。

### 3. 2b面の遺構と遺物

(図9、図版3)

調査区南部の泥岩版築面を基盤とし、その北限から70cm前後の範囲で2b面構成土(図5-8層)が2a面検出時には確認できていた。後述するが、2c面時の池状遺構が埋まってから、2a面を形成する段階途中で遺構が掘られている。調査区中央あたりから北側にやや落ち込み、わずかに平坦になる。泥岩版築面では2a面と変わらず標高13.2m前後、北側西部では13.1m、東部に向かい緩やかに低くなり、12.9mを測る。柱穴11口を検出した。

各遺構から出土した遺物はごく僅かで、P3・9から常滑窯甕小片1点ずつ、P4から常滑窯甕片2点、P8からかわらけ大皿小片1点であり、どれも図示不可能な遺物であった。

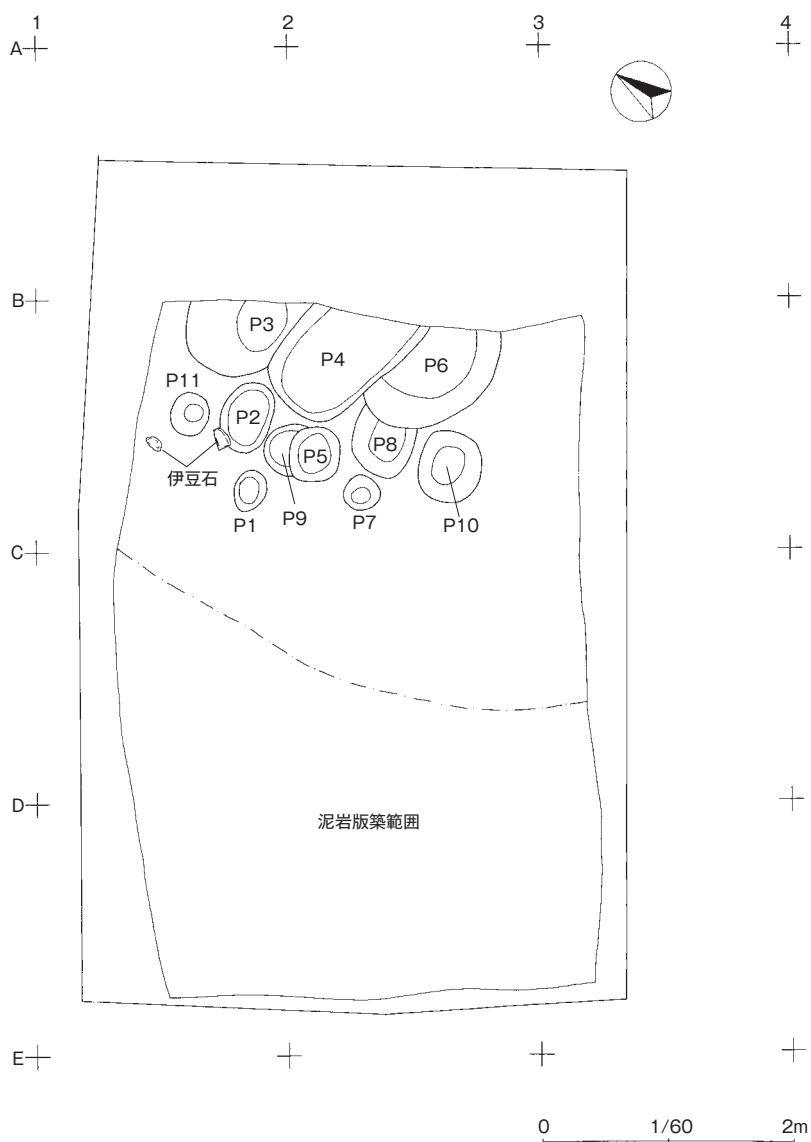


図9 2b面全測図

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
P 1	楕円形	13.10 m	32cm	34cm	13.07 m	—
P 2	不整形	13.10 m	42cm	57cm	13.05 m	—
P 3	不明	13.10 m	98cm以上	69cm以上	12.72 m	P 4より古い
P 4	楕円形	13.10 m	80cm	98cm以上	12.70 m	P 3・6より新しい
P 5	不整形	13.10 m	40cm	44cm	13.01 m	P 9より新しい
P 6	不明	13.10 m	66cm以上	94cm以上	12.82 m	P 4より古い
P 7	不整形	13.10 m	30cm	28cm	12.99 m	—
P 8	不整形	13.10 m	49cm	40cm以上	12.97 m	P 6より古い
P 9	不明	13.10 m	30cm以上	42cm	13.07 m	—
P 10	不整形	13.10 m	50cm	56cm	12.89 m	—
P 11	円形	13.10 m	31cm	35cm	13.02 m	—

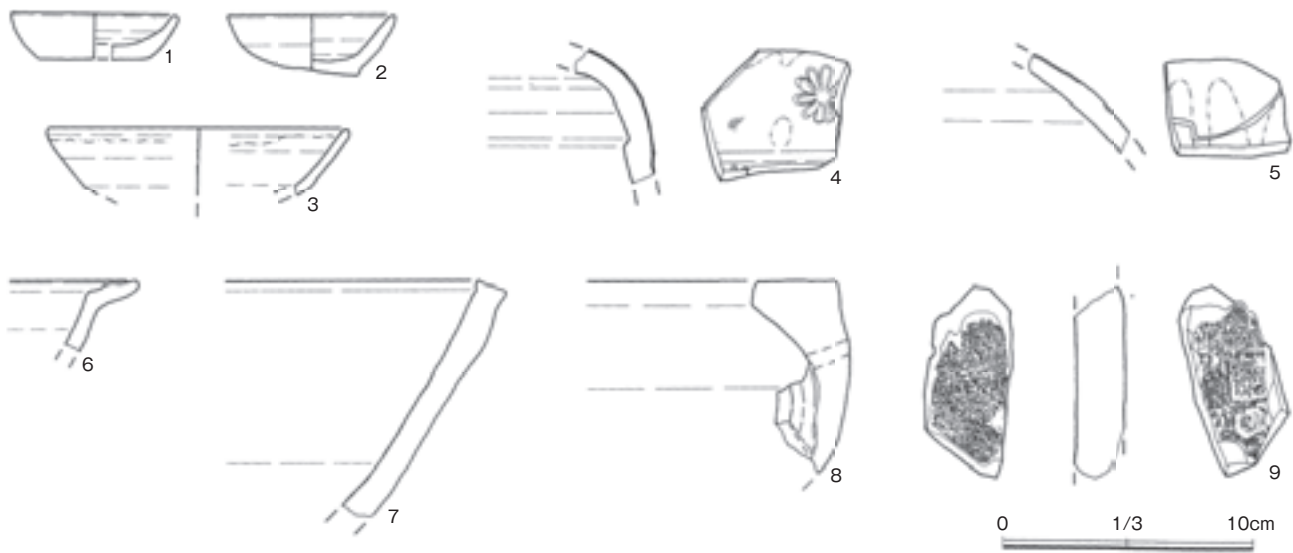


図10 2b面遺構外出土遺物

#### 2b面遺構外出土遺物

(図10、図版7、表1)

2a面から当面検出時までの掘り下げ段階で出土した遺物を2b面遺構外出土遺物として一括した。図5-4・5層に該当し、かわらけ、瀬戸・常滑窯製品、瓦、火鉢、伊勢鍋、鳥骨、緑泥片岩を含むがいずれも小片のため、総数64点中9点を図示した。

図示した遺物は、かわらけ小皿(1・2)、瀬戸窯緑釉小皿(3)、外面に12弁の菊花文スタンプを施す瀬戸窯仏華瓶(4)、外面線刻がみられる瀬戸窯の四耳壺(5)、瀬戸窯折縁深皿(6)、常滑窯片口鉢Ⅱ類(7)、河野分類Ⅵ類の火鉢(8)、全体摩耗が著しく、凸部格子叩き目を施す平瓦(9)である。

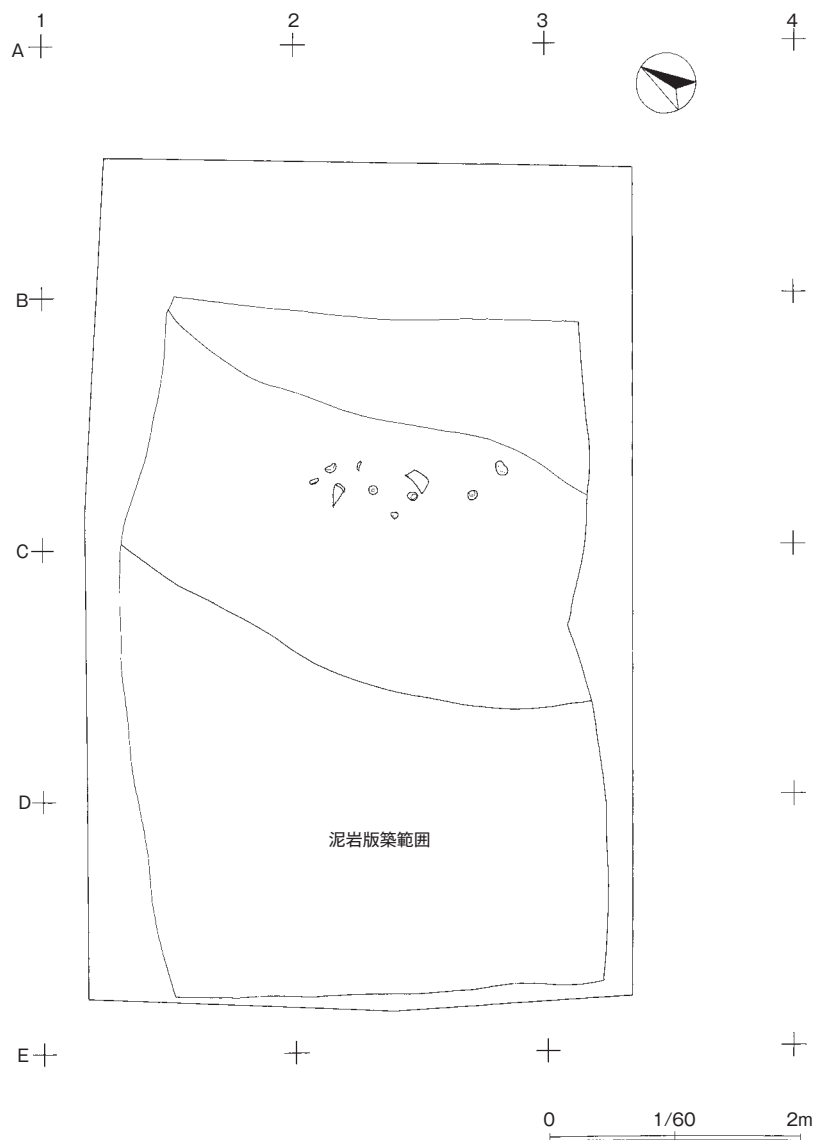


図11 2c面全測図

#### 4. 2c面の遺構と遺物

(図11、図版4)

2a面泥岩版築面から落ち込み、2b面構成土直下に池状遺構1基を検出した。



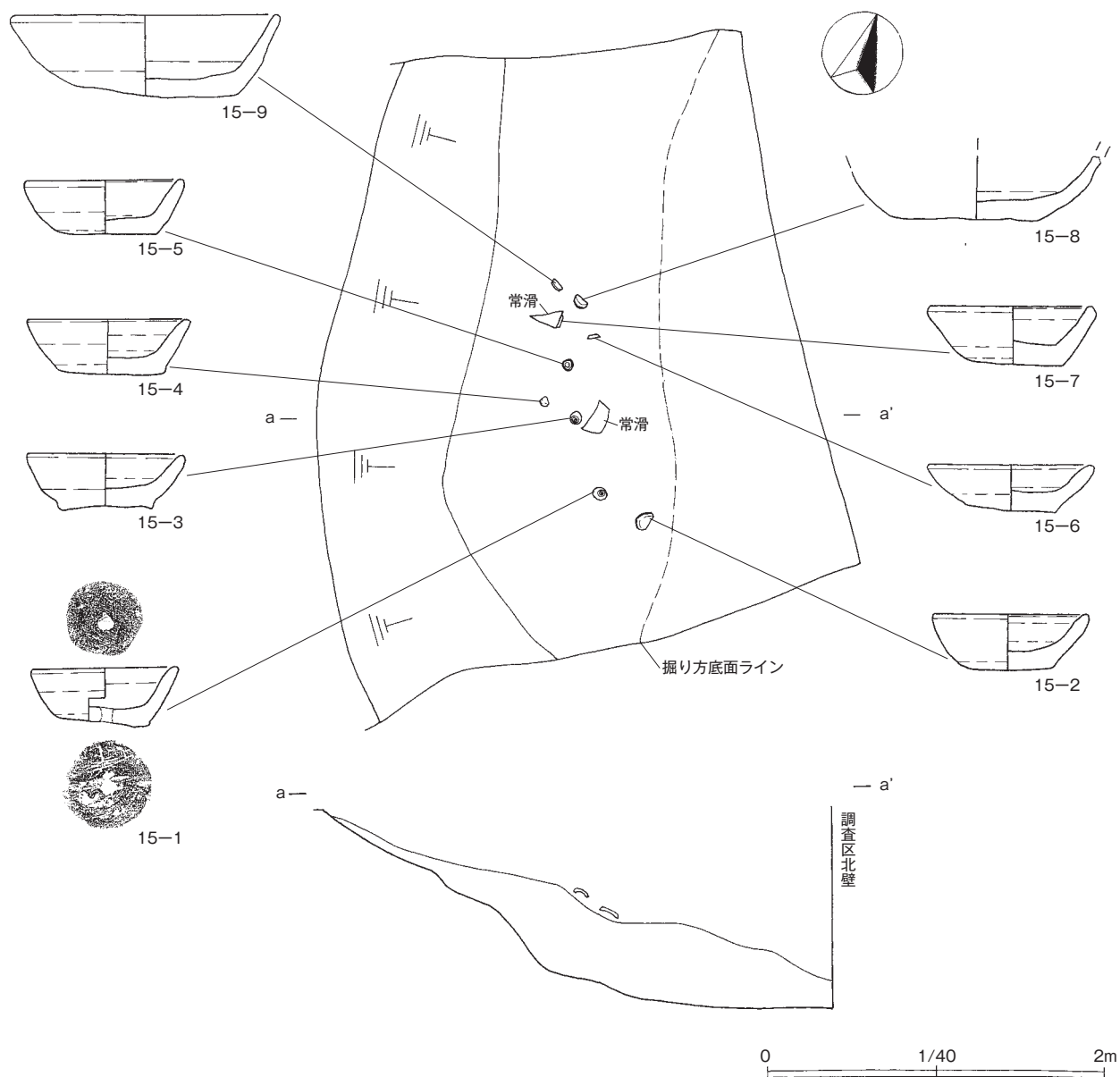


図12 2c面池状遺構1

池状遺構1 (図12、図版4)

2面基盤層である泥岩版築面から落ち込み、2b面構成土直下で検出した。池状遺構とした経緯は、覆土の堆積状況や土層観察もしくは立地的な面などから判断した。東側での掘り込みはDラインから北に80cm、西側ではCライン上に位置し、真北を軸とした場合、北方向から南東方向へとやや湾曲している。主軸方位はN - 17° 20' 00" - Wを測る。調査範囲内では泥岩版築面から底面にかけての一部を確認した。おそらく横幅は半分以下の検出で、南部以外は調査区外に拡がる。掘り方は、調査区中央から北壁方向に向かって傾斜角約30°で落ち込み、さらにそこから約45°の傾斜になり、底部平坦になっている。底面標高は西側で12.3 m、東側で12.0 mを測る。覆土は図5に示したように、斜面に沿ってc・e～i層が堆積したあとに、覆土中最も堆積量が多いd層が埋まり、a・b層が堆積した様相である。

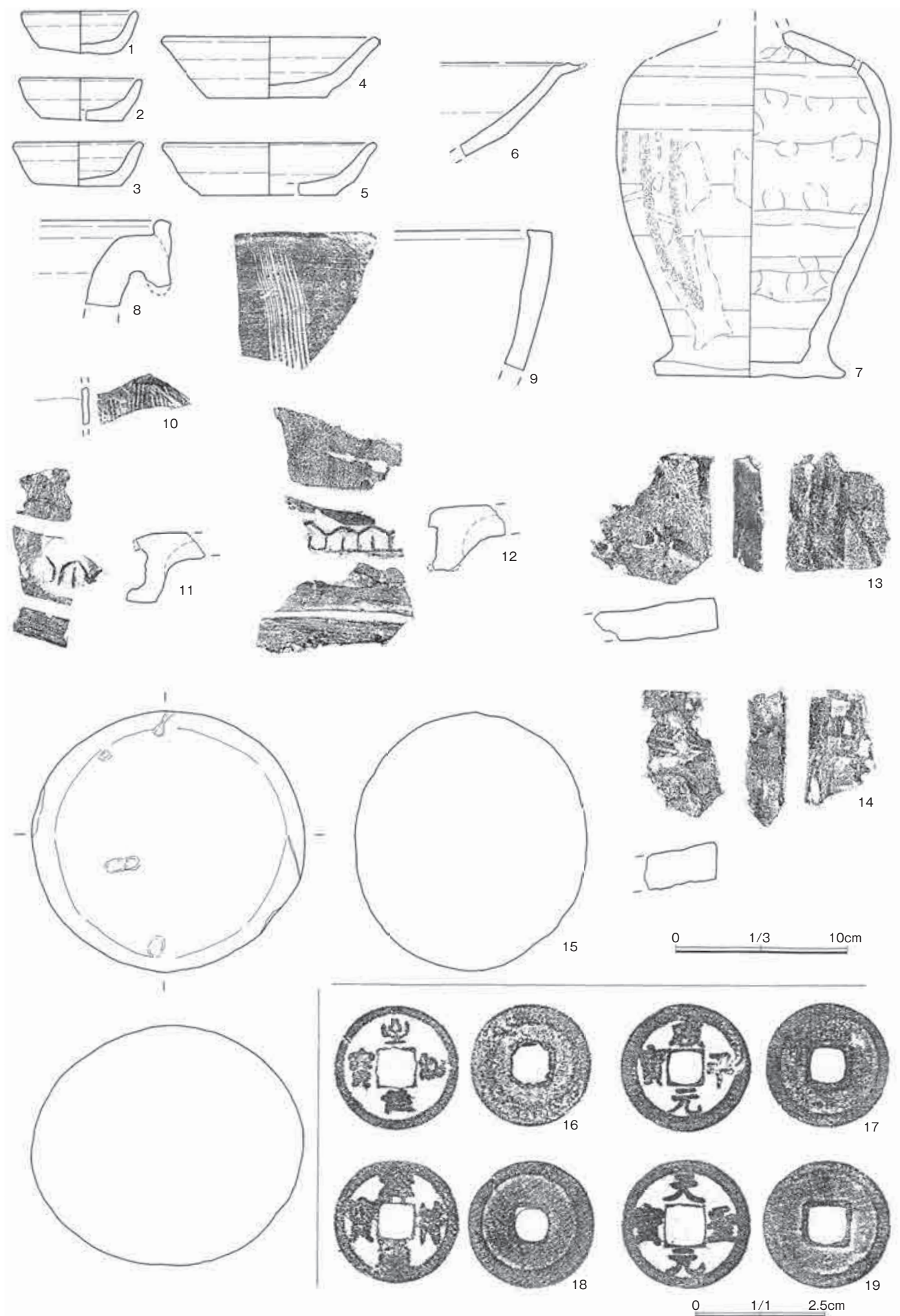


图13 2c面池状遺構1覆土中出土遺物(1)

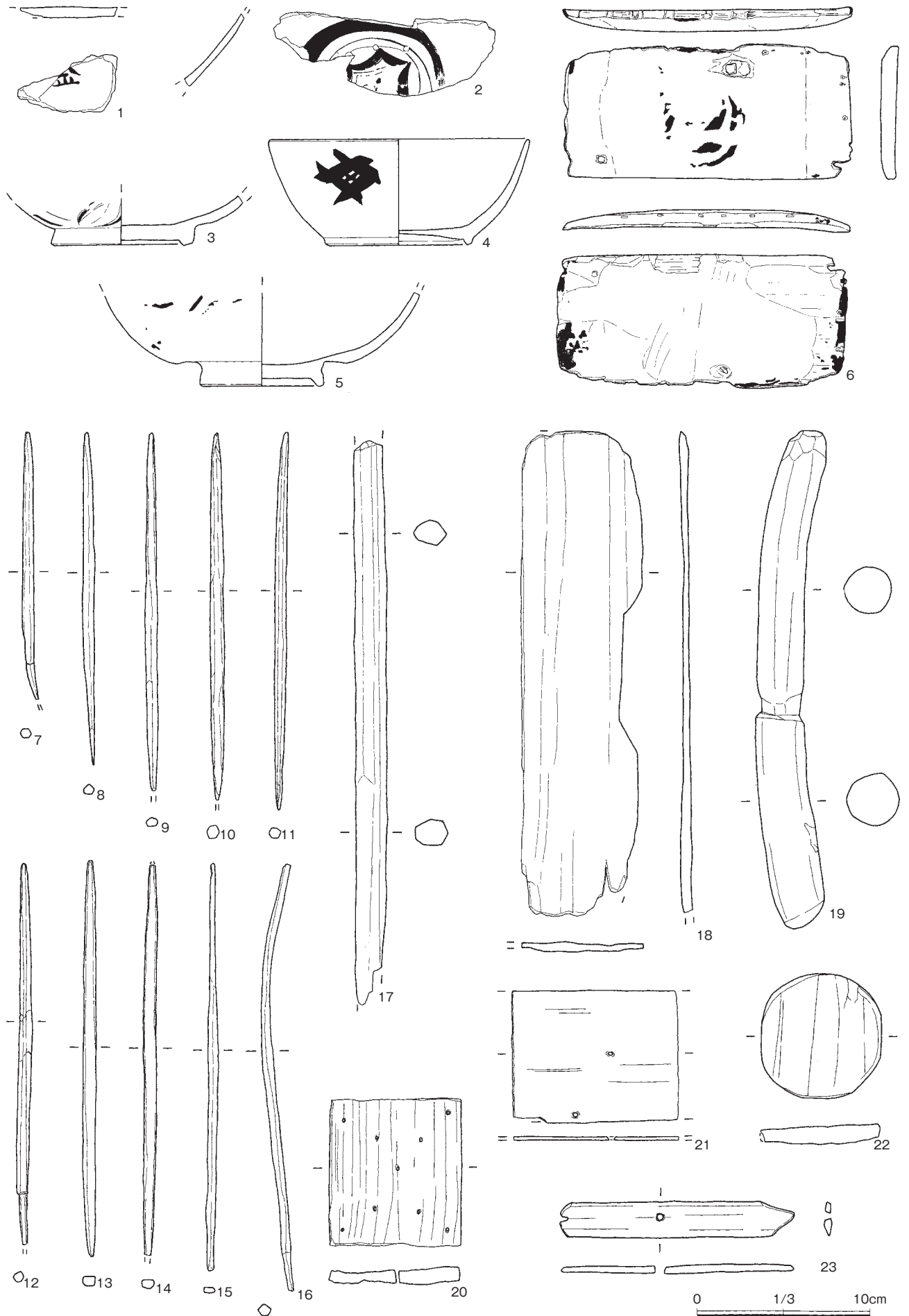


图14 2c面池状遺構1覆土中出土遺物(2)

池状遺構 1 覆土中出土遺物 (図13～15、図版7～10、表1～3)

図5-a～f層より出土した遺物を図示した(図13)。当遺構からは、自然遺物も含め、後述する最下層出土遺物を合わせると229点を数え、そのうちの115点が覆土中より出土している。主に木製品が主体となる。かわらけ小皿(1～3)・大皿(4・5)、瀬戸窯折縁深皿(6)、古瀬戸中期様式の瓶子(7)、8型式の常滑窯甕(8)、備前播鉢(9)、伊勢羽釜(10)、同一個体である上向き剣頭文を施す軒平瓦瓦当部(11・12)、凹面模骨痕、凸面縦位の叩き目を施す平瓦(13)、凸面市松状の叩き目がある平瓦(14)、至和元寶(16)、威平元寶(17)、祥符通寶(18)、天聖元寶(19)が出土している。15は自然的か人工的にやや楕円形状を呈しているのか不明だが、重量4.4kgを計る球状の砂岩である。五輪塔水輪の形状に類似してはいるが、その岩質や作成技法には基づくものではないという(古田土氏の見解による)。人工的とした場合、用途は様々だが、「重石」としたいところである。

また、木製品が多量に出土しており(図14)、内面朱漆で塗布され、外面底部に「金」と朱漆で描かれた漆器皿(1)、内面朱漆を塗布、外面には構成文を描く漆器碗(2)、そのほか図示した以外に14片あるが、細かく接合できる状態ではなかった。3・4は共に内面に朱漆が施され、外面に手描き文様が描かれる漆器碗。後者は井桁文が描かれている。全体に黒漆を施し、朱漆で手描きされているが剥離著しく不明瞭である漆器碗(5)、四周面取加工され、上端部に組み接ぎ状の切り込みや下端部に不等間隔の穿孔が6箇所、表面に巴文と思われる墨書が残る箱物状の木製品(6)が出土している。7～16は木製の箸で四角や多角形に削り加工されている。両端部欠損しているが、長さ30cmを超える菜箸(17)、板草履芯(18)、段状の削り加工による持ち手部分を細工した播粉木(19)、正方形の薄い板に×印状の穿孔がある板締染めの型板と思われるもの(20)、薄く削り加工してあり、2つの穿孔が残る用途不明木製品(21)、周縁部面取り加工を施す円板(22)、全体平坦に薄く、中央に穿孔がみえるトンボの羽根(23)が出土している。

図15のかわらけは、図12にも示したように最下層の上面に廃棄されてあった一群を取り上げた。常滑窯甕も出土しているが、図示するには至らなかった。1～7は口径7cm前後を測るかわらけ小皿、1は底部中央に穿孔がみられる。8・9は大皿、8は口縁部が欠損しているが、9と類似する形状をしており、推定口径12cm弱とみられる。

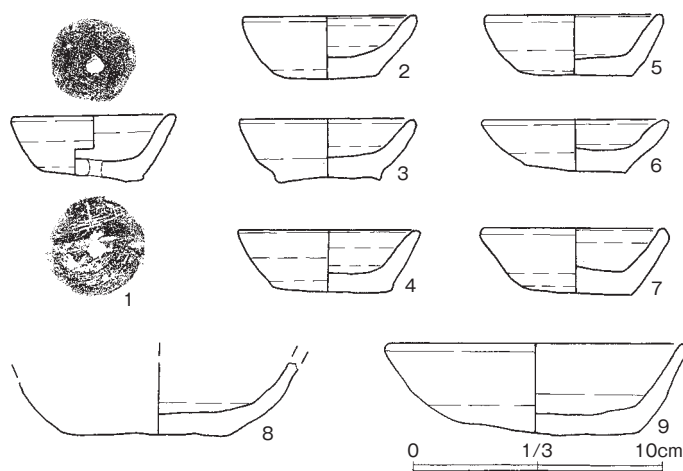


図15 2c面池状遺構 1 覆土中出土かわらけ

池状遺構 1 最下層出土遺物 (図16、図版10～11、表3)

図5-g・h層より出土した遺物である。当遺構内から229点の自然遺物を含む遺物が出土しており、そのうちの114点、覆土中からの出土遺物と比べ多く廃棄されてある。半分以上が木製箸であった。

1～4はかわらけ小皿、3・4は再火を受け変色している。5は古瀬戸中期様式Ⅲ～Ⅳ期の平底末広碗、6も同じく古瀬戸中期様式の平碗で高台付きであるが、おそらく焼成前に潰れてしまったと思われる。7は凸部格子叩き目を施す平瓦の小片、8は鉄製の鍋弦だが、廃棄された状況により形状が変形している。9は内外面に黒漆が施され、朱漆で情景文を手描きされている漆器の碗、10は漆器碗の胴部片、

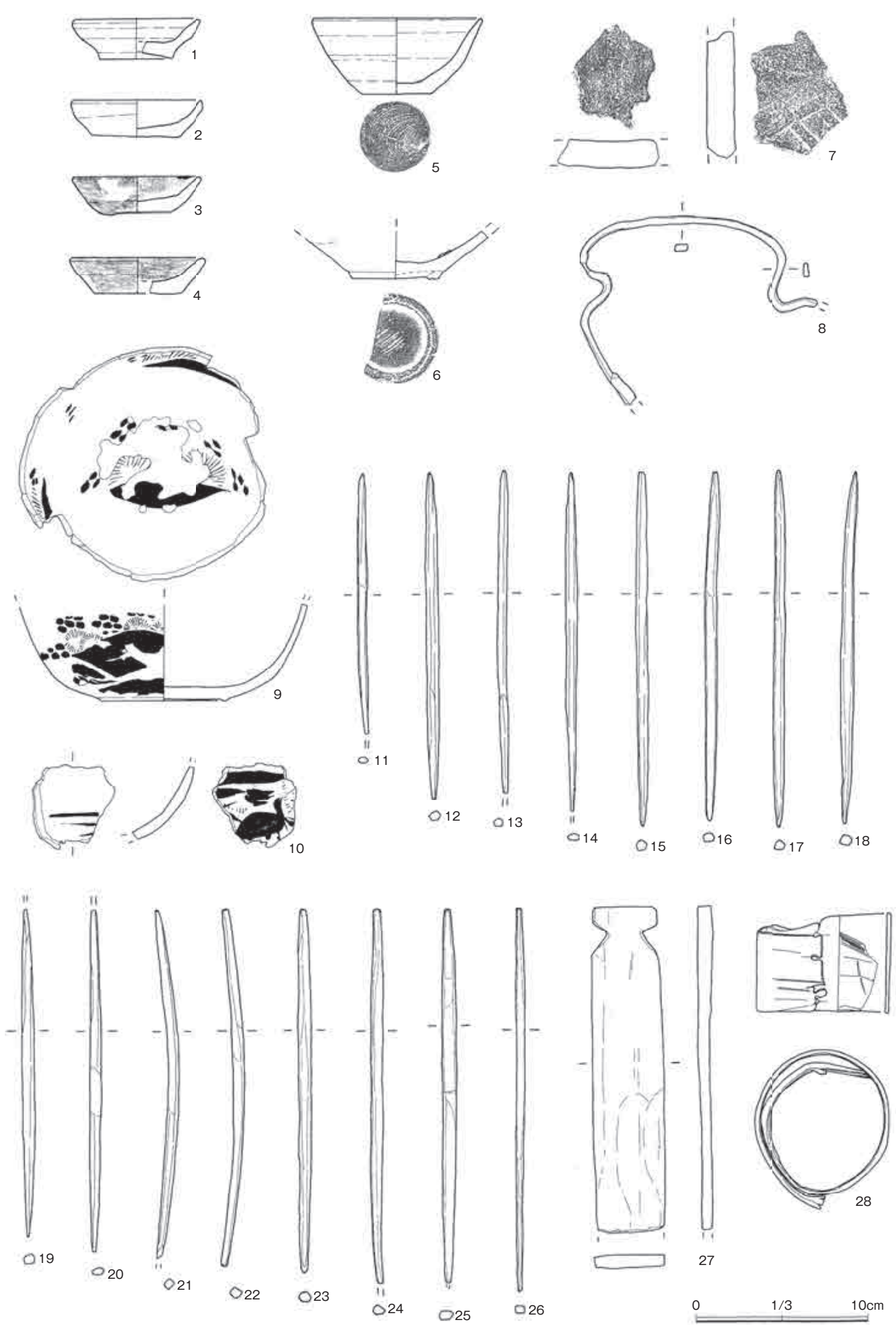


图16 2c面池状遺構1最下層出土遺物

亀と思われる動物を含む情景文が手描きされている。11～26は長さ15.0～21.9cmを測る木製箸である。27は上端部両側面からV字の挟り加工がされている木製の荷札、28は曲物。側板に綴じ合わせたあとの穿孔痕が残る。廃棄状況により縮小した状態で出土した。

## 5.2 面下トレンチ

(図5・17、図版5)

調査区東壁側に沿って幅80～100cmの南北方向のトレンチを入れ、下層を確認した。南側部分は図5-9層を除去したところまで掘り下げた。底面標高12.20mを測る。Cライン南側60cmほどからさらに掘り下げ、北側では底面標高11.50mまで確認した。一部水抜き用に11.25mまで深掘りしたが層位に変化は認められなかった。また、2c面池状遺構1の範囲をわずかながら確認するため、北側の未掘部分を一部拡張した。結果、池状遺構1の堆積層は変わらず、上層部分での判断だが、調査区外に拡がる様相であった。

10・11層も池状遺構1の覆土の可能性はある。9・12・13層の泥岩層を削平して、20cm大の泥岩・木端・粗砂多く含む暗灰色粘質土(10層)と木端少量を含む灰色粘質土(11層)の堆積がみられたことから、10・11層も池状遺構1の覆土の可能性ないしは時期的な差がある同類の遺構と思われる。以下、泥岩粒少量含む黒褐色粘質土(15層)が薄く堆積し、15cm大までの泥岩が多量に含む黒褐色粘質土(16層)堆積している層位まで確認を行った。トレンチ内からの遺物の出土は認められなかった。

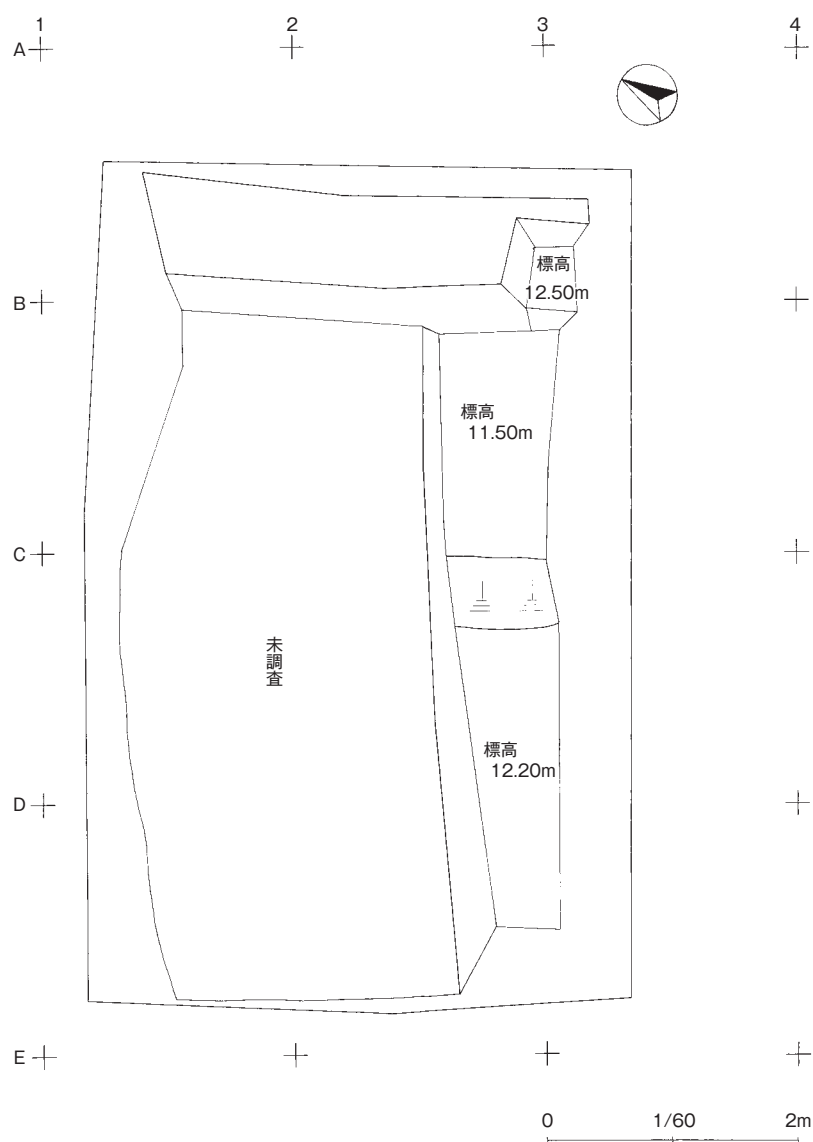


図17 2c面下トレンチ

## 第四章 まとめ

本調査地点は、鎌倉市南東部に在る弁ヶ谷内の中央支谷入口に位置する。弁ヶ谷には現在では廃寺になってしまっているが、寺院址の記録が多く、宗教的空間地であったことがみてとれる。周辺の調査例からもそのような痕跡が成果として挙っている。本調査でもその一端と想像させる遺構や遺物を検出したが、狭小な調査面積に加え、多量の湧水や調査期間の縮小などの影響により、不明瞭な部分が多い。

1～2 c 面までの4時期の遺構群やトレンチ内の土層観察のみ検出したが、大別してⅣ期に分けられることができる。以下、各期古い順に様相を述べながら、それぞれ推測を兼ね、若干の考察をしてみたい。

### Ⅰ期

2面下トレンチ内で確認した堆積層に相当する。後述する池状遺構1の直下に堆積する粘質土層は泥岩版築層を削り込んで堆積している。覆土中から木端が含まれており、極く狭い範囲もあり、遺物が出土しない状況であったが、30～50cmほどの人工的と思われる泥岩層(図5-13層)より新しい。池状遺構1の前身である遺構の可能性もある。その直下、地表下310cm、標高11.50mの位置に泥岩粒を少量含む黒褐色粘質土を確認し、その下層も同様の堆積をしていたため中世基盤層とした。

年代は出土遺物がなく、周辺調査からの類似性などからも比較が難しく、Ⅱ期の年代から考えると14世紀以前としか言い得ることができない。

### Ⅱ期

2c面池状遺構1のみが該当する。土丹版築層から掘り込まれた深さ1.2mの遺構である。粘土に近い覆土に木端や木葉が含まれていることから、水と関係する遺構である要素は強いが、可能性としては、河川といったことも考えられる。その場合、現在の弁ヶ谷内の立地を見ると谷戸内を流れる川は、豆腐川のみである。現在はほとんどが暗渠になっており、第1章3節で述べたが材木座六丁目640番2地点(図1-No.249内7地点)では13世紀半ば頃の豆腐川の護岸が検出されている。鎌倉時代中期には現在見える豆腐川の位置はあったようで、そこから推察すると谷戸東部から源流があったと思われる。当遺構は北から南東方向に湾曲し、高低差もあることから流れを考えるなら南東方向に流下していると思われる。そうすると、中央支谷から流れ、南側に流れる豆腐川に合流する流路があったとも考えられるが、周辺の調査結果により明らかになるであろう。

年代については最下層から瀬戸中期様式の碗や器形がわずかな丸みをもつが直線的に開く傾向と、器壁がやや厚くなるかわらけが出土していることから、14世紀中～後半頃と考えたい。覆土中からは、器形が直線的に開き、器壁が厚くなるものが大半を占め、古瀬戸中期様式と思われる瓶子や常滑窯甕8型式、漆器碗の形状から15世紀前半期と考えられ、池状遺構の年代は14世紀中頃～15世紀前半と幅広く、1世紀に亘り、存続していたと考えられる。

### Ⅲ期

池状遺構が廃絶後の2b・2a面に相当する。池状遺構が泥岩版築面上の高さまで埋まりかけた途中に2b面がある。建物などの柱穴といった要素はなく、浅形の遺構に遺物もほぼ皆無なことからゴミ穴の可能性も薄く、性格は不明である。2a面も同じく、池状遺構が埋まったあとの泥岩版築面と平坦に整地された面であるが、遺構も希薄である。

年代は、2a・b面共に14世紀後半からみられる遺物が出土しているが、各面を構成する堆積層中から出土しており、ここでは整地する際に混入した遺物であろう。2a面と2b面との年代差は、あまり大差ないと思われ、Ⅱ期との年代を考えると、15世紀前半～中頃としたい。

## Ⅳ期

1面が相当するが、直上が現代の表土層であり、遺物が出土してないことから中世遺構面と断定するには及ばず、近世以降の遺構面の可能性がある。

本地点は新善光寺があったとされる支谷の開口部に位置し、すぐ北側から谷奥に向かい傾斜が強くなる。出土遺物は池状遺構からの木製品が主体であるが、それを除いてみると、瀬戸窯製品の出土が目立ち、舶載陶磁器が全く含まれていない。これはこの地点での特徴であり、鎌倉遺跡群の中での遺物組成からすると寺域内における要素が窺える。新善光寺境内の一角となるかは想定の域を出ないが、寺院址の一角であると想定している。池状遺構を「池」と断定した場合、武家屋敷も含め、それらに伴う庭園の一角と考えられる。

平成21年度に本調査地点の南東に隣接する分譲地の発掘調査を筆者が担当し、実施している(図2)。調査成果から若干様相が異なる部分があるが、今後の報告でさらなる検討をしたい。

### [引用参考文献]

大河内勉 1993「漆器とかかわりの器形比較と相関性について」『鎌倉考古 No.26』鎌倉考古学研究所

根本志保 2010「弁ヶ谷遺跡(No.249)の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所



表1 遺物観察表(1)

( )=復元値 [ ]=遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
8-1	2a面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(8.0)	(4.5)	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.やや良好 f.内面口縁下煤付着、外面胴部にも薄く黒色残る 燈明皿か
8-2	2a面遺構外	かわらけ	口縁部1/3 ～底部完形	13.0	8.5	4.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好 f.全体に煤付着 燈明皿か
8-3	2a面遺構外	瀬戸 天目茶碗	口縁～胴部片	—	—	[6.5]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.黒色不透明 内面～外面下部施釉 e.良好 f.図8-4と同一個体
8-4	2a面遺構外	瀬戸 天目茶碗	底部片	—	—	[3.9]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.黒色不透明 内面・外面上部施釉 e.良好 f.図8-3と同一個体
8-5	2a面遺構外	瀬戸 皿	口縁 ～体部小片	—	—	[2.1]	b.灰白色 良好 d.灰釉明灰緑色透明 内面口縁下～外面施釉 内底部自然釉付着 e.良好
8-6	2a面遺構外	瀬戸 皿	底部片	—	—	[1.3]	a.外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 黒色粒 良好 c.黄灰色 e.良好 f.内面わずかに重ね焼き痕あり
8-7	2a面遺構外	瀬戸 鉢	胴部片	—	—	[4.7]	b.黄味灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 部分的に剥離 e.良好
8-8	2a面遺構外	瀬戸 鉢	底部片	—	—	[1.8]	a.外底糸切痕 b.灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 内面降灰部白色 e.良好
8-9	2a面遺構外	瀬戸 壺	肩部小片	—	—	[4.7]	a.外面周回する二条線 b.暗灰白色 砂粒 白色粒 良好 c.内面淡灰緑色 外面降灰部暗灰色 e.良好
8-10	2a面遺構外	瀬戸 壺	肩部小片	—	—	[4.5]	b.灰白色 白色粒 良好 c.内面暗灰色 外面降灰部灰緑色 e.良好
8-11	2a面遺構外	瀬戸 壺	底部片	—	—	[2.3]	a.貼付高台 内底部糸切痕 b.黄味灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 内面自然釉付着 e.良好
8-12	2a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	—	[3.6]	a.貼付高台 b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや粗胎 c.灰白色 e.良好 f.内面磨滅
8-13	2a面遺構外	東海系 皿	底部小片	—	—	2.1	b.灰色 砂粒 白色粒 やや粗胎 c.灰色 e.ややあまい軟質 f.内面鉄塊付着 垢場か
8-14	2a面遺構外	伊勢 土鍋	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.黒色 砂粒 雲母 赤色粒 やや粗胎 c.淡白褐色 e.やや良好 硬質 f.図示不可能な同一個体2片あり
8-15	2a面遺構外	平瓦	左上端部側	長[7.3] 幅[6.7] 厚2.0			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.明灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 赤色粒 小石 やや粗胎 c.灰色 e.良好
8-16	2a面遺構外	楕円硯	左硯背部	長[7.9] 幅[8.8] 厚2.8			a.表面わずかに緑あり 硯背覆手加工 b.頁岩 c.青灰白～薄紅色 f.中国安徽省歙州石(広東省端石の青) 推定長7寸×幅5寸(汐見一夫・垣内光次郎両氏の見解による) 参考資料:鎌倉市埋蔵文化財緊急速報報告書20(第1分冊)p124.図34-24
8-17	2a面遺構外	用途不明 銅製品	不明	長1.5 幅1.0～1.5 厚0.2			a.上部先端に穿孔 全体薄く丸味を帯びる f.折れ曲がった状態で出土
10-1	2b面遺構外	かわらけ	口縁 ～底部1/4	(6.6)	(4.3)	1.8	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色 e.やや良好
10-2	2b面遺構外	かわらけ	口縁部 1/6欠損	(6.6)	3.5	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
10-3	2b面遺構外	瀬戸 緑釉小皿	口縁～ 胴部1/8以下	(11.8)	—	[2.6]	b.黄味灰白色 砂粒 黒色粒 良好 d.口縁部施釉 黒色 e.良好 硬質
10-4	2b面遺構外	瀬戸 仏華瓶	胴部片	—	—	[5.1]	b.黄味灰白色 白色粒 良好 d.灰釉明灰緑色透明 e.良好 硬質 f.外面12弁の菊花文スタンプ
10-5	2b面遺構外	瀬戸 四耳壺	肩部片	—	—	[3.8]	b.灰白色 白色粒 黒色粒 良好 d.内外面淡褐色 外面灰釉暗灰緑色不透明 e.良好 硬質 f.外面線刻文様あり
10-6	2b面遺構外	瀬戸 折縁深皿	口縁部小片	—	—	[2.8]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.灰釉明灰緑色半透明 e.良好 硬質
10-7	2b面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[9.3]	b.赤橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.外面赤褐色 内面降灰淡茶色 e.良好
10-8	2b面遺構外	瓦質 火鉢	口縁部片	—	—	[7.5]	b.黄味白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.灰黒色 e.良好 f.河野分類Ⅵ類
10-9	2b面遺構外	平瓦	部位不明小片	長[7.5] 幅[3.1] 厚1.9			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.淡赤褐～黄灰色 砂粒 黒色粒 赤色粒 小石 粗胎 c.灰色 e.やや不良 f.全体磨耗著しい
13-1	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁部 一部欠損	6.4	4.7	2.35	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡黄緑～黄灰色 e.やや良好
13-2	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁～底部 5/6	6.75	4.7	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-3	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	完形	7.1	4.7	2.5	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-4	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁部1/2 ～底部完形	12.2	6.9	3.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
13-5	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁1/3 ～底部1/4	(12.0)	(7.8)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-6	2c面 池状 遺構1 覆土中	瀬戸 折縁深皿	口縁～胴部片	—	—	[5.3]	b.灰黄色 砂粒 黒色粒 やや粗胎 d.灰釉淡灰緑色不透明 内面～外面上部施釉 e.良好 f.内面口縁下磨滅
13-7	2c面 池状 遺構1 覆土中	瀬戸 瓶子	胴部1/4 ～底部完形	胴部径 (15.6)	10.9	[19.8]	b.灰～灰白色 砂粒 白色粒 精良胎 c.内面灰色 外面淡茶褐色 降灰部明灰緑色 e.良好 f.内面肩部焼けている 古瀬戸中期様式
13-8	2c面 池状 遺構1 覆土中	常滑 甕	口縁部片	縁帯幅(2.3)			b.灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石多い 粗胎 c.暗褐色～褐色 e.良好 f.中野編年8型式
13-9	2c面 池状 遺構1 覆土中	備前 播鉢	口縁～胴部片	—	—	[8.0]	a.内面8条の櫛描き播り目 b.灰～赤灰色 黒色粒 白色粒 褐色粒 やや粗胎 c.内面灰黒色 外面暗赤褐色～暗灰色 e.良好

表2 遺物観察表(2)

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
13-10	2c面 池状遺構1覆土中	伊勢 羽釜	胴部小片	—	—	[2.1]	a.外面縦位櫛描き状の文様 b.暗灰色 白色粒 良好 c.白橙色 e.良好
13-11	2c面 池状遺構1覆土中	軒平瓦	瓦当左端部	長[3.9] 幅[5.5] 厚1.5～3.6			a.瓦当部上向き剣頭文 凹部横位指ナデ 凸部離れ砂 端部へラ削り b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.不良 f.図13-12と同一個体
13-12	2c面 池状遺構1覆土中	軒平瓦	瓦当中央部	長[4.3] 幅[9.2] 厚1.8～3.5			a.瓦当部上向き剣頭文 凹部横位指ナデ 凸部離れ砂 端部へラ削り b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.不良 f.図13-11と同一個体
13-13	2c面 池状遺構1覆土中	平瓦	狭端右側	長[7.8] 幅[7.0] 厚1.9			a.凹部模骨痕 離れ砂 凸部縦位叩き目 b.淡桃灰色 砂粒 黒色粒 小石 粗胎 c.灰黒色 e.良好
13-14	2c面 池状遺構1覆土中	平瓦	広端右側端部	長[7.1] 幅[4.1] 厚2.0			a.凹部模骨痕 凸部市松状の叩き目 端部へラ削り b.白灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.良好
13-15	2c面 池状遺構1覆土中	球状石製品?	完形	長14.9 幅15.7 厚13.7			b.砂岩 c.明灰色 f.重量4.4kg 自然に球状となったか
13-16	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.35 内縁径1.94 孔径0.62			f.至和元寶 北宋 1045年 篆書
13-17	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.48 内縁径1.91 孔径0.61			f.威平元寶 北宋 998年 真書
13-18	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.43 内縁径1.96 孔径0.68			f.祥符通寶 北宋 1009年 真書
13-19	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.43 内縁径2.06 孔径0.76			f.天聖元寶 北宋 1023年 真書
14-1	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 皿	底部片	長[3.3] 幅[5.6] 厚0.6			a.内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で「金」の手描き
14-2	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/5	長[4.3] 幅[12.6] 厚0.3～0.5			a.内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で構成文を手描き f.ほか胴部片14片あり
14-3	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/6～底部完形	—	7.1	[2.7]	a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で手描き文様あるが不明
14-4	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/2	14.6	7.7	6.95	a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で井桁文を手描き
14-5	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/4～底部1/5	—	(6.4)	[5.3]	a.削り出し輪高台 内外面黒漆塗布 外面朱漆で手描き文様あるが剥離著しく文様不明 f.高台～高台内部調整不良
14-6	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箱物か	部位不明	長7.5 幅16.4 厚0.8～1.2 木釘径0.6 穿孔径0.1～0.35			a.四角面取加工 表面中央に墨書(巴文か) 上端中央に木釘残る 両端下部・左端に穿孔 裏面粗い削り調整 上端部組み接ぎ状の切り込み加工 下端部不均衡間で6つの穿孔 f.所々煤付着
14-7	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[15.3] 幅0.3～0.6 厚0.5			a.多角形に削り加工
14-8	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長19.0 幅0.2～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工 先端鋭く尖る
14-9	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[20.4] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.多角形に削り加工
14-10	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[20.9] 幅0.3～0.7 厚0.7			a.多角形に削り加工
14-11	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長21.5 幅0.3～0.65 厚0.6			a.多角形に削り加工 両端やや丸みを帯びる
14-12	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[21.8] 幅0.4～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工
14-13	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長22.5 幅0.3～0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工
14-14	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	両端部欠損	長[22.2] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工
14-15	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長23.1 幅0.3～0.6 厚0.3			a.四角形に削り加工 両端やや丸みを帯びる
14-16	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長24.3 幅0.5～0.7 厚0.7			a.四角形状に削り加工 両端角張る
14-17	2c面 池状遺構1覆土中	木製 菜箸	両端部欠損	長[32.1] 幅1.5～1.8 厚1.0～1.4			a.全体横幅広く、多角形に削り加工
14-18	2c面 池状遺構1覆土中	木製 草履芯か	約1/2?	長[27.4] 幅5.6～6.9 厚0.3～0.6			a.全体薄く平坦に削り加工 裏面粗い調整で加工途中か
14-19	2c面 池状遺構1覆土中	木製 播粉木	完形	長28.2 幅2.5～2.8 厚2.6～2.9			a.全体丸く削り加工 末端部やや細く、中央下部に段状の削り加工 先端部磨滅
14-20	2c面 池状遺構1覆土中	板締 染め型板か	完形	長8.2 幅7.5 厚0.5～0.8 孔径0.2			a.正方形形状に削り加工 斜めに9つの穿孔 f.型板裏面か
14-21	2c面 池状遺構1覆土中	用途不明 木製品	不明	長7.5 幅[9.4] 厚0.2 孔径0.4			a.全体薄く平坦に削り加工 2つ穿孔
14-22	2c面 池状遺構1覆土中	木製 円板	一部欠損	長7.0 幅6.9 厚0.7～1.0			a.周縁部面取り加工
14-23	2c面 池状遺構1覆土中	木製 トンポの羽根	完形	長2.0 幅13.3 厚0.3～0.5 孔径0.4			a.全体薄く平坦に削り加工 ほぼ中央に穿孔 端部丸く面取りし中央に切れ込み加工 一端は弱く尖らせる削り加工
15-1	2c面 池状遺構1覆土中	穿孔かわらけ	一部欠損	6.5	3.8	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好 f.底部中央穿孔
15-2	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	完形	6.9	3.8	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.やや良好

表3 遺物観察表(3)

( )=復元値 [ ]=遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
15-3	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁2/3～底部完形	7.0	4.5	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針多い 泥岩粒 やや良好 c.淡橙色 e.やや良好
15-4	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	完形	7.0	4.8	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.やや良好
15-5	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	7.0	4.6	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
15-6	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁2/3～底部完形	7.4	4.0	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
15-7	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁～底部2/3	(7.4)	(4.6)	2.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
15-8	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	底部完形	—	6.7	[2.8]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
15-9	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	一部欠損	12.0	7.3	3.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
16-1	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.1)	(4.2)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
16-2	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	完形	7.4	5.1	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや良好 c.淡橙色 e.良好
16-3	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁1/2～底部完形	7.2	4.0	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色～暗灰色 e.良好 f.全体再火により焼けている
16-4	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.6)	(5.0)	2.0	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 やや粗胎 c.黒褐色 e.不明 f.全体再火により焼け強く硬化している
16-5	2c面 池状遺構1最下層	瀬戸 平底末広碗	完形	9.6	3.9	4.3	a.外底糸切痕 b.砂粒 良好 d.灰釉明灰緑色半透明 内面～胴部施釉 内面粗い貫入 e.良好 f.古瀬戸中期様式Ⅲ～Ⅳ期
16-6	2c面 池状遺構1最下層	瀬戸 平碗	胴部1/6～底部1/3	高台径5.0		(2.8)	a.貼付高台 高台内へラ削り b.黄白色 砂粒 黒色粒 良好 d.灰釉明灰緑色不透明 内面・外面上部施釉 e.良好 f.内面重ね焼き痕あり 古瀬戸中期様式Ⅲ期か
16-7	2c面 池状遺構1最下層	平瓦	部位不明小片	長[7.1] 幅[5.9] 厚1.5			a.凹部模骨痕 凸部格子叩き目 b.淡橙色 砂粒 白色粒多い 赤色粒粗胎 c.淡黄灰色 e.良好
16-8	2c面 池状遺構1最下層	鉄製 鍋弦	両端部欠損	長[10.9] 幅[11.7～13.5] 厚0.7			a.断面長方形に鍛造 f.廃棄状況により形状変形している
16-9	2c面 池状遺構1最下層	漆器 椀	胴部1/3～底部完形	—	6.8	[5.5]	a.削り出し輪高台 高台置付木目露出 内外面黒漆地に朱漆で情景文を手描き
16-10	2c面 池状遺構1最下層	漆器 椀	胴部小片	—	—	[4.2]	a.内面黒漆地に朱漆で線状の手描き文様 外面黒漆地に朱漆で亀などの情景文を手描き
16-11	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[15.0] 幅0.5 厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
16-12	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長18.8 幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-13	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[18.5] 幅0.3～0.5 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-14	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[19.5] 幅0.3～0.7 厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
16-15	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.3～0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-16	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.0 幅0.4～0.7 厚0.5			a.やや丸みを帯びる形状に削り加工
16-17	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.4～0.6 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-18	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.2 幅0.4～0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-19	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	末端部欠損	長[18.9] 幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-20	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	末端部欠損	長[19.7] 幅0.3～0.6 厚0.45			a.多角形状に削り加工
16-21	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[20.1] 幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-22	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.3～0.6 厚0.6			a.四角形状に削り加工
16-23	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.8 幅0.3～0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-24	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[21.5] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-25	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	両端部欠損	長[21.4] 幅0.4～0.8 厚0.5			a.四角形状に削り加工
16-26	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長21.9 幅0.5 厚0.4			a.四角形状に削り加工
16-27	2c面 池状遺構1最下層	木製 荷札	下端部欠損	長13.7 幅2.0～4.1 厚0.6～0.8			a.表面・周縁部丁寧な面取り、裏面やや粗雑な面取り 上端部両側面からV字の削り
16-28	2c面 池状遺構1最下層	木製 曲物	側板部 上部欠損	幅6.8 高4.6～5.8 厚0.2 孔径0.2			a.側板縦じ合わせ部分の穿孔4つあり f.廃棄状況などにより本来の形状と違い縮小している模様

表4 層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位		1面遺構外	2a面遺構	2a面遺構外	2b面遺構	2b面遺構外	2c面遺構	合計
	かわらけ	糸切り							
国産陶磁器	瀬戸				壺3 鉢2 天目2 碗2 皿4		壺2 深皿1 華瓶2 皿1	瓶子1 深皿2 鉢1 碗2	25
	常滑				甕17 壺1	甕5	甕11 壺3	甕13	50
	常滑 片口鉢				I類2 II類3		II類5	II類1	11
	備前							挿鉢1	1
	その他				埴鍋1				1
	瓦		近世平2		丸1 平2		平1	軒平1 平4	
土製品	火鉢				瓦質1		瓦質2		3
	伊勢				鍋1		鍋1	羽釜1	3
石製品	硯				中国1				1
	その他							球状1	1
金属製品	銅銭							4	4
	その他				不明銅製品1			鍋弦1	2
木製品	漆器							椀7 皿1	8
	加工木製品							箸86 菜箸1 曲物1 折敷2 播粉木1 草履芯6 荷札1 箱1 型板? 1 円板1 トンボ1 建具2 不明10	114
自然遺物	骨						鳥3	獣12	15
	その他						緑泥片岩1	松2 炭化米3	6
合計		5	1	65	6	64	229	370	



▲1. 調査地点遠景（南西から）



▲2. 調査地点近景（東から）



1. 1面全景 (南から) ▶



◀ 2. 2a面全景 (南から)



3. 2a面泥岩版築範囲 (東から) ▶



▲1. 2a面遺構外出土硯(西から)

▼2. 2a面遺構外出土銅製品(南から)



▲3. 2b面全景(北から)



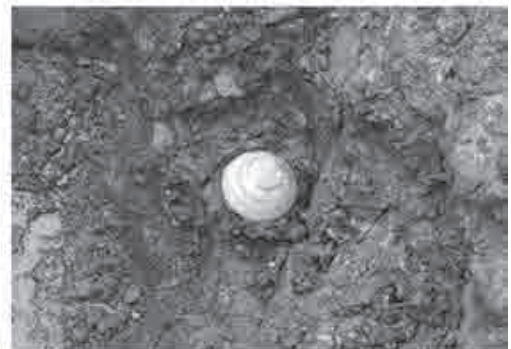
◀ 1. 2 c面全景 (北から)



2. 2 c面全景 (南から) ▶



▲ 3. 2 c面池状遺構 (西から)



▲ 4. 池状遺構 1 覆土中出土  
瀬戸碗 (西から)





▲1. 2面下トレンチ (北から)

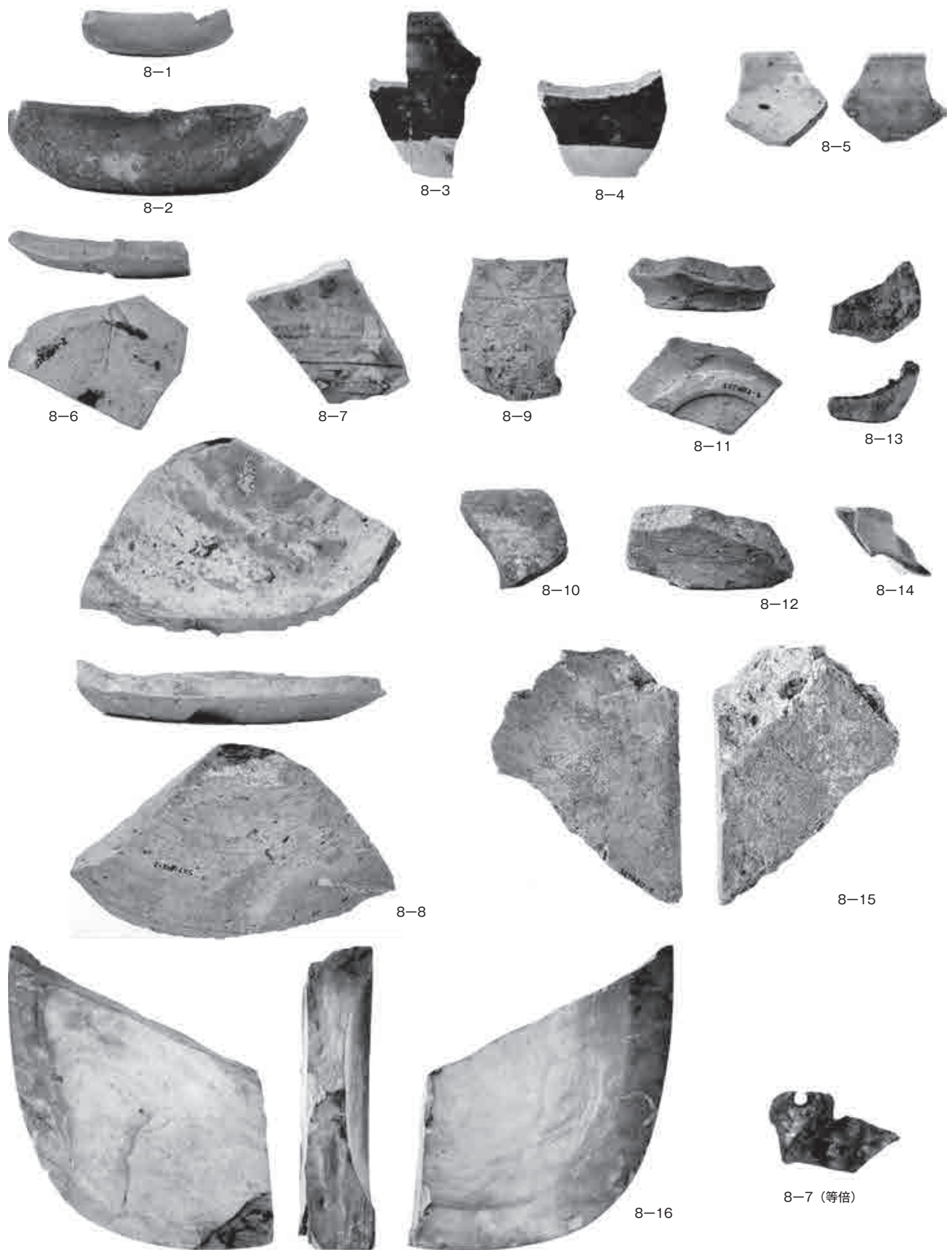
▼2. 調査区北壁土層堆積 (南から)



▼3. 調査区北壁土層堆積最下部 (南から)



◀4. 調査区東壁  
土層堆積 (西から)



▲2a面遺構外

出土遺物(1)



▲2b面遺構外

▼2c面池状遺構1 覆土中



出土遺物(2)



13-8



13-9



13-10



13-12



13-11



13-13



13-14



13-15



13-16



13-17



14-1



13-18



13-19



14-2

※銭は等倍



14-3



14-4

▲2c面池状遺構1覆土中

出土遺物(3)



14-5



14-6



14-7



14-8



14-9



14-10



14-11



14-13



14-14



14-15



14-7



14-8

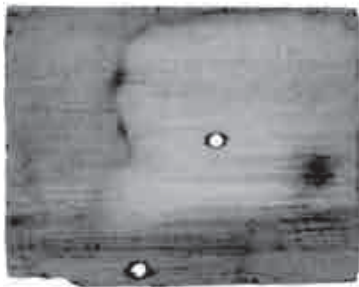


14-9



14-20

▲2c面池状遺構1覆土中  
出土遺物(4)



14-21



14-22



14-23



15-1



15-2



15-4



15-6



15-3



15-5



15-7



15-8



15-9

▲2c面池状遺構 1 覆土中

▼2c面池状遺構 1 最下層



16-1



16-6



16-8



16-2



16-7



16-3



16-4



16-9

出土遺物 (5)



16-9



16-10



16-27



16-28



16-11



16-12



16-13



16-14



16-15



16-16



16-17



16-18



16-19



16-20



16-21



16-22



16-23



16-24



16-25



16-26

▲2c面池状遺構1最下層  
出土遺物(6)



▲獸骨



▲鳥骨

▲松

▲炭化米

出土遺物(7)



# 米町遺跡 (No. 245)

大町二丁目 993 番 1 外地点

## 例 言

1. 本報は、「米町遺跡 (No.245)」内、大町二丁目 933 番 1 外における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成 20 (2008) 年 10 月 22 日～同年 11 月 10 日にかけて行い、調査面積は約 16.5㎡である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。  
調査担当者：山口 正紀 (鎌倉市文化財課臨時的任用職員)  
調 査 員：須佐直子・須佐仁和 (鎌倉市文化財課臨時的任用職員)  
作 業 員：片山直文・佐野吉男・杉浦永章 (社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は須佐 (仁)・山口が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。  
整理参加者：山口・須佐 (仁)  
遺物洗浄・注記・接合・分類・実測・図版作成：山口  
遺構トレース・図版作成：山口 観察表・写真図版作成：山口 遺物写真撮影：須佐 (仁)  
原稿執筆：山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査にかかる出土遺物の注記は、「KM0817」と略して記した。
8. 本報の凡例は以下のとおりである。  
各図における基本縮尺は、以下のとおりである。同時に、各図に縮尺を表記している。  
挿図縮尺 全測図：1/60 遺構図：1/40 遺物図：1/ 3  
遺構図版 水糸高は標高値を示す。  
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。  
遺物観察表 ( ) は復元数値、[ ] は遺存数値を示す。
9. 本報中の「泥岩」は凝灰質泥岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。  
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院  
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)  
伊丹まどか、汐見一夫、原 廣志、福田 誠、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

# 目 次

## 本 文 目 次

第一章	遺跡の位置と環境 .....	375
	1. 遺跡の位置	
	2. 地理的・歴史的環境	
	3. 周辺遺跡の調査成果	
第二章	調査の概要 .....	381
	1. 調査の経緯と経過	
	2. 調査における測量	
	3. 堆積土層の観察	
第三章	検出遺構と出土遺物 .....	384
	1. 1面の遺構と遺物	
	2. 2面の遺構と遺物	
第四章	まとめ .....	393

## 挿 図 目 次

図1 調査地点周辺遺跡..... 375	図9 1面遺構外出土遺物..... 387
図2 調査区と建築範囲..... 381	図10 2面全測図 .....
図3 国土座標位置図..... 382	図11 2面方竪1 .....
図4 国土座標とグリッド配置図..... 383	図12 2面方竪2 .....
図5 調査区壁土層堆積図..... 384	図13 2面方竪1・2出土遺物 .....
図6 1面全測図..... 385	図14 2面土坑 .....
図7 1面溝・土坑・柱穴..... 385	図15 2面各土坑出土遺物 .....
図8 1面各遺構出土遺物..... 386	図16 2面遺構外出土遺物 .....

## 表 目 次

表1 遺物観察表(1) .....	表3 層位別出土遺物一覧表.....
395	397
表2 遺物観察表(2) .....	
396	

## 図版目次

図版1	398	図版5	402
1. 1面全景(東から)		1. 調査区南壁土層堆積(北から)	
2. 1面全景(西から)		2. 調査区西壁土層堆積(東から)	
3. 1面溝1(南から)		図版6	403
図版2	399	出土遺物(1)	
1. 2面全景(東から)		図版7	404
2. 2面全景(西から)		出土遺物(2)	
図版3	400	図版8	405
1. 方竪1(西から)		出土遺物(3)	
2. 方竪1南北ベルト土層堆積(西から)		図版9	406
3. 方竪2(南から)		出土遺物(4)	
図版4	401		
1. 土坑3・4・6・7(北から)			
2. 土坑3・6土層堆積(南から)			
3. 土坑4土層堆積(南から)			
4. 土坑7出土瀬戸水滴(北から)			

# 第一章 遺跡の位置と環境

## 1. 遺跡の位置

神奈川県遺跡台帳に登録される米町遺跡 (No.245) は、名越地区から長谷地区を横断する県道鎌倉葉山線と若宮大路が交差する下馬四つ角の東側、現在の鎌倉市大町二丁目に所在する (図1)。米町遺跡周辺には北東に名越ヶ谷遺跡 (No.231)、西には下馬周辺遺跡 (No.200)、南に材木座町屋遺跡 (No.261) などがあり、比較的大きな範囲の遺跡に接している。当遺跡は県道鎌倉葉山線から南、J R横須賀線線路から北側、東西700 m、南北200 mと細長く、名越ヶ谷から南下する逆川が西方向に流路を変え、再び南下する手前までを含める微地形を範囲とされている。調査地点はその北西隅、大町二丁目993番1外に所在する。

## 2. 地理的・歴史的環境

遺跡範囲の北限とする県道鎌倉・葉山線は、源頼朝入府以前には稲村ヶ崎から三浦半島に入る古東海道筋の一つで、鎌倉時代には商工業の中心地、「大町」であったことに由来し、大町大路ないしは町大路といわれた鎌倉の東西を結ぶ主要な交通路であったと想定されている。

遺跡内を東から西に向かって流れる逆川は、名越ヶ谷内の黄金やぐら付近を源流とし、谷戸内を流れてきた河川は横須賀線線路の北約50 m辺りでほぼ直角に折れ曲がり、西方向に流路を変える不自然な



図1 調査地点周辺遺跡

流れをもつ。折れ曲がった先は、やや北西方向に下り、逆川橋辺りを境に70 m程北上し、遺跡範囲西端まで緩やかに南下していくが、これが自然的ないしは人為的によるものかは今後の遺跡地内の多くの発掘成果が必要になるであろう。

現在の町名である「大町」は、『吾妻鏡』建暦三(1213)年五月二日条に「中下馬橋給、又於米町辻大町大路等之所處合戦、」と和田合戦の記録にみられるのが名称の初見であり、この頃から大町の名称が成り立っていた。そのほか、承久二(1220)年二月十六日条に「大町以南焼亡」、十日後の二十六日条にも「大町上失火」と火災の記事の記録もある。『新編相模国風土記稿』では「鎌倉繁栄の頃は、此辺悉買区」と商業地域の一つであったとしており、小町大路の夷堂橋を境として、以北を小町、以南を大町と称したという。また、大町という呼称は、小町より町の規模が大ききという由来で大町と呼ばれたとされる。

遺跡名に使用されている「米町」については、『吾妻鏡』仁治二(1241)年十二月二十七日条に、「通若宮大路東頼米町前、向由比浦方義秀者、」とあり、朝夷奈三郎義秀が米町前を通り、海岸のほうに向かったとする記述がある。さらに明応年間(1492～1501)に成立したとされる「善宝寺寺地図」(津久井光明寺蔵)には遺跡よりやや西寄りの若宮大路と大町大路が交わる東北の家並に「米町」の注が描かれている。また、『吾妻鏡』建長三(1251)年十二月三日条の「奉行之〈云云〉鎌倉中小町屋之事、被定置處々△大町△△小町△△米町△△龜谷辻△和賀江△大倉辻△乗飛和坂山上」と文永二(1265)年三月五日条「△町御免所之事、一所、大町△一所、小町△一所、魚町△△一所、穀町一所、武藏大路下一所、須地賀江橋△一所、大倉辻」とあり、鎌倉時代に商業地区として指定する二度の法令の中に含まれている。後者の「穀町」という名称は『鎌倉事典』(東京堂出版1991)などでは、「米町」と同名の見解を示している。このように大町・米町共に範囲や位置の特定は明らかではないが、鎌倉時代から商業地域として成立していることがわかる。

遺跡内及び周辺にはいくつかの社寺・仏閣がみられる。遺跡地中央部北側には正和二(1313)年建立と伝えられる日蓮宗上行寺がある。山号は法久山、開山は日範上人で、本堂は明治19(1886)年、名越松葉ヶ谷にある妙法寺の法草堂を移築したものといわれる。県道を挟んだ上行寺の向かいには稻荷山別願寺がある。開山、覚阿上人により弘安五(1282)年に創建され、もとは真言宗能成寺から時宗に帰依し、寺号を変えた寺である。寺域内には鎌倉市指定有形文化財になっている足利持氏の廟所とされる「永享11(1439)年」の刻銘をもつ石塔がある。別願時東には開基願行房憲静、開山北条政子とする浄土宗安養院がある。源頼朝の菩提を弔うため、長谷笹目ヶ谷にある長楽寺を嘉禄元(1225)年に創建した。長楽寺は律宗、山号を祇園山と号し、開基は願行である。元弘元(1333)年、新田義貞らの鎌倉攻めの際に焼失し、現在の安養院の地にあった善導寺に統合され、北条政子の法号と合わせて安養院長楽寺と号された。また、調査地点から南200 mほどの位置には、源頼義が康平6(1063)年に京都の石清水八幡宮を勧請した、由比若宮(元八幡)がある。

### 3. 周辺遺跡の調査成果

これまでの米町遺跡(No.245)内における発掘調査において、本調査地点は15地点目になる。逆川橋周辺での調査が集中しており、11地点では12世紀末～15世紀前半の4期に亘る遺構群が検出され、13世紀中頃には部屋割りがみられる板壁建物群が検出されている。2・3期には木組み側溝をもつ東西方向の道路遺構が確認され、北西に位置する7地点でも同構造の道路面が検出されている。6地点では13世紀前半～14世紀中頃の方形竪穴建物や大型井戸など多数の遺構が検出されており、中世期の土地区画とは異なる7世紀中～後半代の溝が5条確認されている。東部に位置する13地点では、6期の遺

構変遷が確認され、鎌倉時代初期～末期の5期に亘る東西溝が検出されている。13世紀第2四半期頃には橋脚とみられる大型角柱が残存しており、「車大路」の側溝である可能性を示唆している。また、8世紀後半ごろの相模型坏などを含む律令期の遺物も出土している。本調査地点南に隣接する14地点では、13世紀後半～14世紀初頭にかけての方形竪穴建物を中心とした遺構群が検出されている。

北東部に位置する名越ヶ谷遺跡(No.231)内、谷戸開口部の調査が集中しており、6地点では13世紀前半期に逆川旧流路の西側護岸施設が3回以上組み直しされている。また、9地点には6地点でみられた流路の延長が確認された。西隣に位置する8地点では掘立柱建物2棟と井戸、多数の柱穴が検出されていることから、逆川西側に立地する武家屋敷あるいは寺院の一角と推測されている。県道沿いの3地点では、大町大路と同軸の掘立柱建物とそれに沿うL字形の泥岩版築通路などを含む、13世紀初頭～15世紀代の5時期の生活面が検出されている。

西部に広がる下馬周辺遺跡(No.200)内の12地点では、14世紀中頃～15世紀前半の3時期に亘る遺構群が確認された。東西・南北の直交する地割溝や方形竪穴建物などが検出され、その遺構群の軸線方向が東側を南北に通る現在の道路とほぼ平行していることから、当時の地割に影響を与えていた可能性を示唆している。西方向の横須賀線線路西脇に位置する13地点では、13世紀中～末頃の鎌倉石切石を用いた方形竪穴建物や井戸、土坑が検出されている。14地点では、すぐ北の東西に走る大町大路に直交するであろう道路と木組み溝が13世紀第2四半期頃に検出されているが、土地利用としては不明瞭である。

本遺跡南西部に位置する広大な範囲をもつ材木座町屋遺跡(No.261)においては、本遺跡に近い場所として北部のみ概観しておく。7地点では8世紀頃の大型掘立柱建物と13世紀前半から始まる道路、溝、方形土坑などの中世遺構群が確認されている。2地点は土坑、井戸、溝などが確認され、13世紀前半～14世紀の年代が考えられている。5地点でも14世紀代を中心とする遺構が検出されており、両地点とも中世基盤層が海拔3.5m前後を測る。14地点では15世紀代のかかわりがまとまって廃棄された土坑が検出されており、15地点でも同時期のかかわりが出土している。15～17地点とも13世紀初め頃からの遺構群が確認されている。

#### <引用・参考文献>

- 鎌倉市史編集委員会 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館  
河野真知郎 1995『中世都市鎌倉一遺跡が語る武士の都一』講談社メチエ49  
白石永二編 1976『鎌倉事典』東京堂出版  
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂  
三浦勝男編 2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版社

#### <調査地点一覧>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は末尾に記す。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付してある。そのため図の範囲外にある地点番号がない場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

#### 下馬周辺遺跡(No.200)

11：2003年10月調査。森孝子 2006「下馬周辺遺跡(No.200)大町二丁目975番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報

告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

13: 2004年5月調査。福田誠 2008「下馬周辺遺跡(No.200) 材木座一丁目1002番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

14: 2005年2月調査。馬淵和雄・松原康子・根本志保 2011「下馬周辺遺跡(No.200) 大町二丁目1001番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

#### 小町大路東遺跡(No.233)

1: 1980年4月調査。未報告。原廣志 1980「清興建設本社ビル建設予定地の調査」『鎌倉考古No.2』鎌倉考古学研究所 一大町一丁目1181番地点

#### 名越ヶ谷遺跡(No.231)

2: 1993年5月調査。田代郁夫・大坪聖子 1995「1. 名越ヶ谷遺跡 大町四丁目1880番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

3: 1993年7月調査。菊川英政 1995「4. 名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

5: 1998年12月調査。汐見一夫ほか 2000「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町四丁目1888番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

6: 2000年8月調査。手塚直樹・野本賢二 2002「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町三丁目1826番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第2分冊)』

7: 2000年8月調査。宮田眞 諸星真澄 滝澤晶子 2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・宮田事務所 一大町三丁目2356番3地点

8: 2001年1月調査。宮田眞 2003「5. 名越ヶ谷遺跡 大町三丁目2356-11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

9: 2001年4月調査。福田誠 2003「9. 名越ヶ谷遺跡 大町三丁目2356番10地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

11: 2001年11月調査。宮田眞 2003「(医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ 建設に伴う発掘調査)」『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・有限会社博通 一大町四丁目1901他16筆地点

14: 2003年2月調査。滝沢昌子 2006「04. 名越ヶ谷遺跡 大町四丁目2395番2の一部外1筆」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

16: 2005年7月調査。未報告 一大町四丁目2406番1地点

17: 2006年1月調査。未報告 一大町三丁目1230番4外地点

18: 2006年5月調査。未報告 一大町四丁目1858番4地点

19: 2007年6月調査。山口正紀 2012「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町四丁目1880番の一部」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28 平成23年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

20: 2007年12月調査。未報告 一大町三丁目2353番2外地点

22: 2010年5月調査。未報告 一大町六丁目1708番23外地点

#### 米町遺跡(No.245)

1: 1988年3月調査。未報告 一大町二丁目929番

2: 1988年7月調査。福田誠 1989「1. 米町遺跡 大町二丁目2411番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

3: 1988年7月調査。原廣志・田代郁夫 1990「4. 米町遺跡 大町二丁目933番他」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

4: 1993年7月調査。馬淵和雄 1995「3. 米町遺跡(No.131) 大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

5: 1996年3月調査。田代郁夫・宗臺富貴子 1998「米町遺跡(No.245) 大町二丁目391番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会



- 急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6：1997年11月調査。宮田眞・滝沢晶子・諸星真澄 1999「米町遺跡発掘調査報告書 鎌倉市大町二丁目2338番1」  
米町遺跡発掘調査団・宮田事務所
- 7：1998年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2000「鎌倉遺跡調査会調査報告第20集 米町遺跡―第6地点、第7地点発掘調査報告書―」鎌倉市米町遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 一大町二丁目2312番4・10他地点
- 8：1999年4月調査。福田誠 2000「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2404番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 9：1999年9月調査。瀬田哲夫 2001「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2313番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 10：1999年12月調査。瀬田哲夫 2001「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2308番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 11：2001年1月調査。齋木秀雄・降矢順子 2005「米町遺跡発掘調査報告書―第10地点―」有限会社 鎌倉遺跡調査会 一大町二丁目2320番1地点
- 12：2001年8月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二 2004「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2324番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 13：2003年8月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二ほか 2008「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2235番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 14：2003年12月調査。森孝子・滝澤晶子 2006「米町遺跡(No.245) 大町二丁目992番7外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 15：本調査地点
- 16：2009年6月調査。未報告 一大町二丁目2311番5

#### 材木座町屋遺跡(No.261)

- 2：1990年1月調査。木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡(No.261) 鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 6：2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳 2001「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 13：2004年5月調査。齋木秀雄・瀬田哲夫 2008「材木座町屋遺跡発掘調査報告書―鎌倉市材木座三丁目62番19―」有限会社 鎌倉遺跡調査会
- 14：2004年6月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 15：2004年11月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 16：2004年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 17：2005年8月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目149番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 18：2004年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 19：2007年2月調査。未報告 一材木座二丁目208番1
- 20：2007年12月調査。未報告 一材木座三丁目164番外
- 21：2008年6月調査。未報告 一材木座一丁目919番19
- 23：2008年7月調査。未報告 一材木座一丁目893番9

#### 長勝寺遺跡(No.313)

- 1：1976年8月調査。大三輪龍彦・齋木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団 一材木座二丁目2162番2地点

### 能蔵寺跡 (No.314)

- 1 : 1971年11月調査。松尾宣方 1983「2. 来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市教育委員会  
一材木座二丁目303番地点
- 3 : 2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 5 : 2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6 : 2006年8月調査。未報告 一材木座二丁目293番2

### 安国論寺 (No.323)

- 1 : 1973年3月調査。松尾宣方 1983「45. 安国論寺境内 大町四丁目1947番」『鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I』鎌倉市教育委員会
- 2 : 2012年調査。未報告

遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称
87	鎌倉城	228	安国論寺やぐら	280	善導寺跡
145	妙法寺裏山やぐら群	232	妙本寺遺跡	302	別願寺裏やぐら

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経緯と経過

本発掘調査は、個人専用住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として鎌倉市教育委員会が実施した。建設計画では、地表下130cmまでの深基礎工事を行うものであり、平成20年6月10日、建設予定範囲内6㎡を対象として鎌倉市教育委員会による確認(試掘)調査が実施され、現地地表下65m以下より中世遺物を含む堆積層を確認した。

調査結果をもとに建築主との協議において本格的な発掘調査を行う必要があると判断され、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整に続き、平成20年10月22日から現地での発掘調査を開始した。敷地面積約102㎡のうち、北半分が発掘調査対象であり、南半分を掘削残土の集積場として利用し、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲の中央部分16.5㎡を調査区に設定した(図2)。

確認調査結果をもとに、10月22日に重機による表土掘削を行い、中世遺構面を確認したのち、人力による作業で調査を進行した。その結果、地表から深さ120mまでの間に2時期の中世遺構面を確認し、方形竪穴建物・土坑・柱穴を検出後、測量・写真撮影などの記録保存を行った。掘削深度規制が地表下130cmまでの調査であったが、2面遺構検出時において、計画深度より深くなってしまうことから、各関係者の了承を得て、広範囲で深度を超える場合を除いて確認できる範囲の遺構は検出した。現地終了時には遺物天箱2箱分の遺物が出土した。

以下、作業経過を抜粋する。

10月22日(水) 現地調査開始。重機による表土掘削。

10月23日(木) 機材搬入。

10月28日(火) 調査区周囲に測量用のグリッドを設定。鎌倉市3級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量杭に移動。1面全景写真撮影。全測図実測。

11月4日(火) 2面全景・個別写真撮影。全測図実測。

11月6日(木) 調査区南・西壁写真撮影および土層堆積図実測。

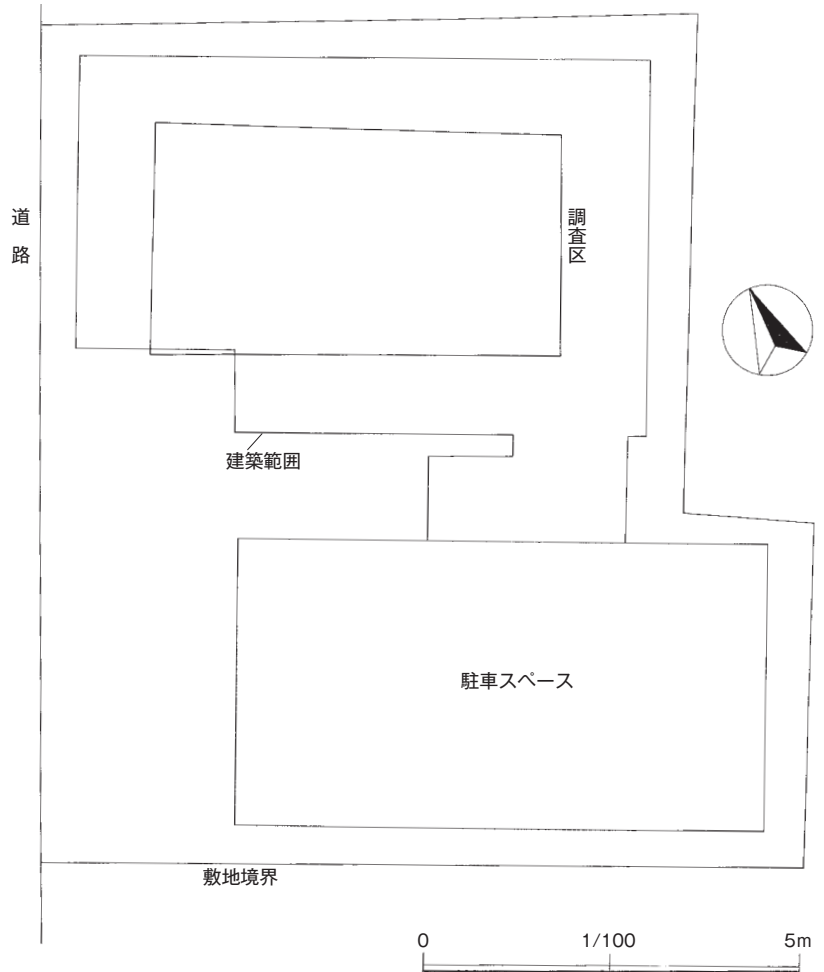


図2 調査区と建築範囲

11月10日(月) 現地調査終了。機材撤収。

## 2. 調査における測量

現地調査の測量は便宜上、調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設けたため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量軸の設定には先行して調査区中央を東西に分断するよう B-1 杭と任意点 A 点を予め設定し、図 3 に示したように、調査地北側の小道上と県道鎌倉葉山線との T 字路角に設置してある鎌倉市 4 級基準点 U087 と U088 を用いて、調査測量基準点にあたる B-1 杭と A 点に国土座標上の数値を移動した。測量軸は 2 m 方眼による軸線を用い、南北軸線には北からアルファベット A~C、東西軸線には西から算用数字の 1~4 を付してグリッド設定を行った。調査地南北軸線は真北から  $N-23^{\circ}14'05''-E$  の傾きを測る。

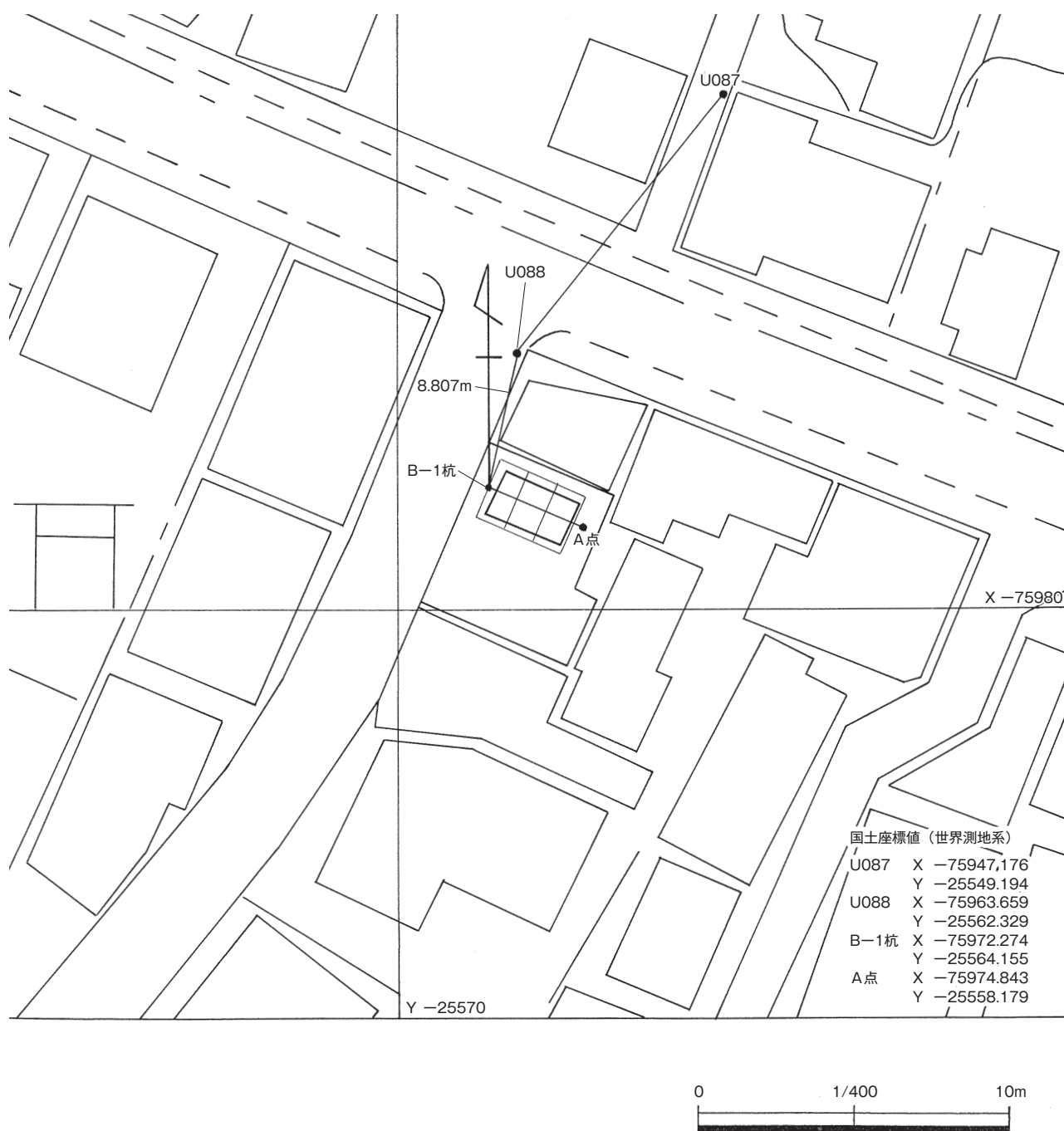


図3 国土座標位置図

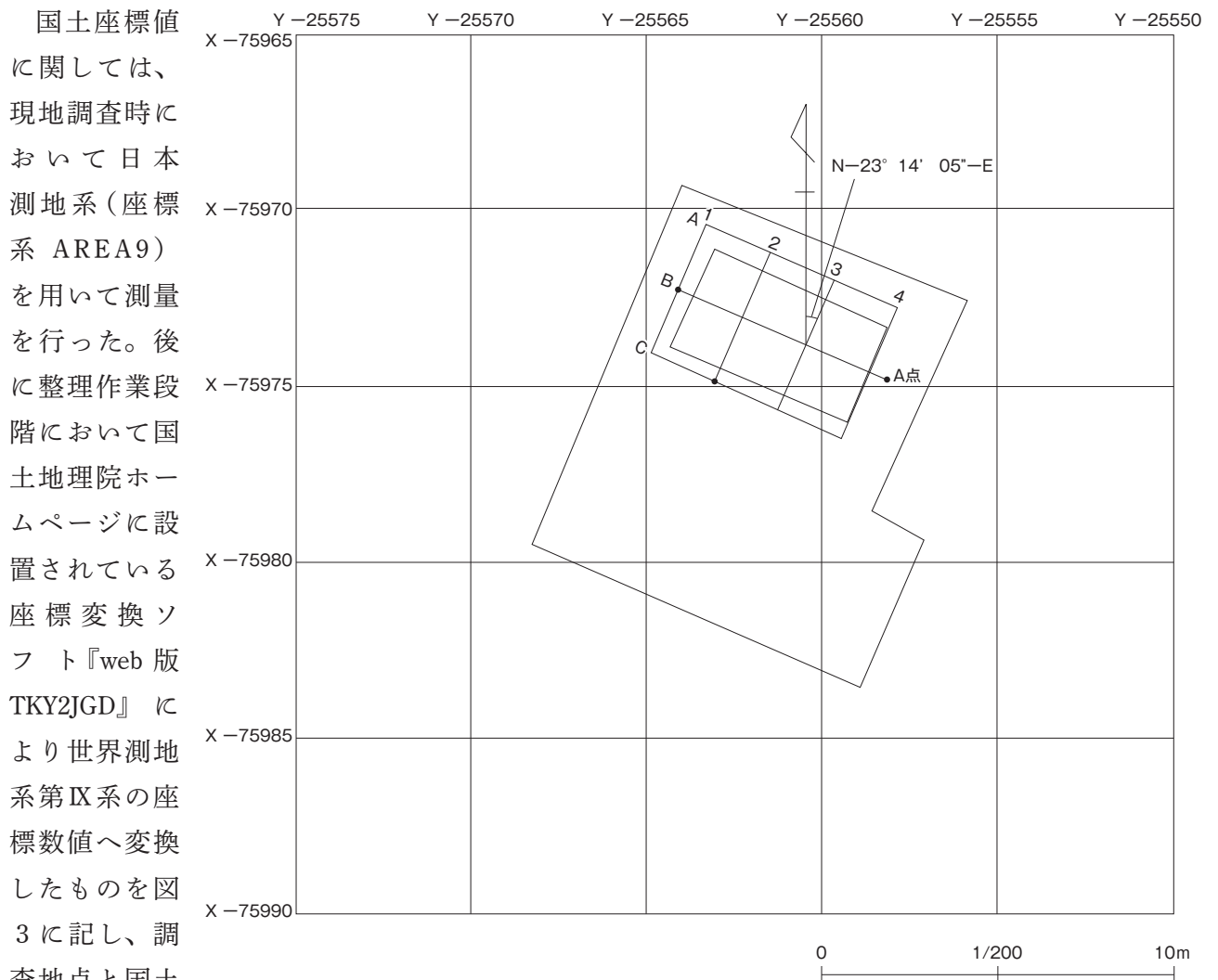


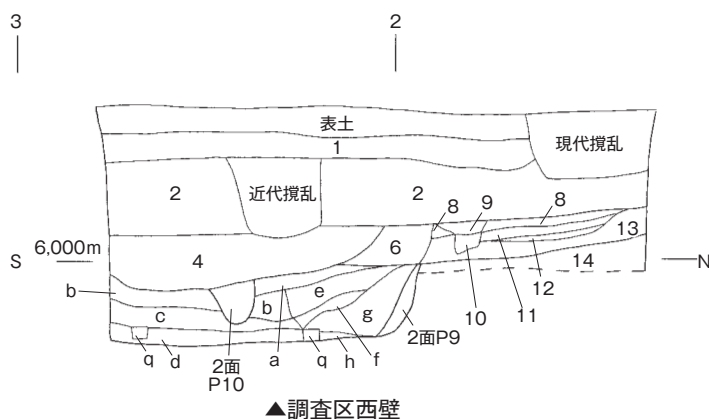
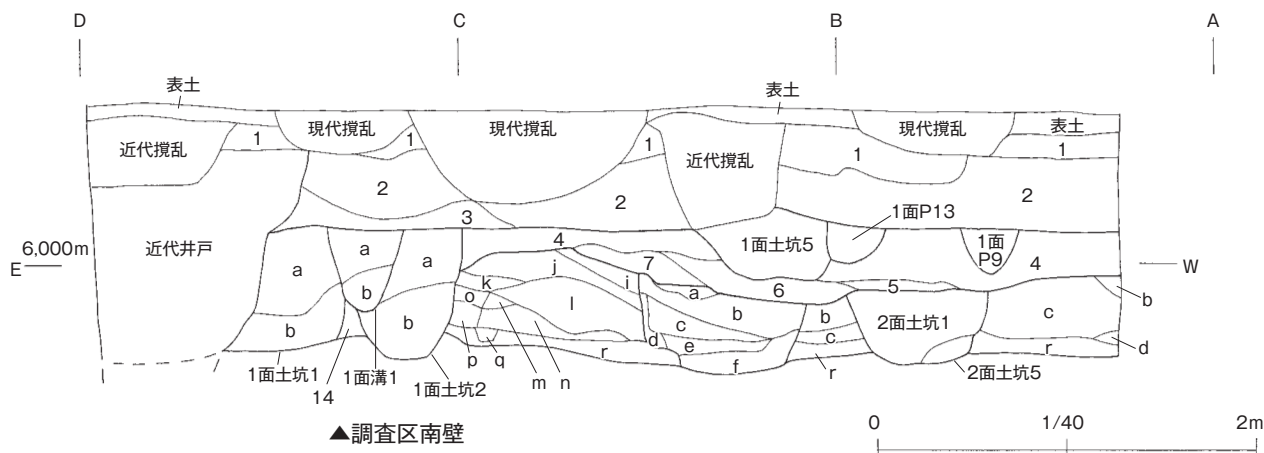
図4 国土座標とグリッド配置図

標高値は、調査地点より南に130mほどの位置にある鎌倉市三級基準点No.53231（標高4.47m）を基に移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図（2004年発行）を使用している。

### 3. 堆積土層の観察

土層の観察は調査区南壁と西壁を中心に行った（図5）。調査区内で観られた堆積層は主に遺構の覆土が大半を占めていた。現地表は標高6.8mを測り、近・現代の客土層が10cmほど薄く堆積していた。標高6.7mから近代瓦や明治期の染付碗を含む1層が平坦に拡がり、建物の基礎やゴミ捨て坑、井戸などの掘り込みを多数検出した。2層と3層は暗褐色弱粘質土の中世遺物包含層である。4層は地表下60cm、標高6.2mの位置に堆積する黄褐色砂を多く混じる暗褐色砂質土、厚さ10～30cmで東から西に向かい厚く堆積している。西側には茶褐色砂質土の5層が一部堆積しており、調査区南西部に堆積していた。ほかに6・7層が薄く4層直下であり、いずれも1面を構成する堆積層になっている。

2面の遺構の掘り込みは14層とした縄文海進海退期に形成された砂層で中世基盤層にあたる灰白色砂層から確認した。調査区南部は遺構により削平され、残存しているところで標高6.1～5.9mを測り、北から南に向かって緩やかに傾斜している。途中、部分的にだが8・11～13層の堆積を確認したが、遺構の掘り込み等は確認できなかったため、ここでは2面から1面に至るまでの堆積層と考えている。



土層記

1. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量、締まりあり、粘性ややあり
2. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多量、炭化物多く、かわらけ粒中量、締まり・粘性ややあり
3. 暗褐色砂質土：泥岩粒・炭化物多量、かわらけ粒少量、黄褐色砂多く含む、締まりなし
4. 褐色砂質土：炭化物少量、締まりなし
5. 茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒微量、締まりややあり
6. 暗褐色砂質土：炭化物少量、締まり若干あり
7. 茶褐色砂質土：褐色砂ブロック多く含む、締まりややあり
8. 黄褐色砂質土：炭化物少量、貝砂多量、締まりあり—土台材の痕跡か
9. 明黄褐色砂質土：貝砂多量、炭化物微量、締まりややあり
10. 黄褐色砂質土：貝砂多量、締まりあり
11. 明黄褐色砂層：炭化物微量、締まりあり
12. 灰白色砂層：貝細粒多く、締まりあり
13. 黄褐色砂層：縄文海進海退期の海成砂層、中世基盤層
14. 白黄褐色砂層

遺構土層記

- 1面溝1
  - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物少量、かわらけ片粒微量、明茶褐色砂多く含む、締まりややあり
  - b. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物少量、締まりあり
- 1面土坑1
  - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多量、炭化物中量、貝片わずかに含む、やや締まる
  - b. 黄茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒わずかに含む、暗褐色土ブロック多量に混じる、締まり若干あり
- 1面土坑2
  - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物やや多く、かわらけ粒少量、締まりややあり
  - b. 黄茶褐色砂質土：炭化物多く、暗褐色土ブロック多量、締まり若干あり
- 1面土坑5
  - a. 暗褐色粘質土：泥岩（～5cm）炭化物多量、かわらけ粒中量、灰色粘土ブロック多く含む、締まりあり
- 1面P13
  - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、締まりなし
- 2面方壁1
  - a. 茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒微量、締まりややあり
  - b. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし
  - c. 明茶褐色砂質土：炭化物・貝片少量、締まりややあり
  - d. 明茶褐色砂質土：泥岩粒・炭化物少量、締まりややあり
  - e. 明茶褐色砂質土：泥岩粒少量、炭化物中量、かわらけ片粒微量、締まりややあり
  - f. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし、粘性ややあり
  - g. 茶褐色砂質土：土丹粒少量、炭化物多く、貝片・かわらけ粒微量、締まり若干あり
  - h. 暗茶褐色砂質土：炭化物・かわらけ粒・貝粒少量、締まりあり
  - i. 茶褐色砂質土：貝粒微量、黄褐色砂少量混じる、締まりややあり
  - j. 茶褐色砂質土：泥岩粒少量、炭化物多く、貝片・かわらけ粒微量、締まり若干あり
  - k. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし、粘性ややあり
  - l. 明茶褐色砂質土：炭化物少量、黄褐色砂ブロック多量、締まりあり
  - m. 茶褐色砂質土：暗褐色粘土ブロック多量、炭化物・貝粒微量、締まりあり
  - n. 灰褐色砂質土：暗褐色粘土ブロック少量、締まりややあり
  - o. 淡茶褐色砂質土：暗褐色砂ブロック少量、貝砂多く含む、締まりあり—裏込め土
  - p. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりややあり—裏込め土
  - q. 茶褐色砂質土：炭化物少量、締まりなし—土台材の痕跡
  - r. 明黄褐色砂質土：褐色粘質土ブロック少量、締まりあり
- 2面土坑1
  - a. 暗茶褐色粘質土：泥岩（～5cm）多く、炭化物・貝片中量、焼泥岩少量、締まりややあり
- 2面土坑5
  - a. 暗褐色粘質土：泥岩粒・かわらけ粒少量、暗褐色粘土ブロック多く混じる、締まりなし
  - b. 茶褐色砂質土：泥岩粒・かわらけ粒少量、暗褐色粘土ブロック多く混じる、締まりなし
  - c. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量、締まりややあり
  - d. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック少量混じる、締まり若干あり
  - e. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック微量、締まりなし
  - f. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック少量混じる、締まりあり
- 2面P9
  - a. 明茶褐色砂質土：炭化物少量、黄褐色砂多く含む、締まりややあり

図5 調査区壁土層堆積図

### 第三章 検出遺構と出土遺物

本調査では近～現代遺構は調査対象には含めず、中世期のみ確認した。2枚の遺構面を確認し、狭小な調査区内で方形竪穴建物（以下、「方竪」と略す）2軒、溝1条、土坑13基、柱穴23口を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関係するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で表3にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先した。そのほかの遺構については概略表として、各面の末尾に表示した。

# 1. 1面の遺構と遺物

近～現代の堆積土を除去して、地表下60cm、標高6.2mの位置で暗褐色砂質土が広がる1面を検出した(図6)。近世からの井戸や攪乱、確認調査坑により削平がみられるが、溝1条、土坑5基、柱穴14口を検出した。ほぼ平坦な生活面が広がっていたが、調査時の遺構検出標高は6.10～6.20mである。

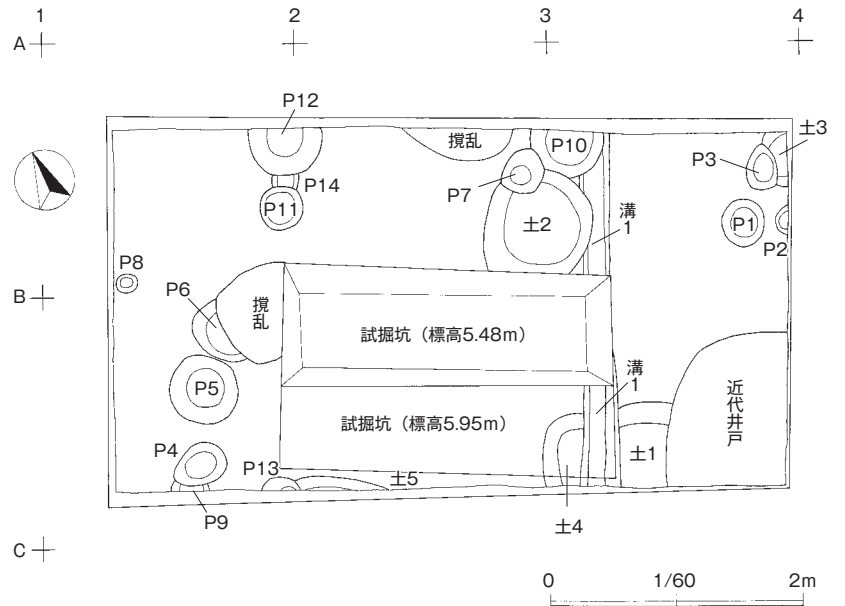


図6 1面全測図

## 溝1 (図7・8、図版1、表1)

調査区東部、3ラインに沿って検出された南北方向の溝で、調査区外に延びている。1面検出時には遺構範囲が不明瞭であったので2面検出途中で確認した。確認規模は南北290cm、上幅20～26cm、下幅12～16cm、深さ32～40cmである。掘り方はU字状を呈す。溝中央部分は確認調査坑により削平されていた。主軸方位はN-23°16'00"-Eを測る。北端底面の標高は5.82m、南端では5.75mを測る

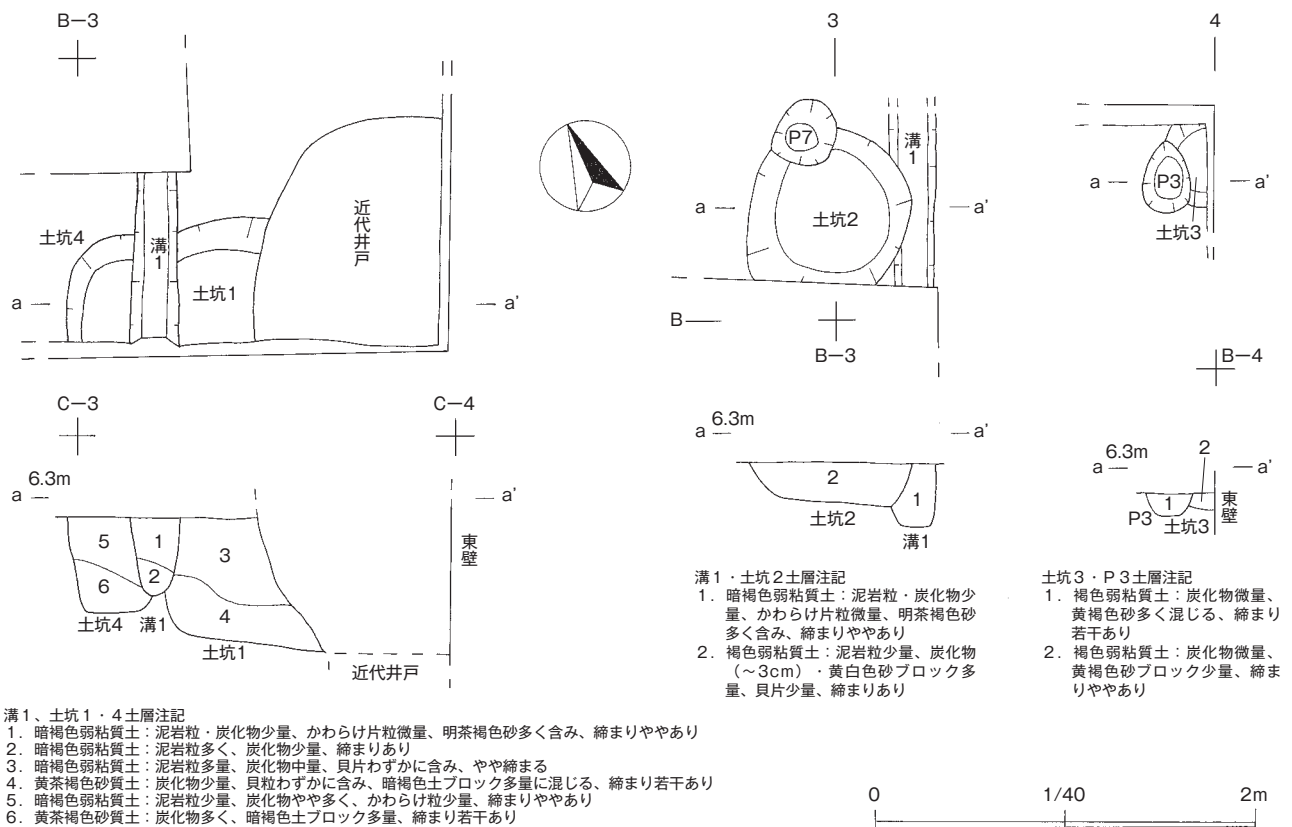


図7 1面溝・土坑・柱穴

### 溝1、土坑1・4土層注記

1. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物少量、かわらけ片粒微量、明茶褐色砂多く含み、締まりややあり
2. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物少量、締まりあり
3. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、貝片わずかに含み、やや締まる
4. 黄茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒わずかに含み、暗褐色土ブロック多量に混じる、締まり若干あり
5. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物やや多く、かわらけ粒少量、締まりややあり
6. 黄茶褐色砂質土：炭化物多く、暗褐色土ブロック多量、締まり若干あり

### 溝1・土坑2土層注記

1. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物少量、かわらけ片粒微量、明茶褐色砂多く含み、締まりややあり
2. 褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物(~3cm)・黄白色砂ブロック多量、貝片少量、締まりあり

### 土坑3・P3土層注記

1. 褐色弱粘質土：炭化物微量、黄褐色砂多く混じる、締まり若干あり
2. 褐色弱粘質土：炭化物微量、黄褐色砂ブロック少量、締まりややあり

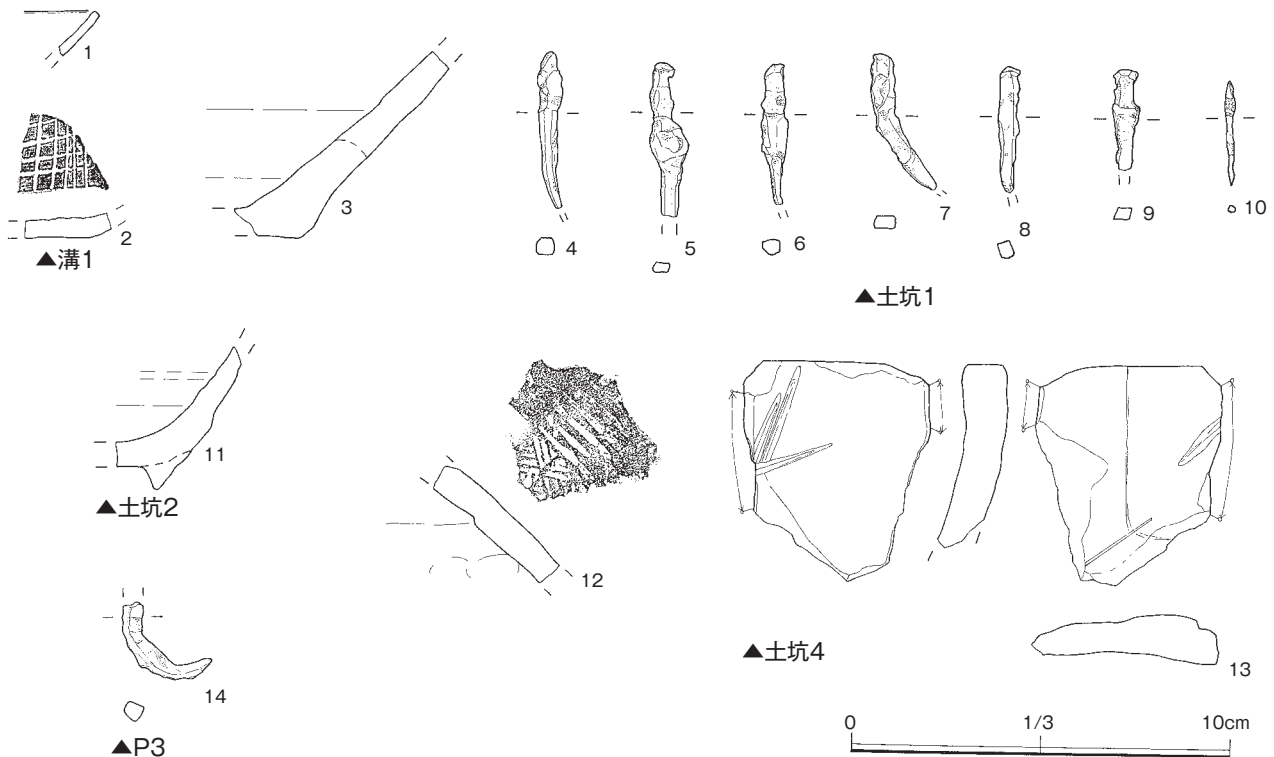


図8 1面各遺構出土遺物

ことから、南に向かって緩やかな傾斜が窺える。覆土は2層に分けられ、上層は明茶褐色砂を多く含む暗褐色弱粘質土、下層は土丹粒多く含む暗褐色弱粘質土の堆積がみられた。出土遺物(図8)は白磁口はげ皿(1)、瀬戸おろし皿(2)のみ図示可能であった。

#### 土坑1(図7・8、表1)

C-3~4グリッド中央北側に位置する。東側は近代井戸、西側は溝1、南側は調査区外に拡がり北側からの掘り方しか検出できなかった。確認できた範囲で、南北径66cm、深さ62~71cm、底面標高5.50mを測る。覆土は土丹粒多量、炭化物中量、貝片わずかに含む、やや締まりのある暗褐色弱粘質土と炭化物少量と貝片わずか含み、暗褐色土ブロック多量に混じる黄茶褐色砂質土の堆積状況と両層東側に向かい落ちていく様相がみられた。出土遺物は、かわらけ大皿、常滑窯甕、鳥骨、魚骨が出土しており、常滑片口鉢Ⅱ類底部片(3)、鉄釘(4~9)、針と思われる鉄製品(10)を図示した。

#### 土坑2(図7・8、表1)

B-2グリッド北側に位置する。北側一部をP7に削平され、本遺構が溝1を削平する重複関係にある。掘り方は不整円形、断面すり鉢状を呈し、東西径84cm、南北径82cm、深さ20cm、底面標高5.90mを測る。遺物は、常滑窯片口鉢Ⅰ類の底部片(11)を図示し、そのほかにかわらけ大小皿、常滑窯甕と壺が出土している。

#### 土坑4(図7・8、表1)

調査区南西部、C-3グリッド北側に位置する。南部は調査区外、東部は溝1に削平されている状況で確認した。確認できた範囲では、東西径32cm、南北径56cm、深さ51cm、底面標高5.70mを測る。覆土は2層あり、上層ではやや締まりのある暗褐色弱粘質土、下層には暗褐色土ブロックを多量に含む黄茶褐色砂質土が堆積しており、隣接する土坑1と同様の堆積状況をしており、同時期に埋められた可能性が高い。出土遺物は、かわらけ小皿、瀬戸窯鉢、常滑窯甕、鉄釘などが出土しているが、図示可能な遺物は、常滑窯甕の肩部片(12)と滑石鍋を転用した加工品(13)である。



P3 (図7・8、表1)

調査区北東隅、B-4グリッド北側で検出した。東隣の土坑3を削平する重複関係にある。標高6.17mで検出し、確認規模は、東西径15cm、南北径39cm、深さ12cm、底面標高6.05mを測る。覆土は、黄褐色砂が多く混じる褐色弱粘質土の堆積であった。出土遺物は、鉄釘(14)のみである。

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
土坑3	不明	6.18 m	22cm以上	44cm以上	6.07 m	P 3より古い
土坑5	不明	6.10 m	74cm以上	12cm以上	5.92 m	P 13より古い
P 1	楕円形	6.14 m	32cm	38cm	6.10 m	—
P 2	不明	6.20 m	11cm以上	22cm	6.07 m	—
P 4	不整円形	6.20 m	44cm	33cm	5.66 m	P 9より新しい
P 5	円形	6.10 m	54cm	56cm	5.85 m	—
P 6	不明	6.11 m	43cm以上	49cm以上	5.89 m	攪乱により削平
P 7	不整円形	6.11 m	32cm	35cm	5.75 m	土坑2・P 10より新しい
P 8	楕円形	6.12 m	17cm	16cm	6.02 m	—
P 9	不明	6.20 m	29cm	8 cm以上	5.94 m	—
P 10	円形?	6.17 m	58cm	39cm以上	5.86 m	溝1・P 7より古い
P 11	円形	6.14 m	33cm	34cm	5.90 m	P 14より新しい
P 12	不整円形	6.12 m	59cm	37cm以上	5.87 m	P 14より新しい
P 13	不明	6.20 m	30cm	11cm以上	6.00 m	土坑5より新しい
P 14	不明	6.14 m	20cm	10cm以上	5.83 m	P 11・P 12に削平

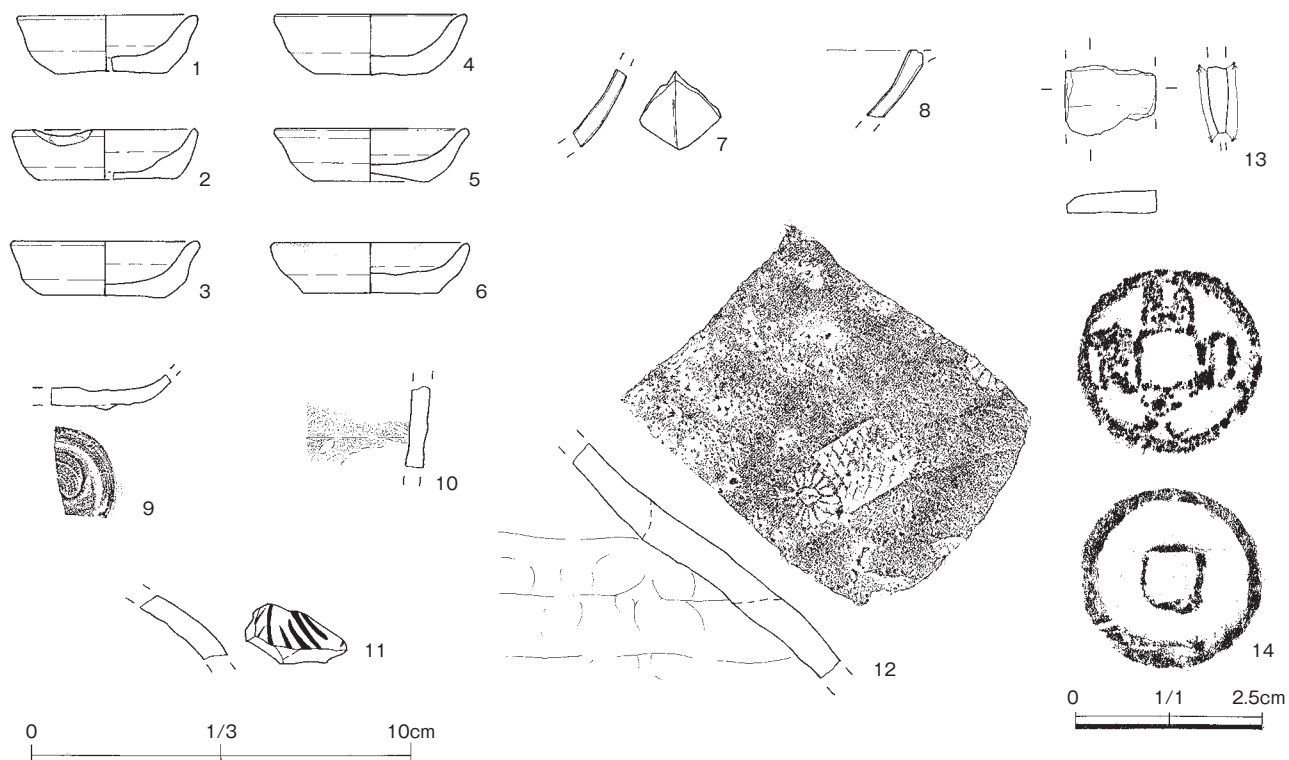


図9 1面遺構外出土遺物

### 1面遺構外出土遺物(図8、表1)

1面構成土上に堆積する中世遺物包含層(図5-2層)中から出土した総数88点中14点を図示した。かわらけ小皿(1~6)、青磁鎗蓮弁文碗(7)、青磁折縁皿(8)、瀬戸窯碗(9)・瓶子(10)・外面に葉文を陰刻してある瓶子の肩部片(11)、菊花文と縦・斜線文を組み合わせた常滑窯の甕(12)、上野産中砥(13)、開元通宝と思われる銅銭(14)が出土している。

### 2. 2面の遺構と遺物

1面構成土である4~13層を除去すると、地表下70~100cm、標高6.1~5.9mの位置に灰白色砂層である中世基盤層を検出した。当面で検出した遺構は、方竪2軒、土坑8基、柱穴9口である。検出標高は主に5.9m前後である。

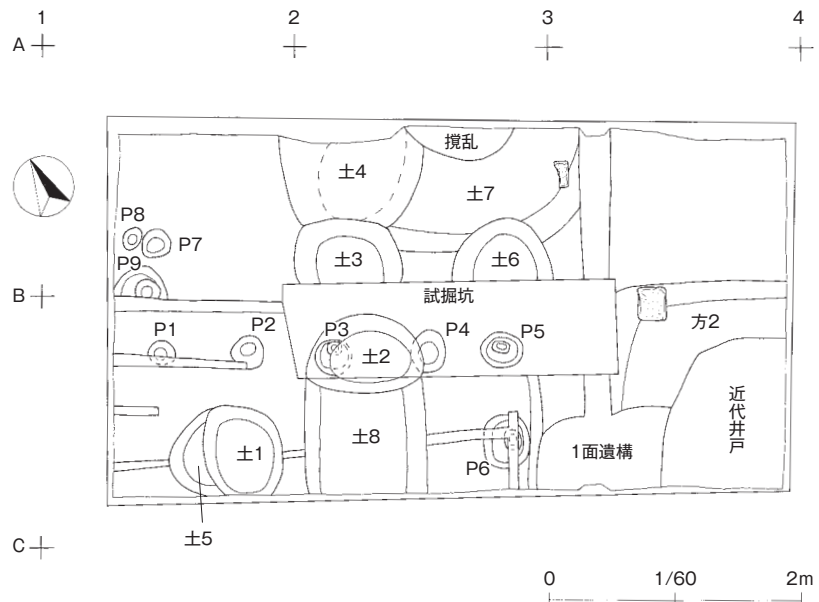


図10 2面全測図

### 方竪1(図10・11・13、表1・2)

調査区南西部、B・C-1~3に位置する。土坑や確認調査坑により底面まで所々削平されているが、様相としては判断できる状況である。当遺構は調査区西、及び南に拡がるため、全体規模は不明瞭、掘り方底面外周部に等間隔で柱穴が並ぶ掘立式の建物構造である。確認できた掘り方平面規模は、東西340cm以上、南北147cm以上、検出標高からの深さ52cm、底面標高は5.55m前後を測り、床面までの深さは40cmである。主軸方位はN-113°50'-Eを測る。建物内の堆積土層の様相は図5・11を参照していただきたい。

当遺構に付属する柱穴列は、東西3間×南北1間、計6口を確認し、西側からP1と順番に付した。いずれも掘り方底面から掘られている。それぞれの柱穴の芯々距離は、P1~5の東西列を西から66cm、69cm、75cm、58cm、P5とP6の南北列が75cmを測る。各柱穴の断面(図11)をみると、木材の痕跡である暗褐色砂質土(1層)と裏込め土の明黄褐色砂質土(3層)が同時に堆積している。また、P3・4・6は平面形が二段掘りになっており、断面形状では掘り方より柱痕部の方が深い様相を呈す

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高
P 1	円形	5.52 m	20cm	18cm	5.16 m
P 2	円形	5.55 m	26cm	26cm	5.09 m
P 3	円形	5.42 m	30cm	28cm	5.07 m
P 4	楕円形	5.43 m	26cm	32cm	5.12 m
P 5	楕円形	5.42 m	32cm	28cm	5.10 m
P 6	不整円形	5.56 m	36cm	42cm	5.12 m

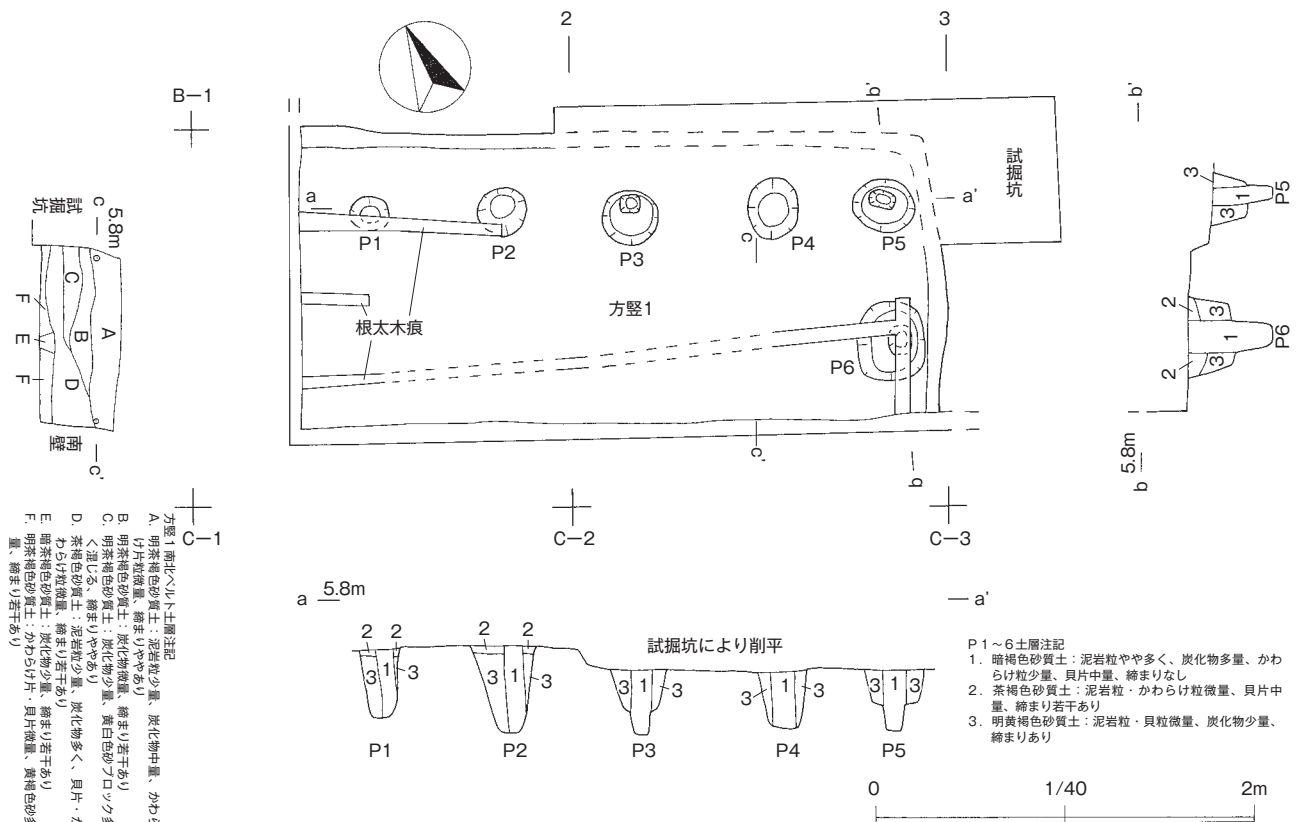


図11 2面方竪1

ことから、柱を打ち込んでいた可能性がある。

出土遺物は、かわらけ小皿(1・2)、青磁劃花文皿(3)・劃花文碗(4)・輪花皿(5)、瀬戸窯おろし皿(6)、尾張型山茶碗(7)、常滑窯甕(8・9)・片口鉢Ⅱ類(10・11)、常滑窯製品を二次利用した摩耗陶片(12)、備前窯播鉢(13)、釘状の鉄製品(14)、鉄釘(15~18)、火打金(19)が覆土中から出土している。裏込め土中から、かわらけ小皿(20)、瀬戸窯花瓶(21)、外面に斜線文の押印がある常滑窯甕(22)、床下から土師器甕(23)と鉄釘(24)が出土しており、調査区内では当遺構からの出土総数が最多である。

方竪2(図12・13、表2)

調査区南東部、B・C-3・4グリッド範囲で検出した。確認範囲内では確認調査坑・近代井戸と1面遺構により削平されている状況で、遺構の大半は調査区南東に広がる模様である。検出範囲が狭小だが、ここでは方竪として捉えた。検出標高は6.00m前後である。確認できた規模は、東西134cm、南北推定164cm、検出標高からの深さ36cm、底面標高5.64mを測る。方竪1と同軸上にあり、新旧関係では当遺構が古い、覆土の状況は2つの層がほぼ水平堆積しており、方竪

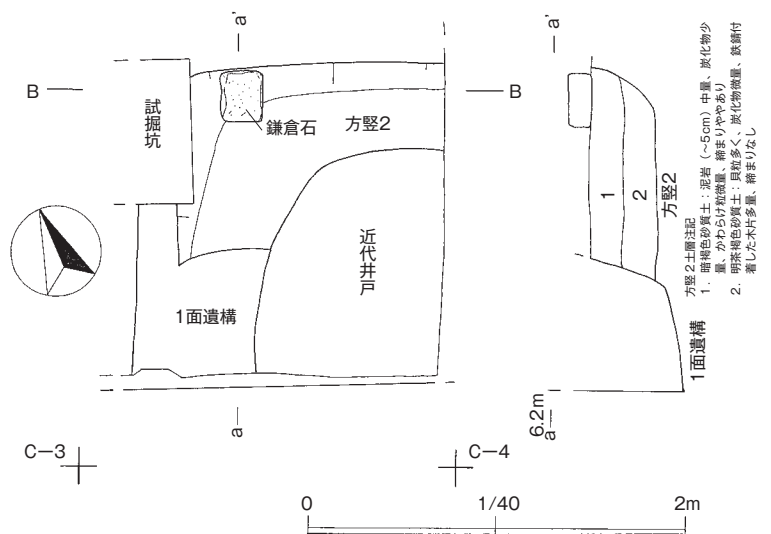


図12 2面方竪2

1に付属する張り出しの可能性とも考えられる。

北西隅に鎌倉石の切石(22cm×27cm、厚さ12cm)を検出したが、廃棄されたあとのものであり、おそらく当遺構とは関係ないと思われる。上面の標高は6.17mである。

鉄釘(25・26)と元祐通寶(27)を図示し、そのほかにかわらけ、青磁碗、瀬戸窯入子、常滑窯甕、片口鉢などが出土しているが、いずれも小破片で図示し得ることができなかった。

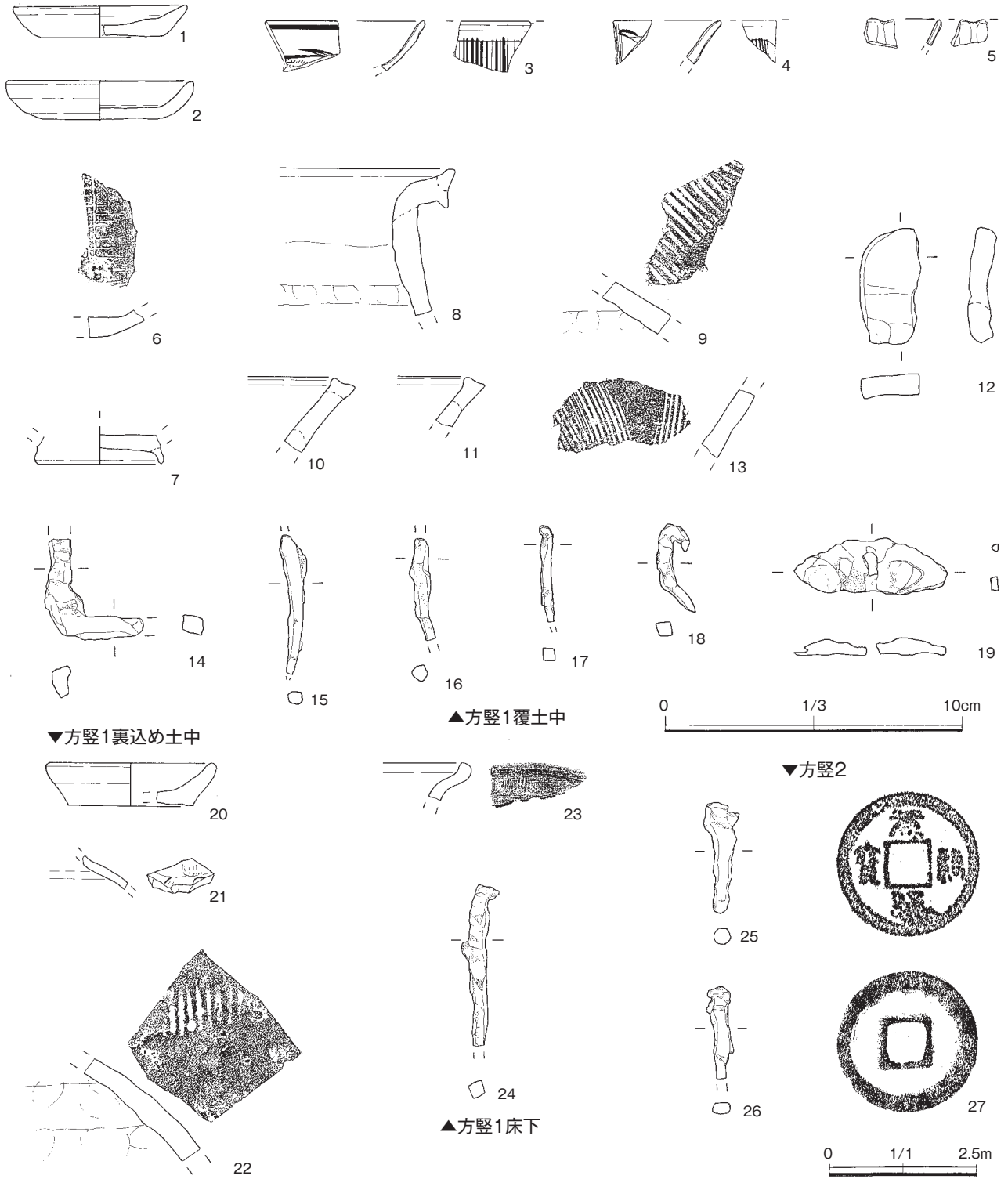


図13 2面方豎1・2出土遺物

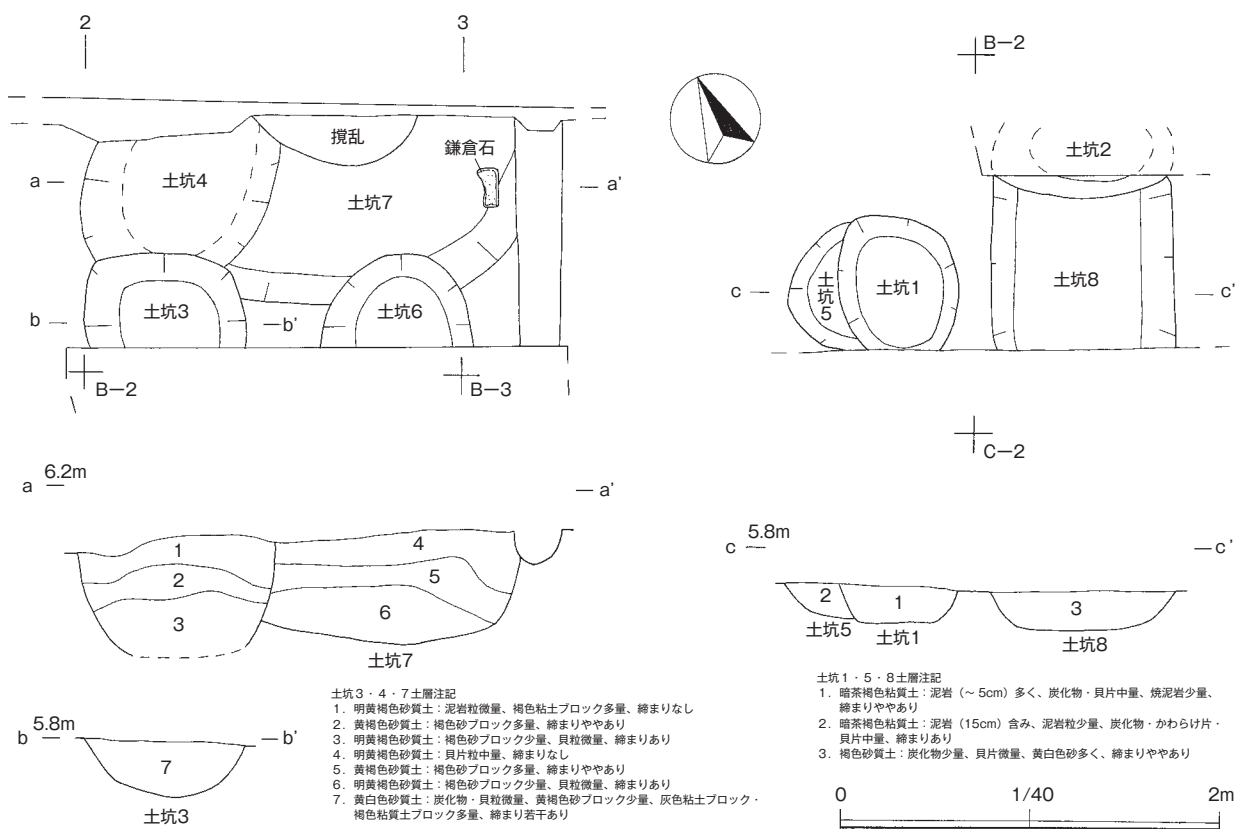


図14 2面土坑

### 土坑1 (図14・15、表2)

調査区南西部、C-2グリッドの北西に位置する。土坑5と重複関係にあり、当遺構が新しい。南側一部は調査区外のため確認できなかった。掘り方平面形状は不整形、その規模は、東西径63cm、南北径71cm、検出標高からの深さ19cm、底面標高5.42mである。方竪1を削平した状況であったが、検出標高は方竪1の床面で確認したため5.61mを測る。調査区南壁に堆積状況が一部残っており、土層から深さ40cmは確認できる。

出土遺物は、かわらけ大小皿、常滑窯甕・壺、砥石（仕上げ砥）、鉄釘が出土しているが、摘み状の突起をもつ鉄製品(1)のみ図示した。

### 土坑3 (図14・15、表2)

調査区中央部、B-2グリッドの北東に位置する。南側は確認調査坑で削平されている。掘り方平面形状は隅丸方形になると思われ、確認できた規模は、東西径86cm、南北径50cm、検出標高5.81mからの深さは31cm、底面標高5.50mを測る。

遺物は、常滑窯壺(2)と片口鉢Ⅱ類が出土している。

### 土坑4 (図14・15、表2)

調査区中央北側、土坑3に削平される状況で検出した。底面は掘削深度に達したため、未完掘のまま全体を把握するには至っていない。北側は調査区外に拡がり、掘り方平面形状は不整形、東西径100cm、南北径80cm以上、最大深度65cm以上を測る。検出標高は5.83m、底面標高は5.32mである。

遺物は、瀬戸窯鉢、常滑窯甕が出土しているが、鉄釘(3)のみ図示した。

### 土坑7 (図14・15、表2)

調査区中央部、B-3グリッドの北側に位置する。大半が調査区外にあり、周辺の遺構による削平が

調査区中央部、B-3グリッドの北側に位置する。大半が調査区外にあり、周辺の遺構による削平が著しい。全体規模は不明で、確認範囲では東西径154cm、南北径99cm、深さ60cmを測る。

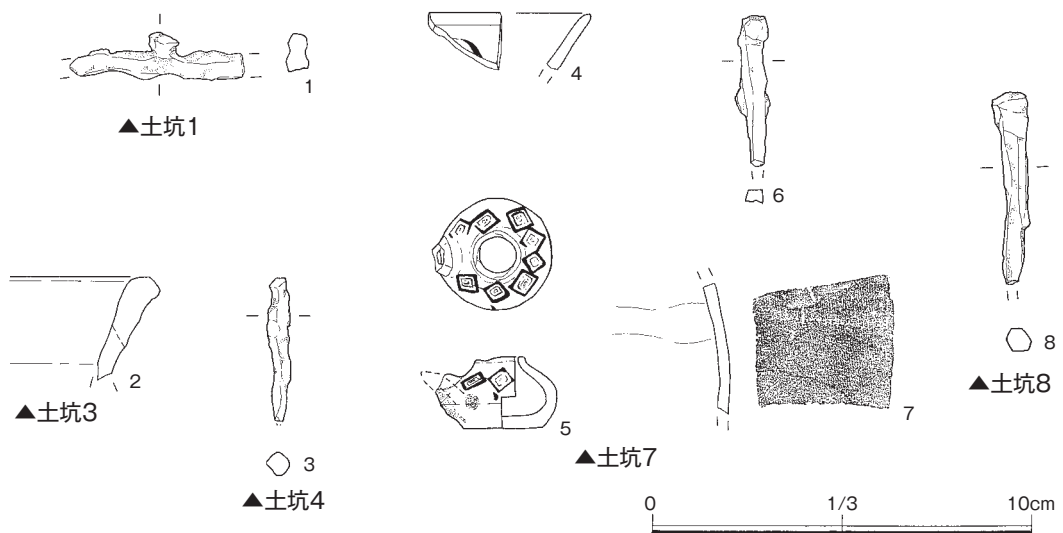


図15 2面各土坑出土遺物

検出標高は5.80 m、底面標高は5.40 mである。覆土の堆積が、西隣の土坑4と類似するため、同時期に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、かわらけ小皿、青磁劃花文碗(4)、瀬戸窯水滴(5)、常滑窯甕、渥美窯甕、瓦質火鉢、鉄釘(6)、土師器甕(7)が出土している。

#### 土坑8 (図14・15、表2)

調査区中央部、C-2グリッドの北東に位置する。土坑2に北側を削平される新旧関係にある。南側は調査区外のため確認できなかった。掘り方平面形状は不明、東西径56cm、南北径93cm以上、検出標高からの深さ14cm、底面標高5.42 mである。方竪1を削平してあり、土坑1と同じく、検出標高は方竪1の床面で確認したため5.58 mである。調査区南壁に堆積状況が一部残っているため、その状況からみると、深さ46cmを測る。

出土遺物は少なく、かわらけ大皿と鉄釘(8)のみであった。

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
土坑2	楕円形	5.43 m	93cm	64cm	5.37 m	土坑8より新しい 試掘坑により上部削平
土坑5	不明	5.60 m	42cm以上	69cm以上	5.43 m	土坑1より古い
土坑6	不明	5.76 m	81cm	49cm以上	5.45 m	試掘坑により南側削平
P 7	楕円形	5.92 m	22cm	21cm	5.80 m	—
P 8	楕円形	5.92 m	15cm	18cm	5.82 m	—
P 9	不明	5.92 m	43cm	40cm	5.12 m	方竪1より古い

## 2面遺構外出土遺物(図16、表2)

2面検出までの掘削において1面を構成する4層を中心とした層位から出土した遺物を一括して「2面遺構外」とした。総数44点中、5点を図示した。

青磁碗(1)、凸部格子叩き目を施す平瓦(2)、鉄釘(3・4)、頭部大きく丸い鉄釘に類似した鉄製品(5)を図示した。

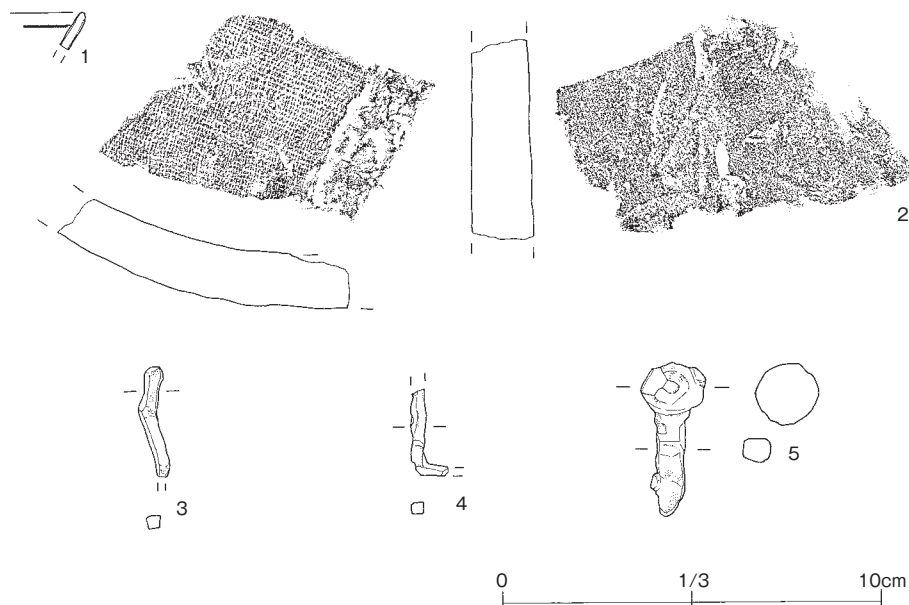


図16 2面遺構外出土遺物

## 第四章 まとめ

本調査地点は若宮大路下馬四つ角から県道鎌倉葉山線沿いに東へ250mほど、大町二丁目933番1外に位置する。調査地点の標高は6.8m前後を測り、近現代層や中世遺物包含層の堆積を除去した標高6.2mを測る位置に中世1面を検出した。以下、遺構年代を含め、調査成果から若干の考察をする。

2面では方形竪穴建物2基、土坑8基、柱穴3口を検出した。調査区南部で検出した方竪1は土坑により削平されている。北側の土坑群との関係は中央部の試掘坑で方竪1との新旧関係は不明であり、上層遺構の削平や狭小な調査面積から全体を把握するのは難しいが、当遺跡が開始される時期には方竪1や柱穴が造られていた様相である。おそらく、方竪が廃棄されてから1面の時期に移行する間に土坑群が掘られたのであろう。方竪1の主軸方向はN-113°50'-Eを測り、調査地西際に面している現在の道路はN-22°20'-Eの傾きである。ほぼ直角関係にあり、現在の道路軸が鎌倉時代には存在していた可能性が考えられる。また、南に隣接する大町二丁目992番7外地点(図1-14)では、標高5.5~5.7mの位置に黄褐色細砂層の中世基盤層(13世紀後半~14世紀初頭)が検出されている。本地点との標高差は20cmほどの高低差があるが、現在の地表面と同じく、南に向かい緩やかに傾斜していく地形となっているのであろう。方竪1の建物構造は、底面四周に土台材を使用しない、柱穴建ち構造をもつ。これまでの鎌倉市内の発掘調査成果から多数の方竪が検出されており、柱穴建ち構造をもつ方竪は存続年代が13世紀後半とされている(註1)。

方竪内からは小片ばかりの遺物が出土し、図示できなかったものが多い。きわめて年代を捉えることは困難であるが、青磁劃花文碗皿や常滑窯6a型式の甕などが出土していることから、概ね13世紀中頃~後半といった年代観であろう。土坑からの出土遺物はわずかであるが、あまり時期差はないと思われる。方竪1の裏込め土中や土坑内から古代の土師器片の出土がみられるが、周辺遺跡の調査成果によると古代遺構が検出されていることから、覆土中に混じってしまった結果であると思われる、中世以前の遺構が調査区内にあったものではない。さらに、手捏ね成形のかわらけも少量ながら出土しており、当面

の遺構群は1面遺構群との年代を踏まえ、13世紀後半頃と考えたい。

1面は試掘坑や近代井戸といった攪乱による削平を受けていた中で、溝1条、土坑5基、柱穴13口を検出した。溝は南北に走り、その主軸方位はN-23°20'-Eを測る。これは先述した道路の軸方位と大差なく、平行している状況である。大町二丁目992番7外地点では近世以後の削平により、遺構の残存が乏しいのも含め、この延長は検出されていない。さらに、違った軸方向の溝が検出されていることや規模から当面の溝の性格については調査区周辺の狭い範囲内における地割溝と推測せざるを得ない。

出土遺物は2面よりも総数が少なく、詳細な年代比定は難しいところである。当面では手捏ねかわらけの出土が認められず、糸切かわらけだけになる。図示できたのは小皿だけであったが、大皿も破片数であるが30点近くが出土している。大小皿には外面体部に強い稜を持ち、口縁部はわずかに外傾する傾向が多く見られた。また、古瀬戸中期様式と思われる花瓶や青磁鎬蓮弁文碗が出土していることから1面は14世紀前半～中頃の年代と思われる。

本調査では、狭小な面積の中での調査であったため、詳細な遺跡の性格等を把握することは推測の域を出ない。しかしながら、周辺の調査成果と比べてみると、町屋或いは米町・大町といった商業地域とされるその部分的な遺構の検出状況に類似する。さらに、西際道路の軸線であるが、若宮大路の軸方向と似ている。県道を挟んだ北側一帯にも同じ軸方向をもつ小道が現在も存在する。平成22年に調査された大町一丁目1034番9地点では南北道路が検出されている。この道路はN-21°-Eの傾きがあると発表されており、本調査検出の遺構軸や道路軸とほぼ変わらない。しかし、大町四つ角以東にはこの軸方位が見られない。憶測の域を出ないが、このことから本地点を含んだ北側一帯には鎌倉時代から残る地割軸の範囲があるのではなかろうか。今後の周辺調査を期待したい。

## 註

- 1) 鈴木弘太 2006「中世「竪穴建物」の検討—都市鎌倉を中心として—」『日本考古学』第21号 日本考古学協会

## 参考文献

- 押木弘己 2011「若宮大路周辺遺跡群の調査—大町一丁目1034番9地点—」『第21回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所
- 森孝子・滝澤晶子 2006「米町遺跡(No.245) 大町二丁目992番7外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会



表1 遺物観察表(1)

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

挿図 番号	出土面遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
8-1	1面 溝1	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[1.8]	a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考 b.白色 黒色粒 精良堅緻 d.灰灰色半透明 口唇部露胎 内外面粗い貫入
8-2	1面 溝1	瀬戸 おろし皿	底部小片	—	—	[1.95]	a.内底部格子状へラ描き 外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 良胎 c.灰色 e.良好 f.外面自然釉付着
8-3	1面 土坑1	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部1/6以下	—	—	[7.5]	a.輪積み 外底砂目痕 外面胴部下縦位のへラ削り b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 石英粒 小石 粗胎 c.暗褐色 e.良好 硬質 f.内面弱い磨滅
8-4	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[6.3]	幅0.3～0.9	厚0.7	a.四角形状に鍛造
8-5	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[6.2]	幅0.6～1.5	厚0.4	a.四角形状に鍛造
8-6	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.6]	幅0.4～1.0	厚0.6	a.四角形状に鍛造
8-7	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.5]	幅0.7～0.9	厚0.5	a.四角形状に鍛造
8-8	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.0]	幅0.5～0.8	厚0.7	a.四角形に鍛造
8-9	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[4.0]	幅0.5～1.1	厚0.5	a.四角形に鍛造
8-10	1面 土坑1	鉄針か	完形	長4.2	幅0.2～0.4	厚0.3	a.丸く鍛造
8-11	1面 土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	—	[5.8]	a.輪積み 貼付高台 b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや粗胎 c.灰白色 e.良好 f.内面全体に強い磨滅
8-12	1面 土坑4	常滑 甕	肩部小片	—	—	[4.6]	a.輪積み b.灰白色 砂粒 黒色粒 やや粗胎 c.明灰色 e.やや不良 f.外面幾何学文を押し
8-13	1面 土坑4	滑石鍋転用品	口縁部片	長8.8	幅7.4	厚1.5～1.7	c.桃灰色 f.内面やや強い磨滅 内外面削痕あり 両側面一部平坦に削り加工
8-14	1面 P3	鉄釘	頭部欠損	長[3.1～5.0]	幅0.3～0.8	厚0.7	a.四角形状に鍛造
9-1	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/2	7.1	4.5	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
9-2	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.2)	(5.4)	2.0	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色 e.良好 f.口縁部加工痕あり
9-3	1面遺構外	かわらけ	口縁部一部欠損	7.4	4.8	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
9-4	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.6)	4.4	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 雲母 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
9-5	1面遺構外	かわらけ	口縁1/4～底部1/3	(7.8)	(4.4)	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 やや粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
9-6	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部約1/2	(7.8)	(5.4)	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好 f.内外面口縁部煤付着、燈明皿
9-7	1面遺構外	龍泉窯系 青磁鎚蓮弁文碗	体部小片	—	—	[3.1]	b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内面粗い貫入 外面細かい貫入 e.良好 f.外面蓮弁文
9-8	1面遺構外	青磁 折縁皿	体部小片	—	—	[2.7]	b.明灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.暗灰緑色半透明 内外面粗い貫入 e.良好
9-9	1面遺構外	瀬戸 碗	底部片	—	—	[1.4]	a.外底糸切痕 貼付高台 b.灰白色 黒色粒 良胎 c.黄味灰白色 e.良好 f.内面やや強く磨滅
9-10	1面遺構外	瀬戸 花瓶	胴部小片	—	—	[3.3]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良胎 d.灰緑色不透明 外面施釉 内面釉ダレ多い e.良好
9-11	1面遺構外	瀬戸 花瓶	肩部小片	—	—	[2.3]	b.白黄色 砂粒 黒色粒 やや良胎 d.黄茶色半透明 内外面施釉 e.良好 軟質 f.外面葉文を陰刻
9-12	1面遺構外	常滑 甕	肩部片	—	—	[9.3]	a.輪積み b.淡橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.内面褐色 外面降灰部明灰緑色 e.良好 f.外面15(16?) 弁の菊花文に縦線文と斜線文を組み合わせた押し
9-13	1面遺構外	砥石(中砥)	上下部欠損	長[2.8]	幅3.6	厚0.3～0.9	c.黄白色 f.上野産 表裏面使用による擦痕 側端面整形加工による擦痕
9-14	1面遺構外	銅銭	完形	外縁径2.47	内縁径2.13	孔径0.63	f.状態悪く銭貨名不明 開元通宝か
13-1	2面 方竪1覆土中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.8)	(6.0)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-2	2面 方竪1覆土中	かわらけ	口縁～底部約1/2	(9.4)	5.8	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 赤色粒 海綿骨針 やや粉質 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-3	2面 方竪1覆土中	青磁 劃花文皿	口縁～体部片	—	—	[2.6]	b.灰色 黒色粒 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内外面薄く施釉 e.良好 f.内面口縁下二条線 内底部劃花文 外面体部櫛描文
13-4	2面 方竪1覆土中	青磁 劃花文碗	口縁部片	—	—	[2.2]	b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内外面薄く施釉 e.良好 f.内外面劃花文
13-5	2面 方竪1覆土中	青白磁 輪花皿	口縁部小片	—	—	[1.5]	a.口縁部輪花 b.白色 精良堅緻 d.明緑灰色半透明 e.良好 f.内外面蓮弁文
13-6	2面 方竪1覆土中	瀬戸 おろし皿	底部小片	—	—	[1.3]	a.内底格子状のへラ描き 外底糸切痕 b.淡灰色 砂粒 黒色粒 良胎 c.内面明灰緑色 外面灰黄色 e.良好 f.内面自然釉付着
13-7	2面 方竪1覆土中	山茶碗(尾張型)	底部1/2	—	6.3	[1.5]	a.外底糸切痕 貼付高台 b.灰色 砂粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.明灰色 e.良好 f.内底磨滅痕

表2 遺物観察表(2)

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

挿図 番号	出土面遺構	種 別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
13-8	2面 方竪1 覆土中	常滑 甗	口縁部片	緑帯幅2.0			a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石 粗胎 c.褐色 降灰部明灰 緑色 e.良好 f.中野編年6a型式(1250～1275)
13-9	2面 方竪1 覆土中	常滑 甗	肩部小片	—	—	[2.7]	a.輪積み b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c.灰褐色 e.良 好 f.外面幅広い縦線文を押印
13-10	2面 方竪1 覆土中	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[3.8]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.褐色 e.良好 f.内面弱い磨滅 図13-11と同一個体か
13-11	2面 方竪1 覆土中	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[2.5]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.褐色 e.良好 f.図13-10と同一個体か
13-12	2面 方竪1 覆土中	常滑 摩耗陶片	体部小片	長5.9 幅4.1 厚0.8～1.1			b.灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.内面暗灰色 外面褐色 e.良好 f.上端・側端・外面下部磨耗
13-13	2面 方竪1 覆土中	備前 播鉢	体部小片	—	—	[3.4]	a.内面9～12条の櫛描き b.淡橙色 砂粒 白色粒多い 黒色粒 小 石 粗胎 c.赤橙色 e.良好
13-14	2面 方竪1 覆土中	鉄釘か	頭・先端部欠損	長[5.2] 幅5.0 厚1.0～1.6			a.四角形に鍛造
13-15	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	頭・先端部欠損	長[7.2] 幅0.5～1.2 厚0.7			a.四角形状に鍛造
13-16	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	頭・先端部欠損	長[5.2] 幅0.5～0.8 厚0.8			a.四角状に鍛造
13-17	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	先端部欠損	長[4.9] 幅0.6 厚0.6			a.四角形に鍛造
13-18	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	完形	長4.5 幅0.5～0.7 厚0.7			a.四角形に鍛造
13-19	2面 方竪1 覆土中	火打金	完形	長2.8 幅7.8 厚0.2～0.9			a.中央に穿孔 全体薄く鍛造している模様
13-20	2面 方竪1 裏込め土中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.4)	(6.4)	2.2	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-21	2面 方竪1 裏込め土中	瀬戸 花瓶	胴部小片	—	—	[1.7]	a.灰釉ハケ塗り b.淡黄灰色 砂粒 良胎 d.灰緑色透明 外面施釉 内面自然釉付着 e.良好 f.外面不明文様を押印
13-22	2面 方竪1 裏込め土中	常滑 甗	肩部片	—	—	[5.6]	a.輪積み b.淡黄灰色 砂粒 黒色粒 小石 やや粗胎 c.内面淡灰色 外面降灰部灰緑色 e.良好 硬質 f.外面斜線文を押印
13-23	2面 方竪1 床下	土師器 甗	口縁部小片	—	—	[1.9]	a.外面口縁下に縦位のハケ b.赤橙色 砂粒 褐色粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-24	2面 方竪1 床下	鉄釘	先端部欠損	長[8.3] 幅0.8～1.0 厚0.7			a.四角形状に鍛造
13-25	2面 方竪2	鉄釘	完形	長5.7 幅0.6～1.7 厚0.8			a.多角形 先端部四角形状に鍛造
13-26	2面 方竪2	鉄釘	先端部欠損	長[4.8] 幅0.5～1.1 厚0.6			a.四角形状に鍛造
13-27	2面 方竪2	銅銭	完形	外縁径2.42 内縁径1.96 孔径0.7			f.元祐通寶 北宋 1086年 篆書
15-1	2面 土坑1	用途不明鉄製品	両側面欠損	長1.8 幅[7.0] 厚0.6～0.9			f.摘み状の突起あり
15-2	2面 土坑3	常滑 壺	口縁部片	—	—	[4.2]	a.輪積み b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.褐色 e.良好
15-3	2面 土坑4	鉄釘	先端部欠損	長[5.8] 幅0.5～0.9 厚0.9			a.四角形状に鍛造
15-4	2面 土坑7	青磁 劃花纹碗	口縁部小片	—	—	[2.3]	b.灰白色 精良堅緻 d.暗灰緑色半透明 内外面施釉 e.良好 f.内面劃花纹
15-5	2面 土坑7	瀬戸 水滴	口唇・注口部欠損	1.45	3.15	2.9	b.灰白色 砂粒 良胎 d.灰釉 灰緑色透明 外面所々露胎 e.良好 f.内面自然釉付着 外面肩部に三重方形文を押印
15-6	2面 土坑7	鉄釘	先端部欠損	長[6.1] 幅0.6～1.3 厚0.5			a.四角形状に鍛造
15-7	2面 土坑7	土師器 甗	胴部片	—	—	[5.3]	a.上部斜位のハケ 下部横位のヘラ削り b.黄灰色 砂粒 雲母 白 色粒 やや粉質 良胎 c.淡黄橙色 e.良好
15-8	2面 土坑8	鉄釘	先端部欠損	長[7.7] 幅0.8～1.4 厚0.9			a.多角形状に鍛造
16-1	2面遺構外	青磁 碗	口縁部小片	—	—	[1.5]	b.灰白色 精良堅緻 d.暗灰緑色透明 内外面施釉 e.良好 f.内 面口縁下に一条線
16-2	2面遺構外	平瓦	左広端部側	長[8.2] 幅[12.0] 厚2.1			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.明灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.灰色 e.良好
16-3	2面遺構外	鉄釘	先端部欠損	長[4.4] 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に鍛造
16-4	2面遺構外	鉄釘	頭・先端部欠損	長[3.0] 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に鍛造
16-5	2面遺構外	用途不明鉄製品	完形	長6.2 幅1.0～2.5 厚1.0～2.5			a.頭部丸く、胴～先端部四角形状に鍛造

表3 層位別出土遺物一覧表

種別		出土層位		近代井戸	1面遺構	1面遺構外	2面遺構	2面遺構外	合計
		表土							
かわらけ	糸切り	小2	小1	大2 小25	大35 小27	大29 中3 小142	大1 小18		285
	手捏ね					大1	大2 小1		4
舶載陶磁器	青磁					碗4	碗7	碗1	12
	白磁						碗1 皿1		2
国産陶磁器	瀬戸			皿1 不明1	壺1 皿1 瓶子1	卸皿2 水滴1 華瓶1 入子1 碗1 鉢1			12
	常滑	甕1		甕12 壺3	甕12	甕47 壺14 磨耗陶片1	甕11 壺3		104
	常滑 片口鉢			I類1 II類2		I類7 II類6			16
	渥美					甕7			7
	備前					播鉢1			1
	山茶碗					尾張2			2
	山皿					尾張1			1
土製品	瓦	近代12	軒平1			平1	平1		15
	火鉢					瓦1			1
	伊勢					鍋1			1
石製品	硯					1			1
	砥石			1	1				2
	滑石製品					鍋転用1	鍋1		2
金属製品	釘					1	33	2	36
	銭			2	1		1		4
	その他						針1 不明1	1	3
自然遺物	骨			2			25		27
	貝			6	3		15	1	25
中世以前遺物						1	8	1	10
合計		15	2	58	88	366	44		573

図版 1



◀ 1. 1面全景 (東から)



2. 1面全景 (西から) ▶



◀ 3. 1面溝 1 (南から)



▲1. 2面全景 (東から)

▼2. 2面全景 (西から)





◀ 1. 方竖1 (西から)



▲ 2. 方竖1 南北ベルト土層堆積 (西から)



▲ 3. 方竖2 (南から)



▲1. 土坑3・4・6・7 (北から)



◀2. 土坑3・6土層堆積 (南から)



◀3. 土坑4土層堆積 (南から)



▲4. 土坑7出土瀬戸水滴 (北から)

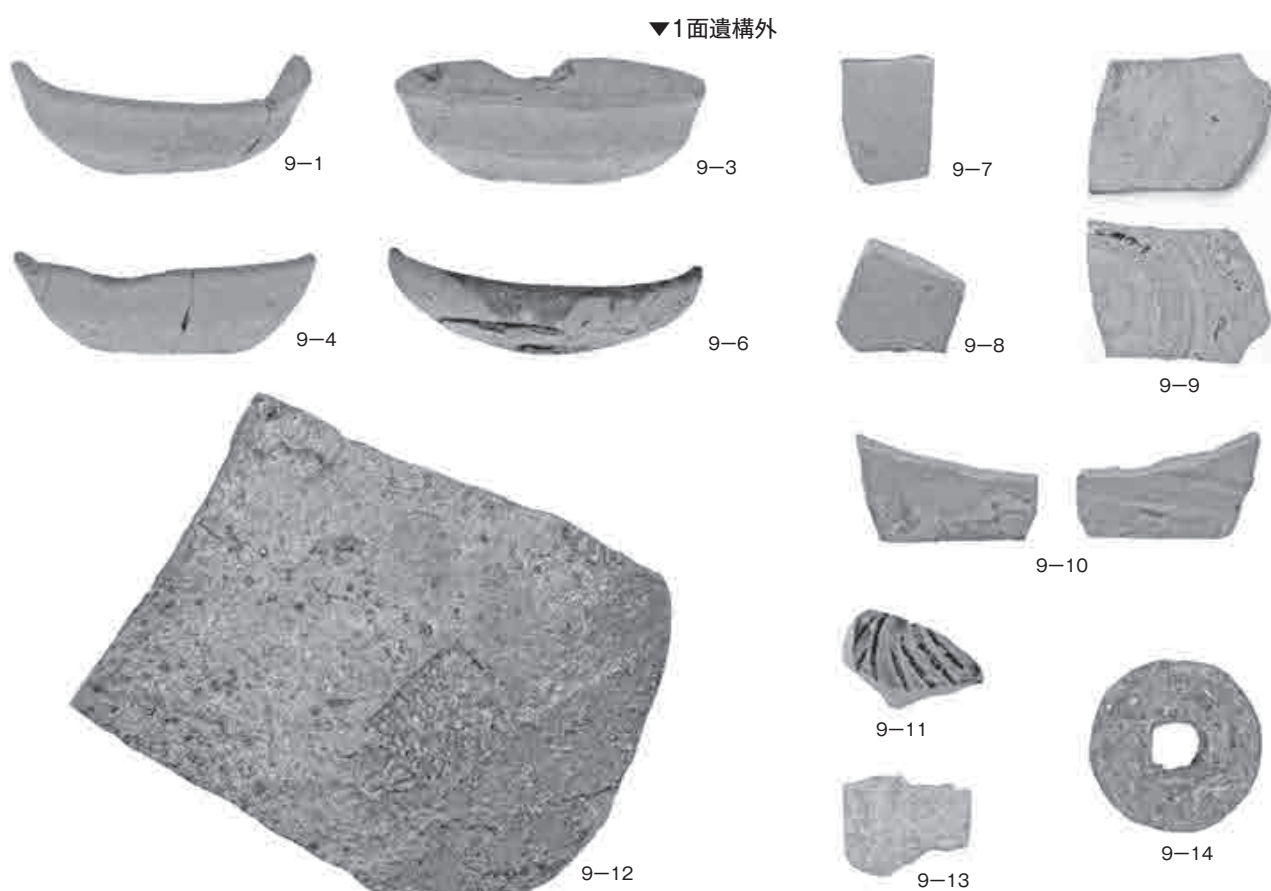
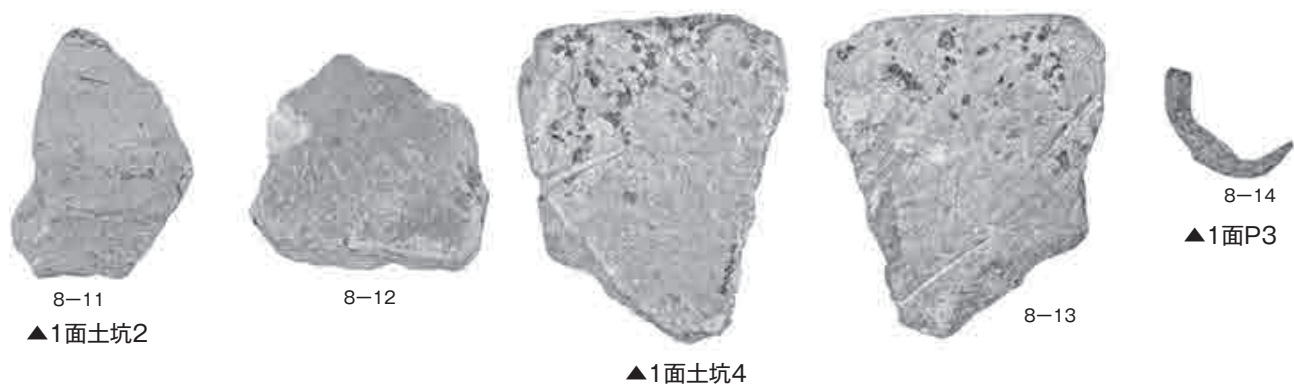
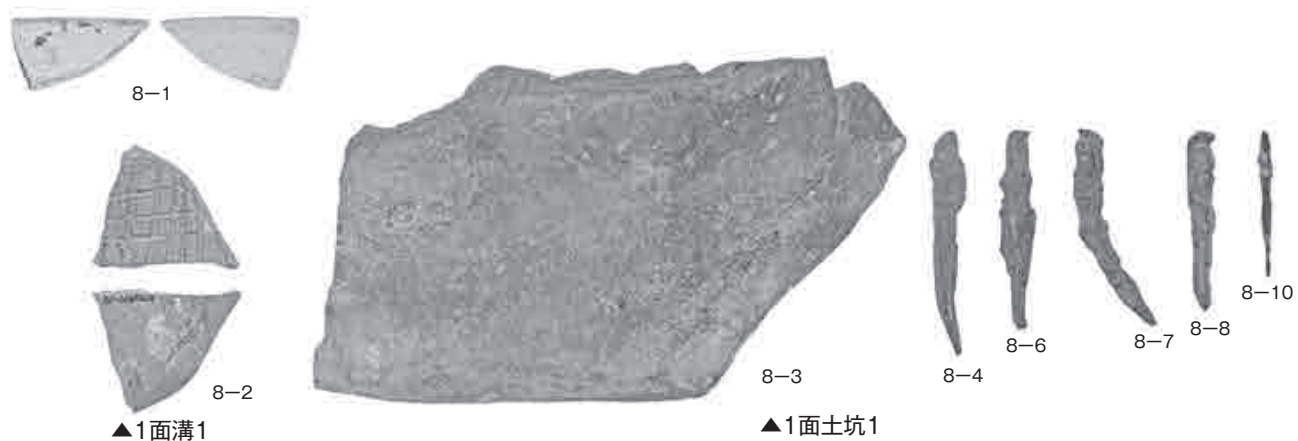


▲1. 調査区南壁土層堆積(北から)

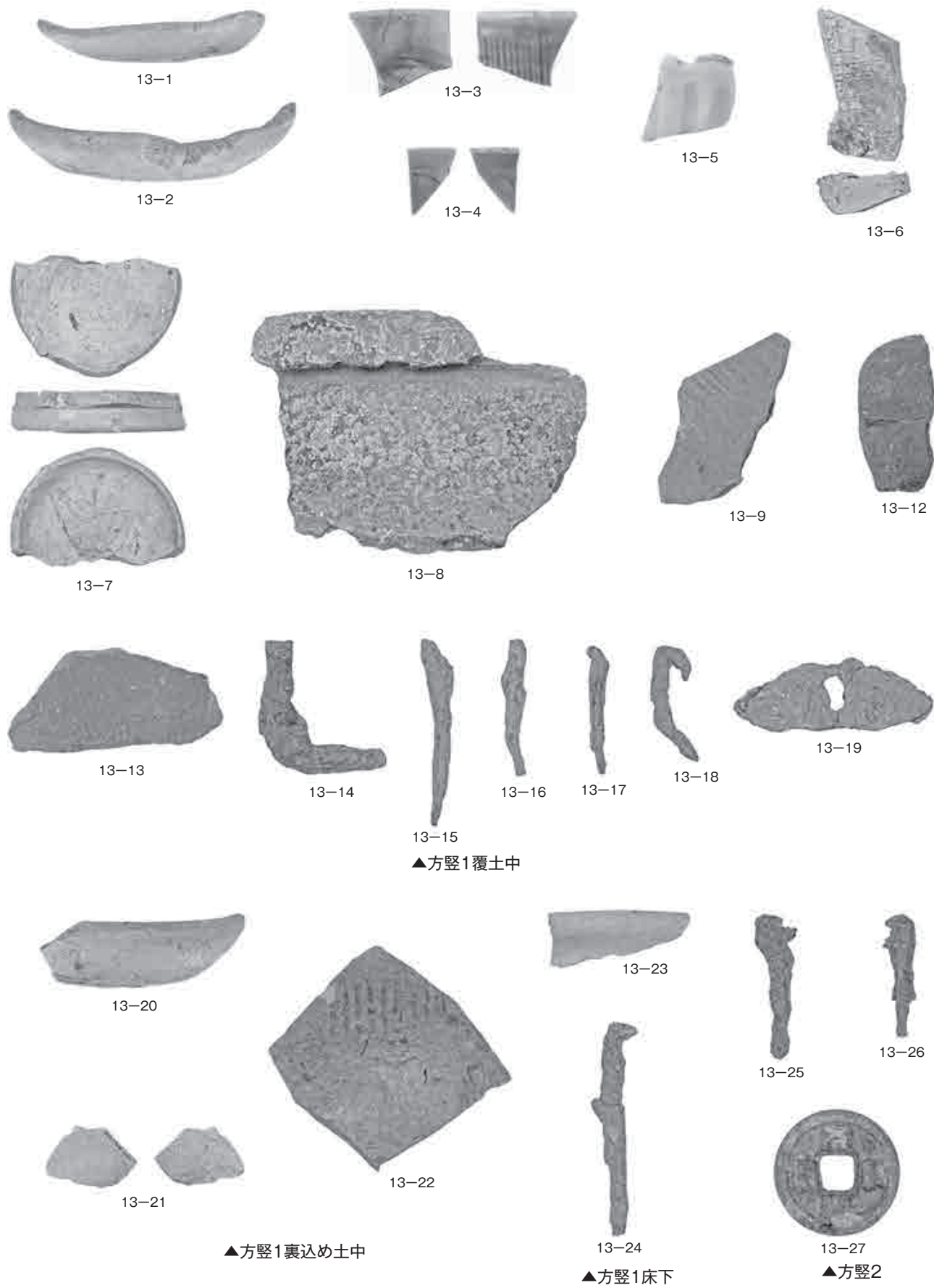


▲2. 調査区西壁土層堆積(東から)

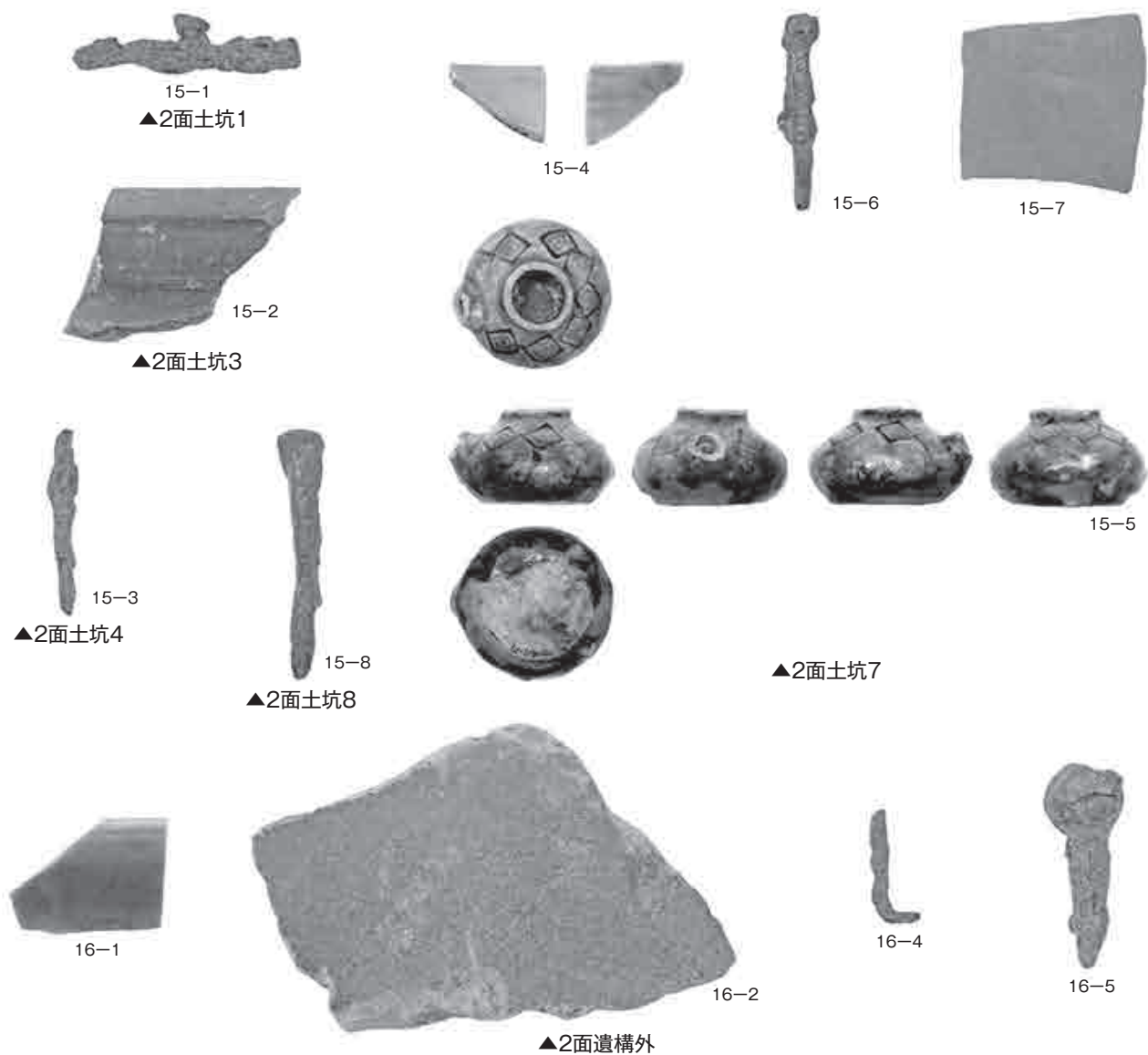




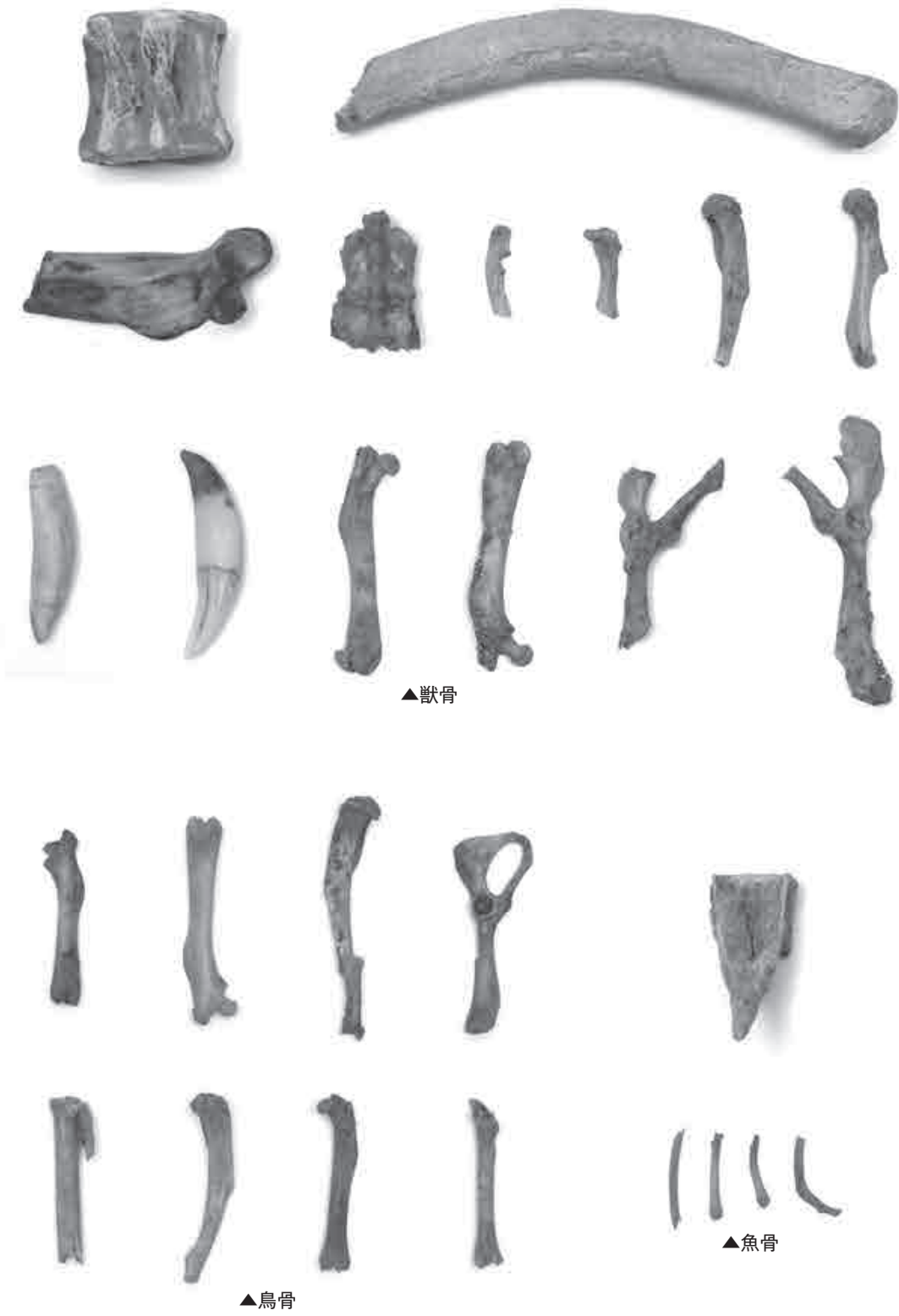
出土遺物 (1)



出土遺物(2)



出土遺物 (3)



出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成24年度調査報告							
巻次	29 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	馬淵和雄/森 孝子・赤堀祐子/滝澤晶子/森 孝子・赤堀祐子/滝澤晶子/山口正紀							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 198番	14204	63	35° 21' 03"	139° 31' 01"	20060202 ～ 20060406	98.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ささめいせき 笹目遺跡	神奈川県鎌倉市 笹目町 316番10	14204	207	35° 18' 55"	139° 32' 33"	20060615 ～ 20060724	42.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
いまこうじにしせいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 御成町 176番7	14204	201	35° 19' 14"	139° 32' 56"	20060718 ～ 20060925	55.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字瑞鹿山 398番	14204	434	35° 20' 09"	139° 32' 47"	20070206 ～ 20070330	40.25	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 48番6	14204	63	35° 21' 9"	139° 30' 50"	20070912 ～ 20070926	21.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
てんじんやまじょう 天神山城	神奈川県鎌倉市 山崎字宮廻 656番19	14204	384	35° 20' 38"	139° 31' 31"	20080526 ～ 20080617	49.07	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 579番8	14204	279	35° 18' 23"	139° 33' 22"	20080821 ～ 20080912	24.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
こめまちせいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 993番1外	14204	245	35° 18' 53"	139° 33' 08"	20081022 ～ 20081110	16.50	個人専用 住宅 (基礎工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝、掘立柱建物、 土坑、柱穴	土師器皿、舶載陶磁器、 瀬戸・美濃	
ささめいせき 笹目遺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、金属製品	
いまこうじにしせいせき 今小路西遺跡	都市	中世	土坑、柱穴、溝状 遺構、掘立柱建物 跡、板壁建物	かわらけ、国産陶器、貿易 陶磁器、瓦質製品、石製品、 金属製品、木製品、等	
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	社寺	中世	井戸、溝、掘立柱 建物	かわらけ、土器、国産陶 器、舶載陶磁器、木製品	
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝	かわらけ、土製品、金属 製品	
てんじんやまじょう 天神山城	城館跡	古墳	住居址	土師器、須恵器	
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	社寺	中世	土坑、柱穴、池状 遺構	かわらけ、国産陶器、石製 品、金属製品、木製品等	
こめまちせいせき 米町遺跡	都市	中世	土坑、溝、柱穴、 方形竪穴建物	かわらけ、国産陶器、石 製品、金属製品、木製品、 土師器	



鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29

平成24年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成25年3月29日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社











